

岡山県立博物館

研究報告

45

[史料紹介]
片岡松塘筆「相識簿」について …… 内 池 英 樹 …… 1

[資料紹介]
大福寺蔵「請雨経曼荼羅」について …… 岡 崎 有 紀 ……19

八幡大塚古墳の研究 …… 宇 垣 匡 雅 … 100

令和7年3月

岡山県立博物館

岡山県立博物館
研究報告

第四十五号

岡山県立博物館

「史料紹介」

片岡松塘筆「相識簿」^{そうしきば}について

内池 英樹

はじめに

小稿で取り上げる「相識簿」は、江戸時代後半の備前国にいた片岡彦輔（春及、松塘。以下文中では松塘と表記する）が書いたものである。松塘は、賀茂季鷹に和歌を学ぶと共に、藤井高尚や業合大枝ら国学の人々や、菅茶山のような儒学者、さらには木村蒹葭堂に代表されるような奇石標本の収集家等、幅広い分野の人々との交流が確認されている。これまでも岡山県立博物館において、平成二八年度特別展「発掘された日本列島」では松塘がメモした三角縁神獸鏡の写し⁽¹⁾、平成二九年度企画展「江戸時代岡山の学び―教育県岡山の源流―」では松塘が収集した奇石標本や化石を展示する等⁽²⁾、松塘の営みについて紹介してきた。調査を続けてきていた中で、「相識簿」全文を紹介することはなかった。そこで、小稿では、釈文と簡単な注を付して、とりあえず史料紹介の任を果たしたい。今後、当館蔵や個人蔵の松塘関係資料を可能な限り集めて、松塘の成果を復元してみたいと考えている。

「相識簿」について

「相識簿」は、平成十八年度から当館に寄託されており、縦一五・〇センチ、横一九・四センチの簿冊である。中身は、各地にい

た奇石愛好家を松塘が訪ねて巡った交遊録で、岡山県内だけではなく、四国や畿内を中心に実際に松塘が会った人物が網羅されている。松塘が書き上げた人物数は、一〇〇人を超えており、基本的には、国名、地名、屋号、人名という順番で記されている。また、誰の関係者かを書いているものや、どこで出会ったかを書いている場合も見られる。

中を見ていくと、遠くは「奥州福島 大円寺」とあり、書状を出して「悦応」という僧侶とやりとりをしていたことが理解できる。当館に所蔵されている片岡松塘書簡（全一三四通）の中に、本願寺輪幢から松塘に出した書状があり、それによると大円寺住職が九州巡りをするついでに、松塘に会いたいということを伝えている⁽³⁾。そのほかにも、宿泊先で出会った人や、尋ねて回っていった人もいたことが分かってくる。いずれにしても、相当な範囲を訪ね歩いたと言つてよいだろう。今回はほとんど紹介できていないが、当館蔵の片岡松塘書簡が一三四通あり、それらの宛先等と合わせて検討すれば、松塘を中心にした文人ネットワークが見えてくるのではないかと考えている。

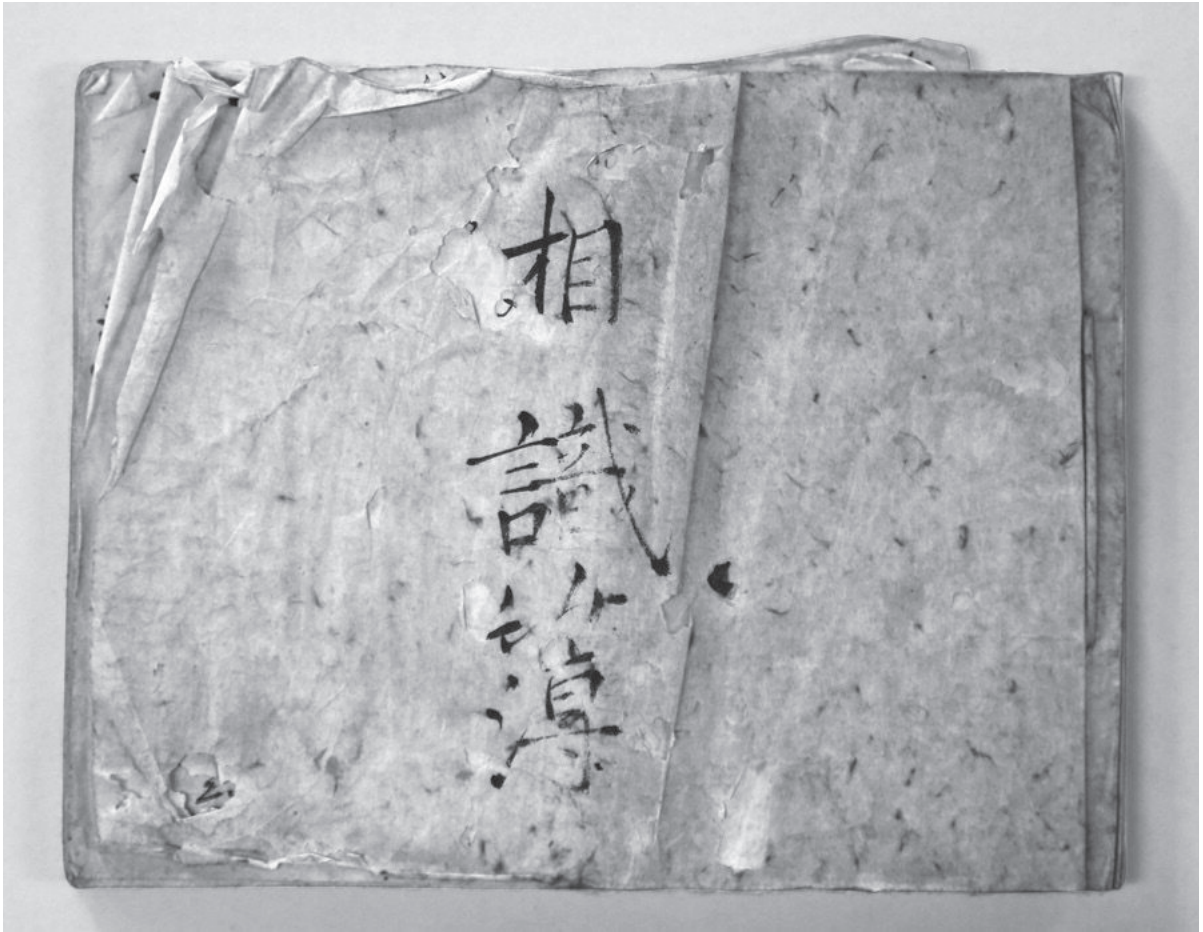


写真 1 相識簿表紙

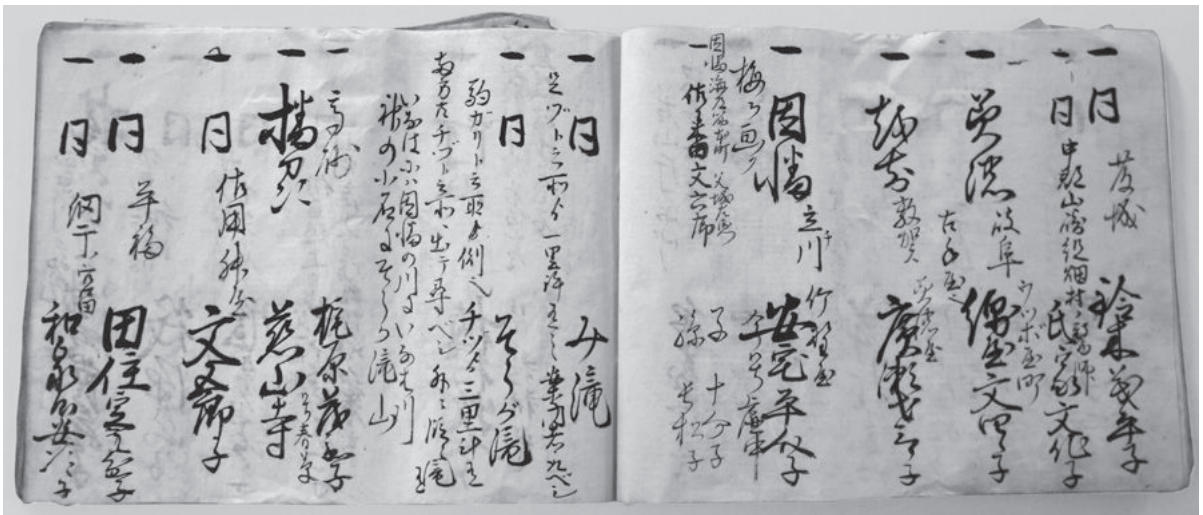


写真 2 相識簿内部

史料の紹介

1. 「相識簿」の翻刻は内池昭子氏が行い、内池英樹が全体の解説及び補注を作成した。
2. 人名・地名については旧字体を用いたが、その他については常用漢字に改めている。
3. 本史料は、岡山県立博物館に寄託されている。現物を閲覧した場合には、岡山県立博物館学芸課までご相談いただきたい。
4. 小稿作成にあたって、片岡俊彦氏に掲載の御許しをいただいた。記して謝したい。

史料 相識簿 江戸時代後期 個人蔵

(表紙)

「相識簿」

一 讃州 志渡 堺屋源吾⁽⁴⁾ 子
奇物家

一同 志渡寺小僧
コウドウ坊

鍛冶町堺屋長左衛門方宿
一同 白鳥ノ大保正 竹内宗助⁽⁵⁾ 子
奇物奇品譜ヲ製 号灌圃
又耕雲堂

アヤメ石 アメ石 玉キ石 黒柿化石

引田貝石 塩屋川貝石 竜ヶ峯金剛砂

八嶋ノ馬蹄石 阿州ノ菊文石 白峯磬石

又杜鵑玉章

一同 石田村守広^(蘇) 広瀬春平⁽⁶⁾

号林谷

一 讃岐 香西ノ内鶴^(市) 一村 雲屋子

称佐々木万四郎

一同 羽床村米田^{ハユカ} 飯山ノ東也 竹ノ内又三郎子

書画家 号雲涯子

高松宿丸亀町三田屋加右衛門所也

一同 六条村 阿部良平⁽⁷⁾ 子

(貼紙)

「一 讃州 山田郡本山村東寿院親類 川田十介子

一同 同断 未八月十一日逗留 宮竹次郎右衛門子」

一同 高松新町池田屋 中村安次郎子

一同 同 高松後藤氏 袋屋勘四郎⁽⁸⁾ 子

書家 号漆谷 又称木斎

梶原氏か

一同 柏谷三平⁽⁹⁾ 子

蘭山水画又詩文 号藍渠

万のふ屋隠居亀井氏か

一同 東溪⁽¹⁰⁾子

明画 料ヲ得テ画と云

一同 高松亀井町表具屋 弥介子

石家

一同 高松 浄願寺⁽¹¹⁾

石家

一同 和田浜 出来屋雪窓子

甥 藤村辰蔵子

同 同 熊蔵子

一同 三本松ノ南ミヅシ 円光寺

鐘乳石有

一同 宇多郡河原村大保正 宮井伝左衛門⁽¹²⁾子

酉九月来

同郡上法村伝左衛門子弟^(上法華寺)

一同 同 金作子

戌九月来 クリ熊野ノツマ^(栗熊)山ノ石ヲ賜^(堤山)

一同 香西ノ 堀屋与次兵衛子

此人ノ子、大坂美作屋辰三郎方ニ致奉公、

戌八月此方へ見舞ニ参

丸亀南条町角 笠嶋屋

一同 今主人 吉田長十郎子

石家 隠居 号休山

一同 丸亀堀^(端)ばた 綱屋武兵衛

画家 号関雪

一白鳥宮伶人笛吹 白鳥 岡与三右衛門⁽¹³⁾子

一好石 岡田ノ 木村直蔵子

岡田ノ矢根石出

一備中 宋粟村^{シサハ} 平田恭介子

町宿野田屋町 同隠居慈康子

北方屋紋次郎

一同 松山ノ南宇戸村 内藤三左衛門子

有河長伯門人^(貫) 藤原中心ト云

土佐ノ長諷名正之ノ弟子也

一同 足守士人 家田甚之丞子

一同 西原村 大庄屋 守屋喜藤太⁽¹⁴⁾子

町宿浜田町米子屋

一同 松山士人 森川蔡介子

一備中 松山士人 谷要蔵子

一同 同 官医 小谷雲仙子

一同 同所本町 山田屋荒木為五郎子

宿中嶋ノ伏見屋藤三郎 名ハ肅ト云

又紙屋町まし^(真島)まや三右衛門^(射越)

又状届ケ所、中嶋ノいこし屋喜右衛門^(伏見)

此人ノ所へ大坂ノふしミ屋久右衛門と申者参、其人届呉答

一同 松屋勘介子

一同 吹屋村 銅山ノ役人 大塚利右衛門⁽¹⁶⁾子

大同木珍藏

同 慶作子

内藤ノ門人

一同 背尾^(妹)

陶山藤藏⁽¹⁶⁾子

同 小藤太子

一同 同

盛隆寺⁽¹⁷⁾

一同 同

赤木良齋子

一同 倉敷

成羽屋与惣左衛門⁽¹⁸⁾子

一同

成羽屋隠居惣市子

五藏門人

一同

俵屋忠左衛門⁽¹⁹⁾子

一同 矢掛

田中屋政七子

一同 同

中西和作子

内藤門人

一同 矢掛本陣

石井源次郎⁽²⁰⁾子

一同 同所

大原屋柁兵衛子

内藤門人

号方齋

一同 鷲峯山⁽²¹⁾

チリナシ池⁽²²⁾ 増原^(座無)三里半 矢掛^(無)五十丁北也

一同 久山ノ八海石

成羽と松山ノ間ノ川中ニ有

一同 松山ト成羽ノ間也 福地^(シロチ)

右シロチニ菊銘石有、山ニアルト云

庄屋 山下熊藏子

真野利左衛門子ノ甥也

一同 成羽

貝石有

一同 石蟹村^(イシガ)

石蟹有 二井見ノ近辺^(新見)

一同 ヲバ坂

ブトフ石有^(葡萄)

一同 窪屋郡山手口ノ宿村⁽²³⁾ 守安三郎右衛門子

町宿野田屋町北方屋惣介

名貴古

姉りき子

一同 玉嶋

讃岐屋安左衛門子

奇物家 新町大坂屋伝右衛門子

石家

息幾之丞子

一同 総社

本戎屋 亀山徳右衛門⁽²⁴⁾子

椎の屋と云

名道本⁽²⁵⁾

一同

同 久平⁽²⁶⁾子

一備中惣社

小寺屋平田忠左衛門子

号麻生

一同 東阿曾村

鳥越新介⁽²⁷⁾子

徳川四郎ノ末葉

一同 マナボシ村 (真星) 子ヤ官次子	一同 新大工丁 名昌住 字子兎
古文書・甲冑有	一同 杉田官次郎子 号節行居
一備後 府中 みそ屋甚兵衛子	京大宮通七條上ル 宮崎鹿藏子旅宿也
一名栄五郎	一同 村山長之進子
一同 尾道 御所町 福岡屋新太郎子	号和翠
一作州 (久世) 久瀬庄屋 福井周藏子	一同 西上ワ町 野口京太夫 ⁽³²⁾ 子
一同 津山人 玉置宇左衛門 ⁽²⁸⁾ 子	一同 十人町 松浦東溪 ⁽³³⁾ 子
於赤穂屋為相識 ⁽²⁹⁾ 隠居仁平子	名陶 字君平
一備後福山 修験 青龍院 字牛海	同 百介子
内藤社中	一同 勝山町 柳屋新兵衛子
一山南 同断 桑田藤三郎	一同 新町宿老 徳見茂四郎 ⁽³⁴⁾ 子
一安芸 広嶋ノ白嶋 ハクシマ 山田屋幸藏子	一同 板津町問屋也 林常右衛門子
広嶋京橋 平ツカ ^(塚) 町南ハヅレ	一肥後 鶴崎ノ川向イ乙津 後藤作四郎子
一同 山田良平子	此所ニ花屋与兵衛住居ノよし
一同 本川西横町 八木屋彦兵衛子	一赤間関 崎屋幸吉子 岸活藏子
一赤間関 三百目ノ 油屋仁左衛門子 号羅風	名文 号貫道
状出し所、大坂越中橋東へ入 尼崎屋太七	一肥後 熊本新町壺丁目 笠屋藤右衛門子
一長崎 築地 村山久平次 ⁽³⁰⁾ 子	一同 熊本田ばた 長瀬七郎平子
大坂江戸堀壺丁目 子 専次子	名真幸 マサチ
中筋屋藤兵衛方 方 号子祐	一同 同 斎藤権之介子
状届ケル者也	一同 同 高本慶藏子
一同 桶屋町名村多吉郎甥	一同 阿蘇霜ノ宮 山口栄五郎子
名村進八 ⁽³¹⁾ 子	一同 内ノ牧 万徳寺

(和歌山)

一 若山片原町

筆屋喜兵衛子

硯奇石有

号蘭溪堂

一 紀伊 若山湊ニ而

吹上寺

松丘と云

号円水

一同 若山寄合橋南詰ノ橋町北側

国校講官侍講

岸権兵衛子

侍読

名弘毅 字剛先

号熊野老人

一同 同儒員

同順藏子

大坂南久宝寺町二丁目

号四時窓主

堺屋十次郎へ状出べし

名弘義 字世煥 号南嶠

一同 城内内

野呂九一郎子

号介石

一同 藤城

鈴木義平子

一同 中郡山崎組畑村ノ医師 氏家文作子

一 美濃 岐阜ウツボ屋町

綿屋文四郎子

古手屋也

一 越前敦賀

美濃屋広瀬才三郎子

一 因幡 立チ川

竹野屋安宅平介子

梅ヲ画ク

今号虚中

因幡海道筋本町

父城左衛門

一 佐々木田文六郎 子 十介子

孫 長松子

一同

(三) み滝

足ヅト云所ハ一里許有之、案内者取ベシ

一同

(副) そうが滝

駒ガリト云所ノ側也、チヅハ三里斗有、

南方共チヅト云所へ出テ尋ベシ、外ニ段々滝有

いなはにハ因幡の川にいなは川

神の小石にそうか滝山

一 高砂

梶原茂兵衛子

号春草

一 播州

慈山寺

一同 佐用

升屋文五郎子

一同 平福

田住定之進子

一同 網干ノ宮田

和泉屋安次郎子

正条川ノ西堤十一丁登

一 播州 野田村

津嶋良藏子

佐用東一里ニ有

一同

和津ノ 筏源左衛門子

山崎ノ渡り上り

一同

イダ石ノ 鳩屋孫次郎子

貯水玉ヲ藏ス

父ハ馬肝ト云俳人

一同

佐用郡上月 真嶋屋徳左衛門子

山中鹿之介防戦城跡ノ麓云

号三島

麻植郡西麻植村

令子 同 長左衛門子

一阿波 植村牧介子

板野郡引野村前坂山産 号耕耘堂

恵投於イモムシ石

大坂八軒屋ヲ大和川ヲツイテ行ベシ

一河内 川田村 藤井元仙老

一大和 ソツカミ イチモト 添上郡榛本村 中村俊介子

人丸ノ祠有 ノリヨシ 名訓栄

一同 玉造島井村 伊川俊庵妻

廿五弦琴ヲ弾

西横堀新町橋壺丁目

一大坂 村上屋勘右衛門子

号西渠

一同 平野町難波橋角 中村芳中子

一同 今橋二丁目北側 森川曹吾子

号竹窓

一大坂 過書町銅座 長井三郎兵衛子

堂嶋新地中ノ町三丁目

一同 伊勢元輔子

一同 江戸堀北側 篠崎長兵衛子

字安道

石町御祓筋西へ入

一真野石 ヘカヘ

又うつば新天満町 ヘカヘ

小西十蔵前

心斎橋筋淡路町西側

一同 奥田昌斎子

心斎橋筋南本町南へ入西側

一同 書林 河内屋義介子

心才橋筋北久太郎町北へ入 ネ

一同 河内屋多介子

代宗吉

上へ町本町筋南新町二丁目

一同 表具屋新次

石中買 真二ト書

号黙友道人

平野町界筋南西角 (堺)

一同 藤木順蔵子

難波橋淡路町長浜屋

一同 次兵衛子

高松ノ御用ヲ承ル人 号耶人

淡路町御霊筋西

一同 藤井鴻平子

一同 瓦町御靈筋東
浜田希庵

号杏堂

一同 天満
川崎屋太郎衛門子
号春嶽

(付紙1)

「西筋

南北筋

大川町

西横堀

過書町

渡辺筋

今橋

御堂筋 御靈筋

高麗橋

淀屋橋 呉服町南へ入
(兼 蕨)

伏見町
(呉服)
こぶく町トモ云

ケンカ堂(35)

道修町

心齋橋筋 南本町南へ入

平野町

河内屋義介

淡路町

井池

瓦町

(梅 檀)
せんだんノ木橋筋 南ハ三宮橋

備後町
北ノ御堂北ノ堀

中橋 ト云

安土町

難波橋

本町

同南ノ堀

境筋

(ミ)
南本町

八百屋町

唐物町

(等)
ほうき屋町

北久太郎町 南御堂北ノ堀 東堀

南久太郎町

北久宝寺町 同南ノ堀

南久宝寺町

博労町

順慶町

安堂寺町

塩町

長堀 「

(付紙2)

「二大坂 唐物町老丁目南側 大岡正伯

一同 玉造稻荷門前 伊川順篤

一同 新地上町釣鐘町御祓筋 淀屋十右衛門

心齋橋筋平野町南へ入

一同 尾張焼店 山田屋徳十郎

一同 伏見町中はし筋角 唐物店 大坂屋万介

一 伏見町心齋橋西へ入 万唐物雅物引田 (ミ) 「

天満遠藤様御屋敷

一大坂 岡田彦兵衛子

号米山人

一同 布屋町 武内西左衛門子

書家 印刻 号華亭

一同 博勞町御堂筋 前川市右衛門子
篆刻家 号虚舟

一同 道頓堀日吉橋少し下四郎兵衛町
阿波屋松兵衛殿

伊木末米屋太兵衛殿弟

一同 南安治川壺丁目 升屋加兵衛子

伊藤莊司子旅宿

(指直)
ジキシ庵

一同 大輪大和尚

所ハ山ヲバセ

餅ツキ寺⁶左へ東へ行

界筋南本町角

一同 琴笛謡物 丸屋久兵衛

奇石家 榊ノ名神楽箱所持

一同 尼崎町 河井立斎³⁶子

古体和歌

一同 博勞町界筋東へ入南側 大原東野³⁷子

一同 瓦町御霊筋東へ入北側 宮本君山子

一京 木屋町西石垣町下ル所 尾州ノ人

山辺内記子

号雪屋

一京 東木屋町松原下ル 亀井清兵衛子

龜山主人方ニ而可尋³² 名澄 字子泉

号竜門

一同 富小路四条上ル東側 柴田喜太郎³⁸子

号義董

四条高倉西へ入南側 岡本豊彦³⁹子

一京 柳馬場錦上ル東側 龜屋茂兵衛子

一同 両替町押小路下ル 真野多門子

閑院宮御内 今大坂石町御祓筋西へ入南側 八軒屋ノ裏也

一同 右同所上之方 井上研水子

一同 蛸薬師³⁵ふ屋町東へ入北側 玉屋半兵衛

玉工也

一同 同所南側 玉工也 玉屋久右衛門

一同 蛸薬師柳馬場東へ入南側 三浦吉兵衛

表具屋也

室町デミツ^(出水)上ル、はゞや利兵衛方ニ而

一同 寺井次吉郎

同 綾小路馬場西へ入 雁金屋次兵衛

同 柳馬場誓願寺下ル アブミヤ^(鑑屋)太右衛門

(付紙3)

「上 今出 武者ノ一条 中立ニ 上中下丁

出水 下立 さわら^(橋木) 丸 竹 夷

新町 金座 西洞 小川之錦地 油小路
(醒ヶ井) さめがい 堀川 御城地之猪熊 同上 黒門 大宮
一貫町 下ニテ岩神丁 下ニ而アタラシ丁

一同 タコ薬師界町西へ入北側 越後屋太兵衛
扇屋也

一同 柳馬場夷川下ル 東側 丹後屋太兵衛
蒔絵師

一同 両替町押小路下ル西側 亀屋久右衛門
西大寺紙屋の養子ニ参ル人也

一同 五条森下町東へ入 松本才次子

一同 五条通大黒町角 橋本甚平子

一同 ふ屋町五条上ル 菱田伊織子

一同 西堀川高辻上ル とくや五右衛門

一同 高倉姉小路上ル東側 小栗文之進子

名光胤 字万年
号十洲

一同 東洞院夷川上ル西側 清田謙蔵子

一同 御池高倉西へ入 白粉屋加兵衛

一同 廬山寺御用人 久保伊織子

一同 室町蛸薬師下ル 藤左仲子

名彝 字倫卿

一同 大津柳町 近江屋利兵衛
北山田木内小半子之宿

(付紙4)

一同 油小路三条下西側 近江屋近藤吉左衛門康紀

一同 錦小路室町西へ入 夷屋一右衛門千楯⁽⁴⁰⁾

一同 西堀川仏光寺下ル 書林 河南四郎兵衛

長崎新大工町ノ人 隠宅^(春)シユン徳寺ノ下片渚村
一同 松田官次郎

京大宮通七条上ル 宮崎鹿蔵方ニ仮居よし

一同 烏丸三条上ル 生嶋雲仙

一同 加茂竹ヶ鼻 山本安房守季鷹⁽⁴¹⁾号雲錦

両替町二条下ル 隠居有

一同 油小路三条下ル 近江屋近藤吉左衛門康紀

一同 室町五条上 大窪清右衛門芳広

一同 錦小路室町西へ入 書林 ゑひすや市右衛門

千楯

(付紙5)

一同 三条界町東へ入北側^(冊)

一同 ちきり屋と云 西村南溪子

一同 姉小路高倉西へ入北側 扇子屋 正風亭

画家也 風流扇有、嘯 雄崎新六

一同 四条東洞院 西へ入北側

一同 界町姉小路上ル東側 近江屋文治子

画家詩作

一同 四条東洞院西へ入 中野三郎君

号龍田

一同 四条河原町東へ入 春日龜弥太郎隠居

隠居号担齋

同 号楊洲

玉屋彦四郎

維明和尚門人 画梅

同 号黄洲

俗屋慶三郎

画菊

一同 姉ヶ小路高倉西へ入 一文字屋雄崎新六

号嘯風

└

名弘道 字子忠 三条通河原町西へ入

一同 北邑氏 号三遥 井筒屋平太郎子

一同 河原町三条下ル東側 伊丹屋安兵衛子

天龍寺

金閣寺

アタゴ

一丸石

角石

五彩石

(伊勢)
イセ神路山

一細石 河内大黒村 大黒似像

大黒寺ノ前ノ流ニ有

(紀伊)
キイ日高ノ

一木賊石

間町御池上ル所丸屋孫一郎内ニテ

一京

茶室金四郎子

名実寿

一同 四条界町西へ入 上茶屋卯八子

牛窓紺浦磯屋平五郎旅宿

一同 室町馬辻上ル所 瀧川政之丞子

伊藤莊司子旅宿

一同 木屋町松原上ル東側 山辺内記

一同 木屋町二条下ル 大原左金吾⁽⁴²⁾

三月廿八日 平安第一桜ニ而 号吞響

四月十三日 西照庵 男哲蔵

三条通ちきりや

一同 界町東へ入北側 南溪

一同 益山備中守様御家中 春木門弥⁽⁴³⁾

号南湖

一同 室町四条上ル西側 樂器師 太西越前

肥後五家お出、紫ノ名笛有

一本州 番田 近藤三次⁽⁴⁴⁾子

名保定 字戢穀 号鼈山

一同 佐藤周吉子

名恪 字子謹

一同 市原兵介子

名道興 字默容 号旭崖

一同 香登邸 三倉田定五郎子

名正 字興夫 号担和

一同 姫井貞吉君

名元哲 字仲明 号桃源

一同 野田又十郎君

名成 字子章 号西派

一同 三木幸助君

名貞正 字子幹 号介石

一同 市之進君

名貞憲 字慎夫

一同 岡山石関町 赤穂屋 若林叢亭⁽⁴⁵⁾子

名正晁^{アキラ} 字

一同 津高郡野々口 大村宦右衛門⁽⁴⁶⁾子

町宿下出石町 同 瀧之介子

広表屋伝十郎^{ヒロモ}

一同 同所 横山有隣子

一同 小原大之助君

名正修 字業夫 号梅坡

一同 山内慶介君

名彰 字掃庭 号梅顛

一同 水田恒太郎君

名恒 字君亭 号福洲

一小豆嶋 上へ村年寄 村上平左衛門子

一同 橘ノ年寄 広瀬作太夫子

号卯明堂 称橘中

一同 小辺^(部) 年寄 森正兵衛子

一同 大辺 年寄 赤穂屋喜左衛門子

一同 池田 柴屋 岡田久左衛門子

一同 同 年寄 平井兵左衛門子

(船場)
せんば 梶木町御霊道を西へ入

一大坂 舟引佐仲老

河合順道老師家

堂嶋中ノ町河内屋裏ろじノ内

一同 河合順道子

二本松領安達郡南杉田駅

一奥州 高橋日向正

同所落合 安斎久左衛門

号秋郷

一越前敦賀東浜町 河内屋十左衛門子

一同 船町 美濃屋 才三郎子

一奥州福嶋 大円寺

書状出候所 名悦応

京ふや町三条下 日野屋五郎兵衛方へ
(魁屋)

一加賀 金沢タテ町 武田兵次郎子

名実敬

一小豆嶋 橋ノ 広瀬作太夫子

メノウ石 桜石 緑青石か約置

一讃州 金毘羅 石原貞介子

名徽 字后琴 号飲竜 又号爽軒

高松様家来

一江戸 金杉屋敷 山崎十蔵子

進藤悦之進子相識

一同 同断 板倉十之進子

宝物家

一同 備前向御屋敷ニ而 太田万次君

山川十右衛門君御家来

一同 同断 金平

一水戸 小菅 陣屋 岡野庄五郎君⁽⁴⁷⁾

号逢原堂

名従 字子言

一越中 高岡利屋町^{トギヤ} 内藤貞孺子

息 彦鑑^{ケンカン}

一同国 同所御馬出し町 棚倉屋小左衛門子

一金沢 上堤町 津田随分齋子

父翁 号豹阿弥

名養 字徳夫 号菜窠

一越前 松岡ノ 栗屋秦九郎右衛門子

名家邦 字子保

一金沢 宮竹屋 純蔵子

詩人 号鶴山

一奥州 白川士人 広瀬台八⁽⁴⁸⁾子

名典

同所中町 屋号小の屋と云

一 古体和歌 先崎庄吉子

名盛昌 妻名益

同馬町法花宗皇徳山円妙寺

一 知見院 日照

白川中町大坂屋喜右衛門

一江戸小石川 相田勘介子

一仙台 四番町 志村篤次子

号石溪 名弘強

一同 大崎ノ八幡宮社家 大場山城

号雄洌

今息ヲ山城ト云

一ノ関五六丁北

一同 山ノ目 大庄屋 大槻丈作子

弟大槻民次子、江戸御屋敷ニ交代勤

一同 石巻ノ南湊町 安田道育子

但し、石巻ノ川ヲ渡リテ行也

一尾張 名護屋士人力筋 岡田半十郎⁽⁴⁹⁾子

名宝 字子善 号張古 又梅間

一同 同所医 井上専庵子

号朱樹 又子朗

一同 本町桜ノ天神 靈岳院

古瓦家

所不知 越後屋喜右衛門

状出所、京御池通糸屋長左衛門

甲府山田町井筒屋

一甲州 鮎沢吉六子

息平左衛門

一同 酒折神主 飯田太蔵子

名正房

一同 穴山村神主 生山大隅守⁽⁵⁰⁾子

名正方

一同 大八田村 輿石土佐守子

名義重

(付紙6)

「箕山 土佐 北原辰次郎

髪山 同 箕浦幸太

香橘

立原任 水戸 立原甚太郎」

一金沢 土人 寺田九之丞子

一同 土人 木下槌五郎子

一京 東寺ノ後山吹町 安田弾正子

一同 高台寺ノ 薬王院

季鷹社中

京五条橋下平井町

一万年ろうそく はりまや伊兵衛

一越後新潟古町画人 石川龍助⁽⁵¹⁾子

号侃齋

状出し所、京二条通

界町角 書林 林伊兵衛

京御池八幡前 大津屋勘兵衛

同所 沢屋文介

一越後 同新町 宮崎庄太郎

号北汀

一江戸 新銭座 司馬江漢⁽⁵²⁾子
 一号玄対 赤ばね 渡辺又蔵
 一号赤水 同 忠蔵
 一播州龍野下河原町 綿屋平次郎
 室津中町佐伯屋喜兵衛へ書状出候事
 一同所堅町 万屋惣介
 号素卜
 大坂天満^(小島)こしま町難波橋筋少し西
 一粟田焼ノ店 茶碗屋平右衛門
 青磁かご・茶ひん 壺匁五分
 梅ノ絵 とちり茶ひん 壺匁式分
 大坂順慶町二丁目 心齋橋筋^(安堂寺)あんとう寺町角、平野町角か
 一金物類 大黒屋作兵衛
 半廻り分壺匁八分 一廻三匁六分
 一痔一通根切薬 本家調合所
 取次所平野町心齋橋北へ入 南都南城戸町
 松屋勘兵衛 櫛屋卯右衛門
 中ノ嶋西信町 濃人橋松屋町角
 和泉屋清兵衛 有馬屋佐兵衛
 嶋町式丁目 谷町濃人はし筋南へ入
 山田屋新介

富屋喜市
 天満島居筋瀧川町西へ入 嶋ノ内周防町堺筋角
 尼崎屋喜八 村上喜兵衛
 新町通筋北側 吉野家宇兵衛
 南堀江桑名町
 明石屋宇兵衛
 同^(隆平)りうへい橋南詰西へ入
 若江屋次郎兵衛
 一近江 彦根北野寺内 真勝院
 一徳嶋 土人 猪子良蔵子
 一同 同 渡瀬宇吉
 一同 佐古壺丁目 花屋九右衛門
 一淡路 三原郡七川浦 小川輶庵
 今在徳嶋助藤町土屋多介方ニ而可尋
 一近江 彦根北野寺内 真勝院
 名深隆実成
 一京 烏丸五条上 中山菊雄
 大坂南堀江三丁目 名静風
 大谷屋半兵衛屈所
 一製術家 津山京町 岸本隆溪
 京白川橋桜ノ宮町
 一

状出し所、大坂順慶町三丁目小嶋屋善兵衛

長堀高橋夜須屋貞次郎

一土佐 高知朝倉町 武藤忠左衛門

同 忠五郎

一同 田野浦 宮地太冲^(他)₍₅₃₎

《註》

- (1) 個人蔵「古鏡之図」。当館に寄託中である。
- (2) これらの奇石標本等についても、当館に寄託中である。
- (3) 片岡家旧蔵書簡集A―12「片岡彦輔宛本願寺輪幢書状」。文中には、大円寺和尚が九州巡りをするので、その際に面会を希望していることが書かれている。さらに、松塘が関東に行った際に、大円寺和尚と松塘が面会したことも記されており、少なくとも二度目の面会を求めていることになる。
- (4) 平賀源内の甥で陶工。
- (5) 讃岐国白鳥松原村（現香川県東かがわ市）の俳人で、大庄屋の竹内宗助のこと。『閑窓録』の筆者。
- (6) 讃岐国大川郡寒川町石田東村森広（現香川県さぬき市）生まれで、篆刻家・漢詩人。
- (7) 讃岐国出身で、大坂に居住していた。篆刻の他に、書画や詩も良くしていた。
- (8) 讃岐国高松出身で若い時に隠居した。城下では豪商で知られており、菅茶山や頼山陽、柴野栗山らと交友があった。
- (9) 梶原藍渠。讃岐国出身で歴史家。「讃岐国名勝図会」の編集等を行った。
- (10) 亀井東溪。讃岐国高松城下南新町の人。画才があり、京都や長崎で学んだ。
- (11) 讃岐高松藩主菩提寺。
- (12) 宮井家は天明七年から鶴足郡の大庄屋を務め、豪農として近隣の村々に聞こえた。
- (13) 徳島県立文書館森英雄家文書（[A301196002](#)）に名前が出てくる。詳細は不明。
- (14) 浅口郡西阿知村守屋家。大庄屋を務めた。
- (15) 吹屋村の豪商大塚家（福岡屋）。
- (16) 都宇郡妹尾村（現岡山市南区妹尾町）の陶山家。勝長と称した。
- (17) 慶長十（一六〇五）年、城国院日鳳を開山に信城院殿日友尊尼が娘（宇喜多忠家の子、宇喜多詮家の妻）の菩提を弔うために開創された。
- (18) 窪屋郡倉敷村（現倉敷市本町）在住。黒瀬姓。
- (19) 窪屋郡倉敷村在住。倉敷村役人を務めた。
- (20) 矢掛宿本陣当主。現在、住居は重要文化財に指定されている。
- (21) 矢掛町東三成にある捧澤寺のこと。
- (22) 矢掛町東三成にある池。
- (23) 現在の総社市宿。
- (24) 現在の総社市駅前付近。

- (25) 文政九（一八二六）年に亡くなった徳太郎のこと。元戎屋九代で、文人としても知られており、菅茶山や藤井高尚、頼山陽等と親交があった。
- (26) 亀山家の分家（東戎屋）で長常のこと。
- (27) 藤井高尚子弟。
- (28) 津山城下に在住。三室屋。隣の仁平も同じ三室屋。
- (29) 岡山城下の赤穂屋のこと。
- (30) 岡山県立図書館のレファレンス事例によると、「明治二年十月二日付の文書に「備前用達 村山久平次」が「備前少将 松田正雄 水谷六郎」を「御当地へ罷越、私宅へ止宿」させる届け出記録が確認できる」とある（レファレンス共同データベース二〇一七年七月五日作例事例より）。
- (31) 長崎にいた阿蘭陀通詞のことか。
- (32) 「長崎唐蘭船交易覚書・法政大学図書館所蔵・翻刻（４・完）」八三頁掲載の書状に、「御役所附」の中に名前が見られる（https://hosi.ecats-library.jp/data/repository/00011740/shigaku_24_furoku.pdf）。
- (33) 長崎の儒者で、長崎奉行組下唐人番等を務めた。
- (34) 長崎市中において、「唐物売買筋之」ことで尋ねがあり、そこに該当人物の名前が記されている。
- (35) 木村兼葭堂のこと。
- (36) 川井立牧の子。医者で和歌も行った。
- (37) 大坂に住み、花鳥・山水画のほか人物画を得意とした。博物学にも通じ、晩年は讃岐にうつり昆虫を収集した。
- (38) 備前出身で、京都四条派の松村月溪に学んだ。「妓女図」は当館所蔵。
- (39) 備前出身で、京都四条派の松村月溪に学んだ。
- (40) 本居宣長門下の城戸千盾のこと。
- (41) 賀茂季鷹。上賀茂神社祠官で、片岡松塘は門人。
- (42) 儒学者であり、画家としても知られた。大原吞舟の父。
- (43) 木村兼葭堂等に学び、山水・花鳥画を得意とし、谷文晁と並び称された。
- (44) 現玉野市番田の豪農近藤家のこと。
- (45) 現在の岡山市北区石関町にあった赤穂屋。桂園派の一人であり、木村兼葭堂日記にも名前が見られ、奇石収集家でもあった。片岡松塘とも懇意であったと片岡家に伝わる。
- (46) 現在の岡山市北区御津野々口の大村家。金川城松田氏の家臣で、後に帰農して

大庄屋を務めた。片岡松塘収集奇石の中に、野々口村で採取されたものがある。

(47) 水戸藩士。同じ水戸藩士立原翠軒（水戸彰考館総裁を務めた）の門人。柏崎順子「立原翠軒の門人岡野庄五郎宛書簡」『一橋論叢』一二五巻三号、二〇〇一年）参照。

- (48) 白河藩士で儒者。藩主松平定信の侍講となり、藩政にも参加した。
- (49) 尾張藩士、梅の絵を得意とした。
- (50) 甲斐穂美神社の祠官で、和歌を加賀美光章・日野資枝に学んだ。
- (51) 木村兼葭堂等に学び、山水墨竹画にすぐれていた。
- (52) 画家、蘭学者。平賀源内の影響を受け、洋風画を研究した。油彩の風景画を手がけ、西洋の天文学や地理学も紹介した。
- (53) 土佐出身で、大坂で儒学・医学を学び、土佐藩に仕えた。

※人名については、主に「Japanknowledge掲載の『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇一年）」「岡山県歴史人物事典」（山陽新聞社、一九九四年）によった。





涌地蓮華金剛經卷之三



写真3 十卷抄(經法) 奈良国立博物館蔵



〔資料紹介〕

大福寺蔵「請雨經曼荼羅」について

岡崎有紀

はじめに

雨を降らす祈祷の一つに、請雨經法がある。主に古代・中世にかけて、宮中の神泉苑において真言宗僧が実修した密教儀礼であり、諸龍王を招いて降雨を願うものである。大規模な修法を意味する「大法」の一つでもある。

請雨經曼荼羅は、請雨經法を実修する際に仮屋内で使用するもので、大壇の壁に懸ける懸曼荼羅と、大壇の上に敷く敷曼荼羅の二種類がある。懸曼荼羅は「大曼荼羅」や「本尊曼荼羅」、「娑伽羅曼荼羅」などとも呼ばれるが、本稿では懸曼荼羅と呼びたい。

修法の場には、雨を降らすためとあってか、青幕、青幡、青色で染められた飲食菓子などが用意され、実修者も青衣を着した。請雨經曼荼羅も例にもれず青を基調としたようである。

しかしながら、請雨經曼荼羅は修法が終われば破棄されることになっており、実際に使用された古い遺品は現存せず、図像集や教王護国寺蔵「密教図像」（重要文化財）一〇点のうち掛幅装の白描図像などで図像が確認されるのみである^①。中近世の作例についても、請雨經法自体が中世に衰退したことを考慮すれば、ほかの仏画に比べ多くは遺っていないと考える^②。

本稿で紹介する請雨經曼荼羅（写真1・2）は、真言宗御室派の

聖満山大福寺（岡山市）に伝わったものである（以下本作または大福寺本と略す）。江戸時代の制作で、保存状態が良く彩色もよく残る。本稿では、まず大福寺本の図像の確認を行い、次にほかの作例と比較することで、その特徴を明らかにしたい。

なお前述のとおり、請雨經曼荼羅は、図像集などで多数の図像が確認されるものの、本画として描かれた古い現存作例がない。そのため、これまで請雨經曼荼羅について、複数の図像を比較検討して体系的に論じられることはなかった。本稿は、江戸時代の作例ながら本画である大福寺本を取り上げ、さらに確認しうる限りで図像を整理し、それらとの比較を行うことで、体系的な請雨經曼荼羅研究に寄与しようとするものである。

一 大福寺本について

①『大雲經祈雨壇法』の内容

大福寺本の紹介の前に、經典に記述される曼荼羅の内容を確認したい。請雨經法の經典としては、唐の不空訳『大雲輪請雨經』をはじめ、同『大雲經祈雨壇法』、隋の那連提耶舎訳『大雲輪請雨經』、北周の闍那耶舎訳『大方等大雲經請雨品第六十四』、同『大雲經請雨品第六十四』などがある。このうち、請雨經曼荼羅の内容につい

て、『大雲經祈雨壇法』には次のように記される⁽³⁾。

於壇中画七宝水池。池中画海龍王宮。於龍宮中有釈迦牟尼如來經說法相。仏右画觀自在菩薩。仏左画金剛手菩薩等侍衛。於仏前右画三千大千世界主輪蓋龍王。仏前左画難陀跋難陀二龍王。於壇四方。用瞿摩夷汁各画一龍王。於東方画一龍王。一身三頭。量長三肘。并眷属圍繞。又於南方画一龍王。一身五頭。量長五肘。并諸眷属。又於西方画一龍王。一身七頭。量長七肘。并眷属圍繞。於北方又画一龍王。一身九頭。量長九肘。并眷属圍繞。皆在鬘鬘青黑雲中。半身已下如蛇形。尾在池中。半身已上如菩薩形。皆合掌從池涌出。

すなわち、七宝水池中に海龍王宮があり、その中に釈迦牟尼如來が描かれる。釈迦の右に觀自在菩薩、左に金剛手菩薩が描かれ、釈迦の前方右に輪蓋龍王、前方左に難陀龍王、跋難陀龍王が描かれる。壇の四方には瞿摩夷の汁を用いて各一龍王が描かれる。東方は一身三頭、南方は一身五頭、西方は一身七頭、北方は一身九頭であり、各々眷属が圍繞する。皆鬘鬘（雲や霞などが棚引いている様子）の青黒雲中にあり、下半身は蛇形で尾は池中にある。上半身は菩薩形で、皆池より涌出し合掌する。

前半部分が懸曼茶羅の図像であり、後半部分が敷曼茶羅の図像である。經典では二つの画面に分けて描くように説かないが、日本における請雨經曼茶羅は前半・後半で描き分けるのが一般的である⁽⁴⁾。

次にこの内容をもとに、大福寺本を確認する。

② 基本情報

懸曼茶羅

形状…掛幅装 材質・技法…絹本着色 制作年代…江戸時代
法量…本紙縦一〇六・九cm 本紙横七〇・五cm 絹継ぎなし
敷曼茶羅

形状…まくり（裏打ちなし）

材質・技法…絹本着色 制作年代…江戸時代
法量…本紙縦八五・八cm 本紙横八五・八cm
箱蓋表墨書「請雨經本尊 附敷曼茶羅 大福寺」

③ 懸曼茶羅の図像

釈迦を中心に、左右に金剛手菩薩と觀音菩薩を配する。釈迦は胸前で転法輪印（說法印）を結び、右足を上にして蓮華座に結跏趺坐する。ただし、親指と別の指を合わせて輪を作らない。左右の菩薩は、顔をやや釈迦に向け、踏割蓮華座に立つ。釈迦の右隣の觀音菩薩は、右手を屈臂し掌を上に向けて腹前に出し、左手は屈臂して胸前で正面に掌を向ける。このような手の配置は、觀音の持物である蓮華を持つようであるが、描かれない。頭髮は頭頂で髻を結び、肩に髪を垂らし二束を結う。頭上の宝冠は正面に宝珠を三つ表す。

釈迦の左隣の金剛手菩薩は、右手を屈臂し、胸前で手首を外に捻って三鉈杵（または五鉈杵）を持ち、左手で独鉈杵を持つ。髪型は觀

音と同様である。頭上の宝冠は正面に宝珠を一つ表す。

釈迦の坐す蓮華座は框部分が海中に入り、左右菩薩の蓮台も海面に接する。釈迦の前には三脚机を二つ重ね、その上に宝珠を置く。

画面下部は、中央に右手に棒状の物、左手に宝珠を持ち画面向かって右斜め下を向く僧形を表し、これに向かつて合掌する難陀・跋難陀と輪蓋の三龍王を左右に配する。僧形について經典に記述はないが、『秘鈔問答』卷六には須菩提しゅぼだいと記述される⁽⁵⁾。僧形の左には、三脚机上に半楕円形に白飯を山盛りしたような供物が置かれる。僧形は沓底が海面に接するが、三龍王は腰より下が海中に入る。龍王はいずれも髭を生やした壮年相で、大袖のついた服を着して帽子を被り、龍を肩に乗せる。画面向かつて一番右側の龍王は開口する。右側二龍王の龍は頭頂に角が生え、牙を持ち、二か所から火が出る。左側の龍は、髪を逆立たせ、牙を持ち、一か所から火が出る。三頭とも頭部下に宝珠を付けた輪を巻く。背中には数か所から角が生える。

画面上部は海龍王宮を描き、左右に回廊を部分的に表す。中央の建物は二階建てで屋根には瓦を敷くが、一部省略する。二階部分は五間×二間で、正面と左側面が見えるように描き、正面の中央三間の扉を開ける。一階は柱一二本が乱立し、下部が海中に入る。左右回廊も屋根の一部を省略し、柱の下部が海中に入る。

④懸曼荼羅の表現

画面の背景は青色で、釈迦・菩薩・王宮のそれぞれと、僧形・龍王の下部全体に波を表す。背景を青とするのは敷曼荼羅とも共通す

る請雨經曼荼羅の特徴である。

釈迦は肉身を金泥で、肉身線は茶色を施す。頭髮を群青で賦彩し、外側に半円を並べてらほつを表す。肉髻部に段を作らないが、頭髮部正面中央に肉髻珠を表す。髪際に白緑を沿わせ、その上に墨線で髪を引く。額に白丸で白毫を表す。目鼻口は中央に小さくまとめ、鼻筋は表さない。袈裟は表を朱、裏を緑青で賦彩し、衣紋線に沿って金泥線を引く。頭光、身光は金泥線と墨線を交互に回し、一番外側は内側に金を佩く。釈迦の坐す蓮台は白蓮で金泥で葉脈を引く。

釈迦の右側の観音は、身色は白色で、肉身線と隈を丹色で施す。頭髮を群青で賦彩し、髪際や頭頂の髻、肩に垂らした髪は輪郭を白緑で括る。髪際には墨線を引く。額に白丸で白毫を表す。開口する。蓮台は釈迦同様に白色とする。頭光も釈迦と同様である。左側の金剛手菩薩は、身色は肌色で、肉身線の色や頭髮・頭光は観音と同様とする。蓮台は朱色で塗り、葉脈を金泥で引く。三像とも鼻下に線を二条引く。僧形の身色は肌色、龍王の身色は白色で、それぞれ丹色で隈を施す。龍の肉身は金泥で塗り、輪郭や鱗は墨線で表し、腹側の線は朱を塗り重ねる。波は波頭を白で塗り、墨線に沿って白線を引く。王宮は金泥塗りで墨線で輪郭を引き、瓦なども表す。

⑤敷曼荼羅の図像

中央に菩薩形の龍王を表し、上下左右に上半身が菩薩形で下半身が龍身の四龍王を表す。中央龍は『大雲經祈雨壇法』には記述されないが、『陀羅尼集經』卷一一などに説かれ、一般に描かれる図像

である⁽⁶⁾。五龍王とも頭光があり、髪を肩に垂らし胸前で合掌する。胸飾、腕釧、臂釧をつけ、上膊に布を結ぶ。

中央の龍王は条帛、腰布、下衣を着し、牙出して頭飾を噛む獅子冠を被る。腰には角二本、牙四本を持ち開口する獸頭を付ける。

四龍王は条帛などを着さず、腹下に布を巻く。下半身は鱗や尾のある龍身とするが、二本脚で垂直に立つため一般的な龍身とは異なる。肩上で垂髪の一部を二、三に束ね、上下左右の龍王同士でその数を揃える。頭部冠上に蛇や龍頭を描くが、各龍王で数や種類が異なる。また、眷属として表されたと思われる、龍王の左右に数匹ずつ配される蛇の数も異なる。各龍王の蛇・龍頭数を、經典のように中央龍王を起点として東西南北で表すと次のとおりである。

北龍王 頭に三匹の蛇。左右に八匹ずつの蛇。

東龍王 頭に二匹の蛇と三つの龍頭。向かって左側に五匹、右側に六匹の蛇。

南龍王 頭に七匹の蛇。左右に六匹ずつの蛇。

西龍王 頭に九匹の蛇。左右に六匹ずつの蛇。

四龍王の左右にいる蛇の向きや口の開閉は対称せず、姿勢も様々で、w字型に這ったり、上に伸び上がったり、身を巻いたりする。

各龍王の下には山形に波を表し、下半身の一部が海中に入る。画面の四隅には、五鈷杵（または三鈷杵）を付けた宝瓶を、中央に開口部を向けて配置する。これら外側には、金泥の二重線で杵を作り、その外周四隅及び中央に蓮華文様を表す。

⑥ 敷曼荼羅の表現

肉身はいずれも肌色で丹の隈を賦し、肉身線は丹色で引く。中央の龍王のみ顔の表現がやや異なり、鼻梁線がなく、髪際は九角に表す。頭髪は墨で塗り、髪際や輪郭を白緑で括る。四龍王の龍身部分は、金泥で塗った上に墨で鱗や毛を表し、一部墨線に朱を塗り重ねる。腰布は上下、左右の龍王で色を揃えるが文様は異なる。

蛇の肉身は緑青で、内側を茶色で塗る。墨線で輪郭や鱗を引いた上に、金泥線を重ねる。四龍王頭上の蛇の目は瞳に墨点を点じ、周囲を金色で塗り墨で括るが、四龍王左右の蛇は瞳と括る色を茶色とし表現を変える。外周の蓮華は茶色と群青で花卉を塗り、墨の輪郭に白を沿わす。

二 他作例との比較

本章では、主に永嚴撰『圖像抄』（十巻抄）や心覚撰『別尊雜記』、覚禅撰『覚禅抄』などの圖像集に所収される圖像や、そのほかの白描圖像などと大福寺本を比較し、その特徴を明らかにしたい。なお、圖像集の写本は多く、本稿では一部の紹介に留まることをお断りしておきたい⁽⁷⁾。また、近世以降の請雨経曼荼羅は、現存作例数も不明であるため、本章では検討に至らなかった。ただし、衰退した修法の本尊曼荼羅が、その後多様な圖像展開を見せるとは考えにくく、基本的には今回紹介したものから大きく逸脱するものはほとんどないように思われる。

表1・2に各圖像の特徴を示した。懸曼荼羅は、釈迦三尊の位置、釈迦の手の場所、回廊の有無、僧形や供物の表現などによって、敷

曼荼羅は四隅の龍の表現や、中央に懸曼荼羅の図様を描くかなどで大きく四パターンに区分される。また、比較のために、類例の多い図像として、奈良国立博物館蔵「十卷抄（経法）」所収の図像（以下奈良博本と略す）を写真3として掲載した。

① 懸曼荼羅

〔釈迦の印相〕

釈迦は親指と別の指を合わせて輪を作り説法印を結ぶが、右手を胸前にあげ、左手は掌を上に向ける場合（表1B）と、大福寺本のように両手を胸前にする場合がある。後者の方が類例が少なく、さらに大福寺本のように、指で輪を作らず左手を体側に捻る描写は、勸修寺蔵『覚禅鈔』所収の請雨経曼荼羅などにみられる表現である。

〔海龍王宮〕

二階建てで真正面から描く場合が多く、大福寺本のように斜めから描くことは珍しい。教王護国寺蔵「密教図像」のように、海龍王宮の中に釈迦三尊を描く例は少なく、ほとんど王宮の前に表される。大福寺本のように左右に回廊を描く例も一部に留まる（表1C）。

〔僧形と供物〕

右手に棒状の物、左手に四角形または碗状の器を持ち立つ姿が一般的である。僧形や供物を描かない作例もある。大福寺本は器ではなく宝珠を持つように見える点が特徴的である。

② 敷曼荼羅

〔中央龍王の頭上の獅子〕

奈良博本のように、左右肩に脚を載せる場合と、脚を描かず歯を見せて、頭冠を噛む場合がある。大福寺本は後者である。

〔中央龍王腰の獣形〕

奈良博本のように、前脚を組みその上に顔を載せる場合と、メトロポリタン美術館蔵「請雨経曼荼羅図像」のように、左前脚を立て、右前脚を屈臂して挙げる場合がある。また、和歌山県立博物館蔵「請雨経法」のように六本足を見せる場合もある。これらの獣形が獣座として描かれる一方で、大福寺本の獣形は脚を見せず腰布に付属するようでもあり、四龍王を描かない作例（表2D）の一部とのみ類似する特徴である。

〔四龍王の姿〕

經典に則り、上半身を菩薩形、下半身を蛇形とし、下半身が画面向かって左方向に流れる作例が多い。全身を見せる場合もあるが、大福寺本のように一部を隠す場合もある。大福寺本は鱗や尾のある龍形で、二脚で垂直に立つ点がほかの作例とは異なる。

〔四龍王と頭頂の蛇の数〕

經典には東方は一身三頭、南方は一身五頭、西方は一身七頭、北方は一身九頭であると記される。ただし、どの作例も頭が複数あるわけではなく、菩薩形の頭上に蛇が表され、龍頭が表されることも多い。蛇数については、確認できた作品だけでもばらつきがあり、三、五、七といった数を意識したようにも思われるが、配置も数も必ずしも一定していない。大福寺本の蛇数も、南七、西九、北三、東二・龍

頭三であり、方角・数とも經典と異なるが特異なことではない。

〔四龍王周囲の眷属〕

經典には眷属が圍繞するとのみ記されるが、ほとんどの作品で四龍王の間に四頭の龍が描かれる。その表現は、大きく分けて二種類ある。ひとつは、南側の二龍が南龍王に向かい（大きく前足を挙げて立つ場合と這う場合がある）、北側の二龍はそれぞれ東西の龍王に向かって肢体を伸ばすものである（表2B）。もう一方は、奈良博本のように、各龍とも上半身を中央に向けて立て、向かって右側の龍王に肢体を伸ばすものである（表1A）。この場合、北東龍が腹部を北側に向ける場合と、東側に向ける場合がある。また、いずれも龍の頭に蛇が数匹表され、これも異同がある。蛇数は經典には記述されないが、三・七・三・三や二・六・一・一の組み合わせなどがある。いずれにしても大福寺本が蛇数匹で表される点は特異である。

〔海・雲・岩〕

海を表す波を画面全体に表す場合と尊像の周囲にのみ表す場合がある。また、メトロポリタン美術館蔵「請雨經曼荼羅圖像」などのように画面内に岩を描く場合もある。各尊像は雲に乗るが、中央尊のみ雲に乗る場合もある。大福寺本は雲を描かず、また龍の代わりである蛇の周囲に水を描かないのも特徴である。

以上、ほかの作例と比較してきたが、簡潔に大福寺本の特徴をまとめると、まず懸曼荼羅は基本的にほかの図像と同様であるが、釈迦の印相の表現や、海龍王宮で左右回廊が描かれる点は類例が少な

い。金剛手菩薩が左手に独鈷杵を持ち、観音が持物を持たない点も類例がなく珍しい。敷曼荼羅については、中央龍腰の獸形が足を見せない点、四龍王の下半身が龍形で、二脚で垂直に立つ点、四龍王周囲の眷属が龍ではなく、龍の頭上に描かれていた蛇の姿のみで表される点が特徴である。

そのほか、外周の蓮華はほかの作例には描かれない。四隅の宝瓶は修法の際に用意される宝瓶を描きこんだと思われるが、敷曼荼羅には通常描かれず、懸曼荼羅の図様を中央に表した表2Cの称名寺蔵「請雨經法」（鎌倉時代）や、仁和寺蔵『別尊雜記』（重要文化財、鎌倉時代）巻第一四所収の「請雨經曼荼羅（其三）」などに見られるが、類例の少ない図像である。

また、彩色について大福寺本には彩色が濃密になされるが、『秘抄問答』には懸曼荼羅・敷曼荼羅ともに青色の絹を用い、皆墨画で口ばかり朱を塗ると記す⁽⁸⁾。当日に仏師が描くため彩色の余裕がないためか、あるいは青で統一するため余計な色を塗らないためか、請雨經曼荼羅は基本的に彩色を施さない曼荼羅であった。奈良博本などのように必要最低限の彩色は行われたが、中世以前には濃密な彩色は施されなかったと推察される。

三 江戸時代の祈祷

本作が伝わった大福寺は、寺伝によれば、奈良時代に報恩大師が備前に創建したとされる四八ヶ寺の一寺で、和氣郡伊部に建立されたが、寛永年間に岡山に移ってきたという⁽⁹⁾。瓶井山禅光寺安住

院の末寺で、玉井宮・東照宮のある東山の北側に位置し、一時は玉井宮領内に寺領をもつ社僧寺でもあった。

本作が実際に請雨経法で使用されたかについては、大福寺が戦火に遭い、請雨経法自体の執行記録が残っていないため、不詳である。ただし、本作の状態がよいため、使用されたとしても数回程度であろう。なお、請雨経曼茶羅は修法の度に新しく図絵することが求められたが、鎌倉時代には手間を省くため過去の道具が再利用されることもあり、本作も再利用されることがあったと考える⁽¹⁰⁾。

請雨経法が、江戸時代にどのように実修されたかは、不明な部分が多い。一つには神泉苑における請雨経法の最盛期が平安時代であり、鎌倉時代に一度復活するものの、室町時代には衰退したためである。また、祈雨の方法が多岐に亘るようになったり、複合して実施されたり、祈雨儀礼でどのようなことを行ったのが詳細に記録されなくなったりしたことも一因である⁽¹¹⁾。

岡山藩での祈雨事例をみると、たとえば『池田家履歴略記』寛文八年（一六六八）戊申条に、祈雨の記録がある⁽¹²⁾。これによれば、この年、五月末から八月に至るまで備前は大雨に旱魃して、民は愁苦に堪えられなかったため、八月一三日から一五日まで一宮において、神職が千座の祈雨を執行した。しかしその験しがなかったもので、さらに山上で祈ったところ、一六日に降り出したという。これは藩主導で大規模に実施されたようであるが、神社における神職の祈祷である。寺院における同様の祈祷は、管見の限り確認できず、藩主導で請雨経法が実施されたかは未詳である。

請雨経曼茶羅の作例からみれば、県内では管見の限りで、大福寺本以外に二例伝わる。その一つ、照光山安養寺（和気町）に伝わる曼茶羅（写真4）をここで紹介したい。基本情報は次のとおりである。

形状…掛幅装 材質・技法…紙本着色

制作年…文政十一年（一八二八）

法量…本紙縦五一・一cm 本紙横四九・二cm

箱蓋表墨書…「請雨本尊龍王御掛軸 安養寺蔵」

表具裏墨書…「請雨曼茶羅一軸 右 雪本尊照光山安養寺常住物

岩文政十一戊子春以本尊物令新調也 延寿院現住円

證」

墨書によれば、本作は「請雨本尊龍王御掛軸」あるいは、「請雨曼茶羅一軸」と呼ばれ、文政十一年の春に、延寿院（安養寺）現住の円證が、新調したものであるという。つまり、これ以前にも請雨経曼茶羅が存在したことが分かる。五龍王と四隅に四龍を描いた敷曼茶羅の図様であるが、これに対応する懸曼茶羅はない。現状掛幅装であることから、当初から敷曼茶羅のみ制作された可能性も考えられる。

安養寺も四八ヶ寺の一寺で、天台宗寺院である。備前東部に位置し、中世には執権北条氏や播磨の赤松氏らと関わりをもった⁽¹³⁾。

中世以前には請雨経法は真言宗の特権であり、天台宗側が祈雨に関わる際には水天供などを修した。近世の実態は不詳であるがこの頃には天台宗でも実修されていたようである。安養寺本は紙本なが

らよく描かれており、一度使用したらすぐ破棄されるものとは考えられない。掛軸の耐用年数を考慮すれば、新調前の本尊は、一八世紀には成立していたとみられ、少なくともこの頃に安養寺で祈雨祈禱が行われていたことは推測できる。図像については、五龍王の身体の向きが同じ点、外側を向く龍がいる点が特筆される。

また、県内に遺るもう一点も江戸時代の作例で、真言宗の千手山弘法寺遍明院（瀬戸内市）が所蔵し、敷曼荼羅と懸曼荼羅を一幅に組み合わせた著色画である。いずれにしても、江戸時代の県内では少なくとも真言宗・天台宗において請雨経法が実修され、丁寧に賦彩した請雨経曼荼羅が使用されていたと推察される。

おわりに

本稿では、大福寺に遺る江戸時代の請雨経曼荼羅について、ほかの作例と比較することでその特徴を明らかにした。比較するにあたっては、請雨経曼荼羅が体系的に論じられてこなかったことを踏まえ、図像集などの図像を特徴別に分類し、表に示した。その結果、請雨経曼荼羅が、基本的には『大雲経祈雨壇法』に則りながら、蛇の数や龍の向きなど、いくつかの図像パターンがあったことを示した。

現状で江戸時代の粉本にも、大福寺本の特徴がみられる絵はなく、制作にあたり特殊な要因があった可能性も考えられる。近世以降の請雨経法の実態や、大福寺本のもつ特徴的な図像が生まれるに至った背景については、今後の課題としたい。

《註》

- (1) 『秘鈔問答』巻六には「本尊毎度奉図絵也。是先例也」と記す。『大正大蔵経』第七九卷三九三頁。
- (2) 請雨経法の歴史や修法の内容などについては、主に次の研究がある。本稿ではこれらの文献を大いに参照した。
上田靈城『真言密教事相概説―諸尊法・灌頂部 新安流を中心として―下、同朋舎一九〇〇年。數元晶『雨乞儀礼の成立と展開』岩田書院、二〇〇二年。ステイブン・トレンソン『祈雨・宝珠・龍 中世真言密教の深層』京都大学学術出版会、二〇一六年。山口えり『古代国家の祈雨儀礼と災害認識』塙書房、二〇二〇年。
- (3) 『大正大蔵経』第一九卷四九二頁。
- (4) 經典の内容を同一の画面に表したものとしては、鎌倉時代制作の称名寺蔵「〔請雨経法〕」などがある。表2「敷曼荼羅」C参照。
- (5) 『大正大蔵経』第七九卷三八八頁、三九三頁。
- (6) 『大正大蔵経』第一八卷八八〇頁。『秘鈔問答』にも『陀羅尼集経』の説を記述する。
- (7) 今回検討できなかった古い作例としては高野山正智院蔵「請雨経曼荼羅」（鎌倉時代）、逸翁美術館蔵「紙本著色十卷抄」（重要文化財、延慶二年）所収の図像などがある。
- (8) 『大正大蔵経』第七九卷三九三頁。
- (9) 岡山市史編集委員会『岡山市史（宗教・教育編）』岡山市役所、一九六八年。
- (10) 『建保三年六月六日神泉御修法日記』によれば、請雨経法では毎物新調するべきところ、勧修寺が前年に実修した際には古物を使用したと記す。前掲註2ステイブン著、二〇四頁。
- (11) 中世の祈雨・止雨儀礼は、特定の寺院・神社ではなく、「諸寺社」祈禱へと集約されていき、その具体的な方法も命じられていないことが指摘されている。小河仁「中世後期における国家的祈雨・止雨儀礼」『三重大史学』巻二一、三重大学人文学部考古学・日本史・東洋史研究室、二〇二一年。
- (12) 吉田徳太郎編『池田家履略記』日本文教出版、一九六三年、三五五―三五六頁。
- (13) 岡山県大百科事典編集委員会・山陽新聞社出版局編『岡山県大百科事典 上巻』山陽新聞社、一九八〇年。

謝辞

本稿の執筆にあたっては大福寺御住職大橋聖本様、安養寺御住職内藤優湛様、遍明院御住職黒井寛然様より格別の御高配を賜りました。また、奈良国立博物館より写真3の提供を受けました。末筆ながら、ここに記し心より御礼申し上げます。

表 請雨経曼荼羅の図像

1 懸曼荼羅

	所蔵者	名称	時代	材質・技法	釈迦の手の場所	僧形	供物	海	雲	回廊	備考(伝来・特記事項)						
A (王宮内に釈迦三尊)	教王護国寺	請雨経曼荼羅(重要文化財「密教図像」10点のうち)	鎌倉時代	紙本墨画	胸前	×	×	全体	×	×	三龍王は右手に宝剣、左手に如意を持ち坐す。『大正大蔵経』図像第5巻収載(別紙21)。						
	醍醐寺	請雨経曼荼羅(重要文化財「紙本着色十巻抄(第十巻補写)」巻第3所収)	建久4年(1193)	紙本着色	右手を胸前にあげ、左手は掌を上に向ける。	右手に棒状のもの、左手に四角形または器のようなものを持つ。	白飯風の供物	海龍王宮前全体	海龍王宮の下層屋根	×	参考文献②収載。						
	仁和寺	請雨経曼荼羅(其1)(重要文化財「紙本墨書別尊雜記(図像入)」巻第14所収)	鎌倉時代	紙本墨画							『大正大蔵経』図像第3巻(京都仁和寺蔵本「別尊雜記」巻第14「請雨経」)収載。						
	奈良国立博物館	十巻抄(経法)	鎌倉時代	紙本着色							東寺観智院伝来。						
	称名寺	〔請雨経法〕	鎌倉時代	紙本							参考文献④124頁中段収載。						
	ボストン美術館	請雨経曼荼羅図像(11.6242)	鎌倉時代	紙本墨画							「方便智院」(朱文方印)						
	東寺観智院	請雨経曼荼羅	不詳	紙本							『大正大蔵経』図像第5巻収載(別紙20)。						
	円通寺	請雨経曼荼羅(其1)(重要文化財「紙本着色十巻抄」巻第3所収)	延慶3年(1310)	紙本着色							『大正大蔵経』図像第3巻(高野山真別処円通寺蔵本「図像抄」巻第3)収載。						
B (釈迦は右手を胸前にあげ、左手は掌を上に向ける。)	醍醐寺	請雨経曼荼羅(其1)	不詳	紙本							右手を胸前にあげ、左手は掌を上に向ける。(輪を作らない)	両手で棒状のものを持つ。		海龍王宮の下層屋根	×	『大正大蔵経』図像第3巻(京都醍醐寺蔵本「四家鈔図像」巻中)収載。	
	称名寺	懸曼荼羅(『覚禪抄』請雨経法所収)	元亨元年(1321)	紙本	勸修寺本が底本。参考文献⑥収載。												
	和歌山県立博物館	請雨経法(『別尊雜記』巻第14所収)	江戸時代	紙本墨画													
	増上寺	〔請雨経曼荼羅〕	江戸時代	紙本	勸修寺本が底本。『大日本仏教全書』第46巻(『覚禪抄』第2「請雨法中」)収載。												
	京都市立芸術大学	請雨経曼荼羅図	嘉永6年(1853)	紙本墨画淡彩	六角堂能満院仏画粉本(田村宗立旧蔵)												
	個人	請雨経曼荼羅	不詳	紙本	右手に長方形のもの、左手に器を持つ。	海龍王宮の下層屋根	『大正大蔵経』図像第12巻収載(別紙12)。										
	醍醐寺	祈雨法懸曼荼羅	不詳	紙本	右手を胸前にあげ、左手は掌を上に向ける。	右手に棒状のもの、左手に四角形または器のようなものを持つ。	×	全体	海龍王宮前	原本は醍醐寺勝賢が表したもの。							
	C (胸前で印を結ぶ。回廊あり。)	ボストン美術館	請雨経曼荼羅図像(11.6253)	鎌倉時代	紙本墨画	胸前(輪なし、左手は体側に捻る。)	右手に棒状のもの、左手に器を持つ。	白飯風の供物	全体	波との判別が困難。						○	「高山寺」(朱文方印)「玄證本」(裏書)
		ボストン美術館	請雨経曼荼羅図像(11.6244)	鎌倉時代	紙本墨画												「高山寺」(朱文方印)「玄證本」(裏書)
		個人	請雨経曼荼羅	不詳	紙本												『大正大蔵経』図像第12巻収載(別紙13)。
D (胸前で印を結ぶ。回廊なし。供物に龍が触れる。)	勸修寺	請雨経曼荼羅(其1)(重要文化財「勸修寺聖教」のうち「覚禪抄」所収)	建暦元年(1211)	紙本墨画淡彩	胸前(輪なし、左手は体側に捻る。)	僧形は正面を向いて両手に持物を持ち、腰下が海中に入る。	火舎。龍王が両手で触れる。	各尊像の下部	海龍王宮前	×	『大正大蔵経』図像第4巻(京都勸修寺蔵本「覚禪抄」巻19「請雨経上」)収載。龍王は膝を曲げ足先を立てて座る。						
	増上寺	〔請雨経曼荼羅〕	江戸時代	紙本	胸前(輪なし)						勸修寺本が底本。『大日本仏教全書』第46巻(「覚禪抄」第2「請雨法上」)収載。龍王は膝を曲げ足先を立てて座る。						
E (その他)	称名寺	〔請雨経法〕	鎌倉時代	紙本	胸前	僧形は正面を向いて両手に持物を持ち座る。	不詳	×	海龍王宮前、三尊と釈迦前の供養物の下	×	参考文献④124頁下段収載。						
	称名寺	傳受集	鎌倉時代	紙本	不詳	僧形は正面を向いて座る。	不詳	海龍王宮前全体	海龍王宮前	×	参考文献④140頁収載。龍王の龍部分と人部分を別々に描く。						

各作品の基本情報と画像は、主に下記文献・HP(いずれも最終閲覧日は令和6年1月6日)を参照した。なお、細部の描写が判別できないものについては「不詳」と記した。

①仏書刊行会編『大日本仏教全書』第46巻 覚禪抄 第2、仏書刊行会、1915年

②佐和隆研編『秘法第八巻 醍醐』講談社、1967年

③濱田隆編『日本の美術 第173号 曼荼羅』至文堂、1980年

④神奈川県立金沢文庫編『密教美術』神奈川県立金沢文庫、1991年

⑤文化庁監修『国宝・重要文化財大全』(絵画(上巻)、毎日新聞社、1997年

⑥神奈川県立金沢文庫編『雲にのる神仏』神奈川県立金沢文庫、2003年

⑦田村隆昭・定金計文監修、京都市立芸術大学芸術資料館編『六角堂能満院仏画粉本 仏教図像集成 上巻』法蔵館、2004年

⑧「水 神祕のかたち」サントリー美術館、龍谷大学龍谷ミュージアム、2015年

⑨向坂ま也「新出の図像集断簡について」(『金澤文庫研究』第339号、神奈川県立金沢文庫、2017年)

⑩東京国立博物館・真言宗総本山教王護国寺(東寺)・読売新聞社・NHK・NHKプロモーション編『国宝 東寺一室海と仏像曼荼羅』読売新聞社・NHK・NHKプロモーション、2019年

⑪和歌山県立博物館収蔵品データベース(https://jmaps.ne.jp/hakubutuwakayama/det.html?data_id=831)

⑫アメリカ・メトロポリタン美術館収蔵品データベース(<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/39933>)

⑬アメリカ・ボストン美術館収蔵品データベース(<https://collections.mfa.org/collections>)

⑭大正新脩大蔵經図像データベース(<https://dzkings.l.u-tokyo.ac.jp/SATI/images.php>)

⑮奈良国立博物館収蔵品データベース(<https://www.narahaku.go.jp/collection/1509-0.html>)

2 敷曼荼羅

	所蔵者	名称	時代	材質・技法	中央龍王		四龍王		四隅の龍		雲	海・岩	備考(伝来・特記事項)		
					頭部獅子 が翼に脚 を載せる	腰部の紋形	頭部	姿	向き	頭部					
A 各龍とも頭を中央に向け、 向かって右側の龍王に向かっ て身体を伸ばす。	仁和寺	請雨経曼荼羅(其2)(重要文化財「紙本墨書別尊雜記(図像入)」巻第14所収)	鎌倉時代	紙本墨画	×	4本(または6本)脚を前に出す。	北: 蛇3 東: 蛇5 南: 龍頭4蛇1 西: 蛇5	全身	各龍とも頭を中央に向け、 向かって右側の龍王に向かっ て身体を伸ばす。	北東: 蛇2 南東: 蛇6 南西: 蛇1 北西: 蛇1	中央龍の腰部以下全体。	『大正大藏経』図像第3巻(京都仁和寺蔵本「別尊雜記」巻第14「請雨経」)収載。			
	醍醐寺	請雨経曼荼羅(重要文化財「紙本著色十巻抄(第十巻補写)」巻第3所収)	建久4年(1193)	紙本著色	○	前脚2本を組み顔を載せる。	北: 蛇3 東: 蛇5 南: 龍頭3蛇2 西: 蛇5			北東: 蛇3 南東: 蛇7 南西: 蛇7 北西: 蛇3			画面全体	参考文献②収載。	
	醍醐寺	請雨経曼荼羅(重要文化財「紙本著色十巻抄(第十巻補写)」巻第3所収)	建久4年(1193)	紙本著色			北東: 蛇3 南東: 蛇7 南西: 蛇3 北西: 蛇3			画面全体			参考文献⑤収載。		
	醍醐寺	請雨経曼荼羅(其2)	不詳	紙本			北東: 蛇3 南東: 蛇5 南西: 蛇3 北西: 蛇3							『大正大藏経』図像第3巻(京都醍醐寺蔵本「四家抄図像」巻中)収載。	
	奈良国立博物館	十巻抄(経法)	鎌倉時代	紙本著色			北東: 蛇3 南東: 蛇7 南西: 蛇3 北西: 蛇3								東寺観智院伝来。
	円通寺	請雨経曼荼羅(其2)(重要文化財「紙本著色十巻抄」巻第3所収)	延康3年(1310)	紙本著色	○	前脚2本を組み顔を載せる。	北: 蛇3 東: 蛇5 西: 龍頭2蛇3	北東: 蛇3 南東: 蛇7 南西: 蛇3 北西: 蛇3		各尊像は雲に乗る。	『大正大藏経』図像第3巻(高野山真別処円通寺蔵本「図像抄」巻第3)収載。				
	称名寺	図像集断簡	鎌倉時代	紙本著色			不詳	不詳(欠損)							
	称名寺	数曼荼羅 〔「覚禪抄」請雨経法所収〕	元亨元年(1321)	紙本			×	前脚2本を組み顔を載せる。				北: 蛇3 東: 蛇5 西: 蛇5	北東: 蛇2 南東: 龍頭1蛇5 南西: 龍頭1 北西: 蛇2	中央龍の腰部以下全体。	勧修寺本が底本。 勧修寺本が底本。「大日本仏教全書」第46巻(『覚禪抄』第2「請雨法中」)収載。
	増上寺	(請雨経曼荼羅)	江戸時代	紙本	北東: 蛇2 南東: 不詳 南西: 蛇1 北西: 蛇2	画面全体									
	和歌山県立博物館	請雨経法 〔「別尊雜記」巻第14所収〕	江戸時代	紙本墨画	北東: 蛇2 南東: 蛇6 南西: 蛇1 北西: 蛇1					中央龍の腰部以下全体。	六角堂能満院仏画粉本(田村宗立旧蔵)				
B 四龍は南龍王に向かい、北三龍は東龍王に向かっ てそれぞれ向かう。	メトロポリタン美術館	請雨経曼荼羅図像	平安時代	紙本墨画	×	右前脚を挙げ、左前脚は立てる。	北: 蛇3 東: 蛇7 南: 蛇8 西: 龍頭3蛇2	全身	本二龍は南龍王に向かい、北三龍は東龍王に向かっ てそれぞれ向かう。(法隆寺 龍王にそれぞれ向かう。(ただし南龍王は 龍王にそれぞれ向かう。))	北東: 蛇3 南東: 龍頭4 南西: 龍頭4 北西: 蛇7	中央龍のみ雲に乗る。南北龍王付近にも雲あり。	各尊像の下部、南東に岩あり。			
	ボストン美術館	請雨経曼荼羅図像(11.6251)	鎌倉時代	紙本墨画	不詳	不詳	北: 蛇3 東: 不詳 南: 蛇7 西: 蛇9			北東: 蛇3 南東: 不詳 南西: 蛇1 北西: 不詳	各尊像の下部、中央龍王の上部など。	各尊像の下部、北東に岩あり。	『方便智院』(朱文方印)		
	法隆寺	請雨経法指図	南北朝時代	紙本墨画	○	脚を4本立てる。	北: 蛇3 東: 蛇5 南: 龍頭1蛇6 西: 蛇9	下半身の一部分が隠れる。		北東: 蛇7 南東: 蛇7 南西: 蛇3 北西: 蛇3	各尊像は雲に乗る。	画面全体	原本は醍醐寺勝譽が表したもの。		
	ボストン美術館	請雨経曼荼羅図像(11.6241)	室町時代	紙本墨画			北: 蛇3 東: 蛇7 南: 蛇8 西: 龍頭3蛇2			北東: 蛇3 南東: 龍頭4 南西: 龍頭4 北西: 蛇不詳	中央龍のみ雲に乗る。	画面全体	各尊像の下部、南東に岩あり。	『大正大藏経』図像第12巻収載(別紙14・15)。	
	個人	請雨経曼荼羅(別紙14・15)	不詳	紙本			×			右前脚を挙げ、左前脚は立てる。	北: 蛇3 東: 蛇7 (別紙14は不詳) 南: 蛇8 西: 龍頭3蛇2	北東: 蛇3 南東: 龍頭4 南西: 龍頭4 北西: 蛇7	各尊像の下部、南東に岩あり。	『大正大藏経』図像第12巻収載(別紙16・17)。	
	ボストン美術館	請雨経曼荼羅図像(11.6243)	鎌倉時代	紙本墨画	不詳	不詳	不詳	下半身の一部分が隠れる。		中央龍王の下。	各尊像の下部、北東に岩あり。	『高山寺』(朱文方印)「玄證本」(真書)			
	高山寺	請雨経曼荼羅	不詳	紙本	×	左前脚を立てる。右前脚を挙げるかは不詳。	北: 不詳 東: 不詳 南: 蛇7 西: 蛇9	不詳		不詳	各尊像の下部、北東に岩あり。	『大正大藏経』図像第5巻収載(別紙23)。			
	個人	請雨経曼荼羅(別紙16・17)	不詳	紙本			右前脚を挙げ、左前脚は立てる。	北: 蛇3 東: 龍頭5 南: 蛇7 西: 蛇9					下半身の一部分が隠れる。	中央龍のみ雲に乗る。	『大正大藏経』図像第12巻収載(別紙16・17)。
	C 四隅に東来宗配し、画面中央に請曼荼羅の図像を描く。	称名寺	〔請雨経法〕	鎌倉時代	紙本	中央龍なし	中央龍なし	北: 蛇3 東: 蛇5 南: 蛇7 西: 蛇7		下半身の一部分が隠れる。	四龍王の左右に上半身人形の龍の龍。	上半身人形の龍の頭上に1頭ずつ蛇。	各尊像は雲に乗る。	全体	参考文献④124頁中段収載。
		東寺観智院	請雨経曼荼羅	不詳	紙本			北: 蛇3 東: 蛇4 南: 蛇5 西: 蛇6		全身。海または雲上に坐す。	四龍王の左右に人物。	人物の頭上に蛇なし。	各尊像の下に波または雲の描写あり。	『大正大藏経』図像第5巻収載(別紙22)。	
MOA美術館		請雨経曼荼羅(重要文化財「紙本白描曼荼羅集」所収)	鎌倉時代	紙本墨画淡彩	北: 蛇3 東: 蛇5 南: 蛇7 西: 蛇9			下半身の一部分が隠れる。	不詳	×	×	×	全体	東寺観智院伝来。 『大正大藏経』図像第4巻(京大通寺蔵本「曼荼羅集」)収載。	
仁和寺		請雨経曼荼羅(其3)(重要文化財「紙本墨書別尊雜記(図像入)」巻第14所収)	鎌倉時代	紙本墨画	右手に剣、左手に如意を持ち蓮華座に坐す。			北: 蛇3 東: 蛇5 南: 蛇7 西: 蛇9	下半身の一部分が隠れる。	×	×	×	全体	『大正大藏経』図像第3巻(京都仁和寺蔵本「別尊雜記」巻第14「請雨経」)収載。	
和歌山県立博物館		請雨経法 〔「別尊雜記」巻第14所収〕	江戸時代	紙本墨画				北: 蛇3 東: 蛇5 南: 蛇7 西: 蛇10							
D 四龍を描かない。	称名寺	〔請雨経法〕	鎌倉時代	紙本	獅子×	前脚二本を組み顔を載せる。	四龍王の代わりに、頭部龍形の1体を含む下半身蛇形の龍王8体が中央龍を8方から囲む。中央・南龍王に光背あり。(伝受集は東龍王にも光背あり)	×	×	×	×	参考文献④124頁下段収載。			
	称名寺	傳受集	鎌倉時代	紙本				参考文献④140頁収載。							
	勧修寺	請雨経曼荼羅(其2)(重要文化財「勧修寺聖教」のうち「覚禪抄」所収)	建暦元年(1211)	紙本墨画淡彩				頭部以下なし	×	×	×	『大正大藏経』図像第4巻(京都勧修寺蔵本「覚禪抄」巻19「請雨経上」)収載。			
	増上寺	(請雨経曼荼羅)	江戸時代	紙本				勧修寺本が底本。『大日本仏教全書』第46巻(『覚禪抄』第2「請雨法上」)収載。							

討』『文明動態学』vol.1 岡山大学文明動態学研究所／岡山県古代吉備文化財センター 2023 『史跡こうもり塚古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告266

箱崎古墳：玉木秀幸・白石純・小林博昭2000「箱崎古墳の発掘調査」『岡山理科大学自然科学研究所研究報告』第26号

八紘1号墳：総社市教育委員会2019『樽見1号墳 法正寺1号墳 八紘古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告29

藤ノ木古墳：奈良県立橿原考古学研究所1990『斑鳩藤ノ木古墳 第1次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会／奈良県立橿原考古学研究所1993『斑鳩藤ノ木古墳 第2・3次調査報告書』奈良県教育委員会

二塚古墳：奈良県教育委員会1962『大和二塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告21

二塚山古墳：近藤義郎1986「二塚山古墳」『岡山県史』第18巻考古資料

婦本路2号墳：岡山県古代吉備文化財センター 2010『婦本路古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告225

甫崎天神山8号墳：岡山県古代吉備文化財センター 1994『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89

益子天王塚古墳：山田琴子2012「益子天王塚古墳出土遺物の調査（5）－挂甲－」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第13号

物集女車塚古墳：向日市教育委員会1988『物集女車塚古墳』向日市埋蔵文化財発掘調査報告書23

八塚1号墳・3号墳：岡山県古代吉備文化財センター 2009『八塚古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告218

八幡大塚2号墳：鎌木義昌1967「岡山市八幡大塚古墳」『考古学研究』第13巻第4号

鎌木義昌・亀田修一1986「八幡大塚2号墳」『岡山県史』第18巻考古資料

小林青樹・野崎貴博・横田美香1997「岡山市八幡大塚2号墳の再検討－八幡大塚2号墳出土とされる須恵器の検討から－」『古代吉備』第19集

八幡大塚古墳及び児島北東岸の古墳：鎌木義昌・間壁忠彦1954「東児島所在の古墳について」『吉備考古』88・89合併号

鎌木義昌1962「古墳時代」『岡山市史 古代編』岡山市

永山卯三郎1930『岡山県通史』上編

間壁忠彦・間壁葎子1972「吉備の屯倉」『古代吉備王国の謎』新人物往来社

間壁葎子2013「158 消えた児島の古墳」『よもやま話』倉敷考古館HP

八幡23号横穴：横須賀倫達2020「八幡23号横穴出土鉄革併用小札甲の研究」『福島考古』第62号

綿貫観音山古墳：群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第255集

《図出典》

図1 国土地理院数値地図 図2 国土地理院2.5万分1地図 岡山南部、八浜 図3 国土地理院国土基本図

図5 1. 国土地理院航空写真MGC63-1X C3-18 19630426 2. MGC61-2 C13-541 19610719 3. 岡山地方法務局所管 4. MGC70-2X C5-9 19700430

巻頭写真2・3・4・5、図13・21-2・26・50：八幡大塚古墳発掘調査団撮影、岡山理科大学保管・提供 図6：岡山理科大学保管・提供 図20-1・20-3・21-4：岡山県古代吉備文化財センター提供 図20-2・21-3・図22：岡山市教育委員会提供 図23平面・立面：藤川聖起氏作成のSfM画像をトレース 図51～53：遺跡文献から引用

初村武寛2011「古墳時代中期における小札甲の変遷」『古代学研究』192
初村武寛2018「小札式甲冑の研究史と導入・展開の諸様相」『古代武器研究』14
弘田和司1999「喜兵衛島古墳群の形成とその特質」『喜兵衛島－師楽式製塩遺跡群の研究－』喜兵衛島刊行会
藤井翔平2023「総括 第5節」『史跡こうもり塚古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告266 岡山県古代吉備文化財センター
横須賀倫達2017「双葉町清戸迫8号横穴出土遺物の研究Ⅰ－小札甲－」『福島考古』58
吉田晶2005「児島と海の道」『古代を考える 吉備』吉川弘文館
その他、個別に記載していないが、内山敏行、初村武寛氏らによる小札甲についての論考を参照した。

《遺跡文献》

赤井西4号墳：山本雅靖・間壁葎子1974「赤井西古墳群4号」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館
赤井南3号墳：三宅幸治・小野一臣・間壁葎子1974「赤井南古墳群3号」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館
赤井南4号墳：藤田憲司・間壁忠彦1974「赤井南古墳群3号」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館
栗井大塚14号墳：岡山県古代吉備文化財センター 2022『林原古墳群 栗井大塚古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告259
市尾宮塚古墳：高取町教育委員会2018『市尾宮塚古墳発掘調査報告書』
岩田8号墳・14号墳：山陽町教育委員会1976『岩田古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第6集
王墓山古墳：山本雅靖・三木文雄・間壁忠彦1974「王墓山古墳（赤井西古墳群1号）」第10号
大室186号墳：明治大学文学部考古学研究室2015『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅳ－大室支群ムジナゴロ単位支群の調査－報告篇』
乙佐塚古墳：乙佐塚古墳埋蔵文化財発掘調査委員会1986『乙佐塚古墳発掘調査報告書』
加納南9号墳：財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2014『加納南古墳群・稲積オオヤチ古墳群発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告13
亀ヶ原大塚古墳：平井勝・宇垣匡雅1990「岡山県長船町亀ヶ原所在の前方後円墳－亀ヶ原大塚古墳と金鶏塚古墳－」『古代吉備』第12集
北浦旗山2号墳：神谷正義2003「熊沢和夫・敏子さん寄贈の考古資料」『岡山市埋蔵文化財センター年報』2 2001（平成13）年度、岡山市教育委員会
木谷8号墳：岡山県古代吉備文化財センター 1995『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93
喜兵衛島古墳群：近藤義郎ほか1999『喜兵衛島－師楽式製塩遺跡群の研究－』喜兵衛島刊行会
清戸迫8号横穴：横須賀2017
琴海1号墳：岡山県教育委員会1980『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査1 曾原 琴海1号墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告36
こうもり塚古墳：葛原克人・近藤義郎・鎌木義昌1986「こうもり塚古墳」『岡山県史』第18巻考古資料
岡山県古代吉備文化財センター 2023『史跡こうもり塚古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告266
五条野丸山古墳：宮内庁書陵部1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部
斎富2号墳：岡山県古代吉備文化財センター 1995『松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99
地藏山1号墳：玉野市教育委員会1992『地藏山1号墳』玉野市埋蔵文化財発掘調査報告5
空古墳：岡山県教育委員会1976「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11
大念寺古墳：出雲市教育委員会1984『史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書』
高坪古墳：岡山県教育委員会1982『高坪古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告50
団子塚9号墳：袋井市教育委員会・財団法人元興寺文化財研究所1994『団子塚9号墳』出土遺物保存処理報告書
滝鐘鋳場1号墳：滝古墳群緊急発掘調査委員会1989『滝・鐘鋳場1号墳』
珠城山3号墳：桜井市教育委員会2007『国史跡珠城山古墳群』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書29
初村武寛2018「奈良国立博物館蔵大和二塚古墳・環炉山3号墳出土遺物の調査－平成25～26年度に行った保存処理により得られた知見から－」『奈良国立博物館研究紀要 鹿園雑集』第20号
鳥取上高塚古墳：光本順・山口雄治・ライオン ジョセフ2022「LiDAR測量による岡山県赤磐市鳥取上高塚古墳の墳丘の検

葬土器の器種組成に関わるため、整理事業の所見として記しておく。

- (14) 前方部石室石組み調査の際に、石室天井石の上から古い（5世紀代か）須恵器片が出土したという。出宮徳尚氏教示。
- (15) 腰札85凹部での内周延長は81.2cmで、これに86の延長29.6cmが加わることになる。小札の重なり1cm前後や引き合わせ部分の重複の長さを引く必要はあるが、1mを優にこえる腰回りである。前を大きく引き合わせれば甲は着装することができるが、実戦で動くことを想定すれば合理的ではなく、短甲や中世の胴丸にくらべて著しく長い。実用時に体型に合わせて切り詰めることができる余地を腰札に作っており、副葬時に切り取った分を加えたなどの可能性はないのだろうか。
- (16) 鉄器の欠損はすべて取り上げ時の破損である。調査時の写真が少ないが、現在とは異なり暗所での写真撮影は容易ではなかったためであろう。
- (17) 亀ヶ原大塚古墳は、群集墳として著名な亀ヶ原古墳群の一角に所在する。
- (18) 五条野丸山古墳の玄室東壁は3段積みの下部が埋没しているとされるが、石材の形状によっては2段になる可能性が考えられる。
- (19) 玄室側壁前端的の石が平面図に描かれていないため、主軸の推定に難がある。

《参考・引用文献》

- 一瀬和夫2012「橿原丸山古墳墳丘模型製作資料」『京都橘大学文化財調査報告2011』
- 宇垣匡雅2004「吉備の首長墓系譜」『古墳時代の政治構造－前方後円墳からのアプローチ』青木書店
- 宇垣匡雅2009「牛窓湾の後期古墳」『古墳時代の備讃瀬戸』シンポジウム記録6 考古学研究会
- 宇垣匡雅2015「列島の海浜型前方後円墳 瀬戸内海沿岸」『海浜型前方後円墳の時代』同成社
- 大久保徹也2023「大形石室墳にみる地域的結集とその性格－三須古墳群・大野原古墳群・綾北古墳群の検討から－」『古代出雲と吉備の交流』島根県古代文化センター研究論集第30集
- 尾上元規2020「吉備における横穴式石室の展開と地域性」『横穴式石室の研究』同成社
- 尾上元規2022「出土須恵器の型式」『桑山南古墳群・細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告255
- 狩野久2005「白猪屯倉と曾我氏」『古代を考える 吉備』吉川弘文館
- 辛川あかり2023「塚段古墳出土の振り環」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第15号
- 金田善敬1996「古墳時代後期における鍛冶集団の動向－大和地方を中心に－」『考古学研究』第43巻第2号
- 金田善敬1999「古墳時代後期の鉄釘にみられる地域間交流」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究会
- 金田善敬2018「横穴式石室の規格に関する一試論」『待兼山考古学論集Ⅲ』大阪大学考古学研究会
- 金田善敬2023「総括 第1～3・6節」『史跡こうもり塚古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告266 岡山県古代吉備文化財センター
- 上林史郎2002「副葬品配置が意味するもの」『未盗掘墳の世界』平成14年度春期特別展 大阪府立近つ飛鳥博物館図録27
- 岸本直文2011「横穴式石室の型式は被葬者の活躍時期を示す」『考古学研究』第58巻第1号
- 笹栗拓2010「横穴式石室の展開過程と地域社会の構造－吉備の分析を中心に－」『古代学研究』188号
- 清水和明1993「挂甲 製作技法の変遷からみた挂甲の生産」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第1分冊 埋蔵文化財研究会
- 高田貫太2022「海を越えた百済の耳飾り－耳飾りから見た倭と百済の交渉史－」『百済の耳飾り』韓国国立公州博物館特別展示図録
- 高橋照彦2004「畿内最後の大型前方後円墳に関する一試論－見瀬丸山古墳と欽明陵古墳の被葬者－」『西日本における前方後円墳の消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科
- 塚本敏夫1994「銀製空玉の製作技法」『団子塚9号墳』出土遺物保存処理報告書 袋井市教育委員会
- 土屋隆史2021「倭における盛矢具の生産体制とその変化」『日本考古学』第52号
- 新納泉1987「緑山古墳群の築造年代と形成の過程」『緑山古墳群』総社市文化振興財団
- 沼澤豊2011「横穴式石室設計論」『日本古墳の構造研究』早稲田大学博士論文
- 信里芳紀2022「備讃瀬戸における高地性集落とその背景」『古代文化』第74巻第2号
- 橋本達也2020「下北方5号地下式横穴墓出土の武装具の評価と被葬者像」『下北方5号地下式横穴墓』宮崎市文化財調査報告書128
- 橋本達也2021「小刀・刀子」『島内139号地下式横穴墓Ⅱ』えびの市埋蔵文化財調査報告書第60集

力を弱めようとする畿内勢力の尖兵という対立の図式で評価されてきたが、そうではなく一連の政治状況のもとに両墳は築かれたと考えるべきである。

海浜の大規模な祭祀遺跡である香川県荒神島遺跡や弥生時代末の玉野市日比沖銅鐸などで、瀬戸内海の主要航路は児島の南沖のルートであったとみられるが、児島屯倉はそれに面してではなく児島の北東岸に設けられる。6世紀後半以降、備前・備中南部で鉄、備讃瀬戸と牛窓では塩の生産が活発という以上の勢いでなされることになるが、そうした物資の生産に関与し、王権の元へ送ることが、この2つの屯倉の大きな任務であったとみてよい。

八幡大塚古墳前方部石室の構造と副葬品は、6世紀後半の吉備地域の政治情勢を明瞭に映し出す資料と言える。発掘調査から60年を経ての整理・報告であるため不明確な箇所もあり、小札甲をはじめとする良好かつ豊富な資料の特性を十分に論じるには至らなかったが、基本的な情報を提示することはできたと思われる。今後これらが研究の材料として活用されれば幸いである。

ここに掲載した資料は、一部をのぞいて国が保有しており、岡山県立博物館が借用し展示等を行っている。

報告の作成にあたり、以下の各氏・機関から多大なご教示、ご支援をいただいた。心からお礼申し上げます。橋本達也、尾上元規、安川満、辛川あかり、藤川聖起、大久保徹也、正岡睦夫、出宮徳尚、清家章、今津勝紀、ライアン ジョセフ、亀田修一、伊藤晃、高橋護、松本和男、岡山理科大学考古学研究室、岡山県古代吉備文化財センター、文化庁文化財第二課、岡山大学文明動態学研究所

《註》

- (1) 図4は地形測量図に前方後円墳の形状を重ねたが、正確に位置を合わせるためには空中写真を立体視して周辺地形との位置関係を把握したうえで合成する必要がある。ここではそこまでの作業は行えておらず、概略の位置である。
- (2) 石室平面図と立面図が合わず、どちらの数値によるべきか判断できない。また、立面図にある下端の線は、石の下端か石が露出している範囲を示すのか判断しがたい。このほか、図23のうち石棺断面についても調整はしていない。
- (3) 同じ児島の倉敷市琴海1号墳でも高さがある石を用いて棺台を設ける。
- (4) 吉備では石室内に配置された木棺の痕跡が検出される例がかなりある。石室構築後短期間で土が流入したとは考えにくく、意図的に土を入れたとみるべきである。
- (5) この個体は土器に注記やラベルがない。該当する資料がない3号墳取り上げ番号28と判断したが、前方部石室出土の可能性もある。なお、遺構帰属に問題がある遺物はこの1点のみである。
- (6) 刀子状鉄器が出土したとされる(鎌木1967)が、該当するものはない。欠損した鏃をそのように判断したのであろう。
- (7) 図19は、石室内実測主軸(1・2次)と石室石組み実測主軸(3次)を正確に合わせられないため、推定で合わせている。
- (8) 排水溝がはじまる位置は確定できる。排水溝の軸線は石室実測主軸に対して約5°西に振り、墓道中央部を通るが、先端の実測基準点を確定することができないため、排水溝の図は石室実測主軸と平行に置いた。
- (9) 前述のように石室全体に赤色顔料が塗られるが、図17ではそれらは省略し、この部分にのみ顔料の塗布を表示した。
- (10) 家形と理解しにくい形状であるため、博物館の展示では家形の表記を省略している。
- (11) 石棺蓋石の北半にはサナギ(ハエ皿蛹殻か)が多数散在していた(調査参加者正岡睦夫氏のメモによる)。
- (12) 貝は土ごと取り上げられており、上に草摺裾札89の左部分小札4枚がある。
- (13) 他に、調査写真に写る無蓋高杯2点と土師器大型高杯1点も該当する資料がない。調査中の盗難か。それらとともに写るはそうは現存資料と対照しにくく、部分的に写る無蓋高杯についても判断がむずかしいが、一部だけが失われたとも考えにくい。最大で、須恵器無蓋長脚高杯6点、はそう3点、土師器大型高杯1点が失われている可能性が高い。副

岡山県南部では、竜山石製の組合式家形石棺は、八幡大塚古墳以外に数例が知られる。いずれも古墳から遊離して転用材となっており、全形や帰属する古墳が明確でないが、岡山市宮山西塚古墳や同唐人塚古墳などの刳抜式家形石棺と同じく7世紀代とみられる。八幡大塚古墳例は地元石材である浪形石製石棺を補完する形ではじまる竜山石製家形石棺の搬入の最初に位置づけられる。

竜山石製に限らず石棺は全体が加工されて整った形状をとるが、八幡大塚古墳例は石材の選択と加工に簡略なところがあり、そのため特殊な形態をとる。石棺の完成を急いだ結果、あるいは、石棺のなかでも下位であることを示したという2つの可能性が考えられるが、いずれが妥当か判断しがたく、後期の石棺全体の中で評価する必要がある。後円部石室の棺材が不明なことが改めて惜しまれる。

副葬品の破壊 大和の横穴式石室墳では有蓋高杯が多用され、吉備では杯類が主体を占める。そうしたなかで八幡大塚古墳では須恵器・土師器の高杯の比率が高い点に特色がある。

遺物の整理によって一部の須恵器・土師器が割られていることが明らかになった。横穴式石室は乱掘を受けていることが多く、そうした際に土器類が損壊した可能性、また、追葬の際の片付けによって土器が破損した可能性もあるため、横穴式石室出土土器の損壊についてはあまり留意されていない。前方部石室も追葬の木棺があり、その段階に副葬品の破壊や破損があった可能性は否定できないが、ほとんどの杯が蓋と身を合わせたままで、赤色顔料が破壊された土器に撒かれた状態であることから、初葬での儀礼の跡をとどめると考える。

その特徴を整理すると、①割る器種に杯類は含まない。②脚をもつ器種を中心に割られるが、一部の個体に限られる。③脚をもつ器種では脚を折り、はそう等では口縁部を砕くが、杯部や壺部は割らない。

土器類の破壊は葬送儀礼終了時の作法とみられるが、壺部などを割って容器としての機能を失わせる形をとらないことや、細かく割り砕いたものが少ないといった特徴があり、一部の器種を象徴的に割ったとみられる。県下の資料を細かく検討するに至っていないが、確実に高杯を折った例は確認できておらず、提瓶の口縁を割る例が目立つ。破壊される器種と部位を整理することで、儀礼終了時の土器の扱いの地域性を抽出することが可能と見込まれる。

（5） 八幡大塚古墳築造の意義

以上、古墳の特色を整理してきたが、多くの点で顕著な特性をもつ。吉備地域で有数の墳丘規模をもつ首長墳であり、これを児島屯倉との関連を抜きにして理解することはむずかしい。屯倉が王権によって設置され、それを主管する人物は中央から派遣されるとはいえ、地元の協力なしに生産や貢納などを円滑に進めて屯倉を機能させることはできないであろう。百済にも関係をもつ備前南部の有力氏族が屯倉の運営にあたり、その長が屯倉の地に本拠地を置いたことを示すために、この古墳を築造したと考えられ、被葬者を吉備海部直と考えるのが適切であろう。

墳形や羨道の形状、石室石材の巨石化ではこうもり塚古墳と共通する。排水溝の有無や石棺石材など異なる部分はあるが、それは両墳それぞれの独自性であり、五条野丸山古墳－欽明大王陵をモデルにするという大枠は同じである。八幡大塚古墳が児島屯倉と一連の関係にあるとの理解を妥当とするなら、こうもり塚古墳は児島屯倉と一体で運用された白猪屯倉にかかわることになる。かつては、こうもり塚古墳は吉備勢力の独自性や力の大きさを示すものであり、八幡大塚古墳はそれの

石室の目張り 八幡大塚古墳前方部石室の大きな特色として石室の目張りがある。遺存した範囲はわずかであるが、壁面を構成する大形石材の目地部分を粘質のある土で埋め、少なくとも玄室については壁面全体をほぼ平らに仕上げたとみてよい。巨石の使用は首長の権威を表示することにもあったろうが、平板な壁面を形成することを目的としたと考えられる。この上に赤色顔料が塗布され、天井石を含めた石室内面は赤一色になる。

この目張りのモデルとなったのも五条野丸山古墳と考える。この古墳では羨道奥半から玄室にかけて粘土等による目張りがなされている。その量は多く、落下した石室目張り土が、石棺の棺身ほとんどもを埋める玄室内流入土の多くを占めると考えられている。発掘を伴わない調査であり、石室の目張りが石室構築時になされたのか、後になされたのかは判断できないとされる（宮内庁陵墓課1994）。利用可能な奥行きの石室ではないため、大規模な造作が後世になされたと考えることはむずかしいと思われ、構築時とするのが適切と考える。

こうもり塚古墳も石材間は粘土で目張りがなされており赤色顔料の塗布があったとの指摘がある（葛原・近藤・鎌木1986）。しかしながら、前者は現在確認がむずかしくなっており、後者についても判断が保留されている（岡山県古代吉備文化財センター 2023）ため、八幡大塚古墳と共通する項目がかつて指摘されたと言うにとどめざるをえない。改めてこの問題を問うとともに、巨石墳の調査において留意することが必要である。

（4）副葬品

本来であれば、前方部石室の副葬品と後円部石室のそれを対比するところであるが、残念ながらそれは果たせないため、前方部石室副葬品の特徴を整理しておく。

資料の特徴と被葬者像 前方部石室副葬品のうち、垂飾付耳飾り、空玉、振り環頭大刀、靱、小札甲、障泥金具は通常の後期古墳には見られない副葬品である。耳飾りは別として、空玉以下の品目はヤマト王権から与えられたものであり、地方豪族のなかで上位にあったことを示す。一方で、障泥は特別な製品であるが、それ以外の馬具は飾りのない実用的なもので、金張りがなされ馬を飾る雲珠や辻金具などは伴わない。この対照的な副葬品が示すのは、おそらくは後円部石室被葬者との格差であり、あくまでも次席であることを表示したと考える。

垂飾付耳飾りは被葬者がどのような人物であったかを知ることができる資料である。この耳飾りは百済の官人層が着装するものであり、被葬者は百済の出身であるとの考えが示された（高田2022）が、前方後円墳の前方部石室に葬られており、出自は倭にあると言える。耳飾りは百済に仕えたことを示すが、振り環頭大刀をはじめとする品目は倭王権への奉仕に対して与えられたものである。したがって、被葬者は倭と百済、その両方に属したことになる。この時代、日系で百済の高官となった人物として日羅がいる。九州の豪族の子で、百済の宮廷に仕え、高官となった後に倭に招聘されて献策を行うなどをしたが不慮の死をとげ、最終的に九州の本貫の地に葬られた。八幡大塚古墳前方部石室石棺の被葬者は、日羅に似た特殊な履歴をもつ人物と考えられる。

このほかに、資料の分析を果たせていないため踏み込んだ考察はむずかしいが、前方部石室を特徴づける遺物として赤色顔料がある。潤沢な使用は交易等による入手をうかがわせるが、後期古墳での使用がほとんどのなされないなかでの大量使用であり、赤色顔料使用の系譜を考える必要がある。

前方部石室では初葬に亀山石製組合式家形石棺が用いられ、木棺が少なくとも1基追葬される。

図53にそれらを示した。甫崎天神山8号墳(6)と栗井大塚14号墳(7)は石室が完全に埋没していて羨道先端が確定できる例である。こうもり塚古墳のように玄室側壁が直線になるものばかりではなく、緩いカーブを描くものもあるが、それらでは袖部側の玄室側壁の前側と奥側の両端をもとに図の軸線を決め、奥壁の midpoint から伸ばした線を主軸とした。袖部側の羨道先端が主軸上に設定された場合、羨道は外に曲がり、逆の場合は内側に向かう。岩田8号墳(2)、岩田14号墳(3)のように羨道先端が主軸と完全に合わないものもあるが、後者は袖部側先端の石材が下方に動いているようである⁽¹⁹⁾。また、喜兵衛島6号墳(10)も羨道先端は合わないが、玄門部に石を配するという九州系の石室の伝統を保持する在地的な石室であり、羨道を曲げるという点のみが導入された可能性がある。図示した以外に、斜軸羨道とみられる資料は、瀬戸内市長船町大塚8号墳や岡山市林原6号墳、岡山市大崎6号墳、同7号墳、総社市稻荷山C69号墳など多くがある。

これらはいずれもTK43型式期に属しており、斜軸羨道はその時期の標準といえるほどに普及する。しかしながら、吉備全域に見られるのではなく、備前(1～3)全域から備中南東部(4～7)にかけての地域と、備中北部(9)から美作西部(8)がその分布域となる。美作では佐良山古墳群、備中では高梁川よりも西の地域でこの形態が見られない。また、分布域内においても倉敷市赤井南3号墳は羨道先端位置が主軸から少しはずれ、岡山市西山2号墳はこの形態をとらない。前者は近接する赤井南4号墳(6)の存在から、普及する過程を示すとみることができるが、後者から斜軸羨道を採用しなかった地域が分布域内にモザイク状にあった可能性が考えられる。

岩田14号墳は墳丘規模が大きい、他は群集墳を形成する小墳である。横穴式石室は地域ごとに特性をもつことが指摘されており、それぞれの地域に造墓技術をもつ集団が所在したとみられる(尾上2020)。上記の状況は複数の造墓集団が石室の基本的な設計を共有していることを示しており、情報の伝播も当然考えられるが、こうもり塚古墳をはじめとする首長墳の築造への参画や動員が設計を取得し共有する契機であった可能性が高い。それを妥当とすれば、吉備地域内の斜軸羨道はこうもり塚古墳をはじめとする巨石墳の被葬者が影響を及ぼした範囲と見ることができる。この時期、吉備の5郡に白猪屯倉、続いて児島屯倉が設置されたことが記される。文献や木簡から、邑久郡、児島郡、哲多郡、大庭郡で白猪部の人名を知ることができるが、斜軸羨道の分布と大きな齟齬はない。検討はなお必要であるが、屯倉の設置という視点で首長墳、そして群集墳の関係を考えていくことも必要であろう。

斜軸羨道は吉備ではTK209型式期には用いられなくなり、羨道は主軸にそって前に伸びるものに変化する。羨道前側を広くし、片袖式の場合、袖のない側の壁面を一直線に伸ばしたり、袖部側の羨道前端を奥壁隅の延長線上に置くものが一般化する。奥壁隅の位置を重視する設計が新たに導入され、普及したと考えられる。

ここでは吉備と大和の関係について考えてきた。斜軸羨道はこの2つの地域だけでなく、全国各地に分布し、それはいずれもTK43型式期に出現する。図52の島根県大念寺古墳(7)や群馬県綿貫観音山古墳(8)はその一例である。TK43型式期よりも前の横穴式石室で、短い羨道が玄室主軸に対して斜交する例は多い。それらでは共通する設計の約束事を見出すのがむずかしいが、墓室である玄室に向かうルートが玄室奥壁に正対させないという何らかの思想にもとづいた形態であったとみられ、それを定型化したのがここで述べた斜軸羨道である。大和から吉備へと同様に、他の地域にも中央から波及したと考えられる。

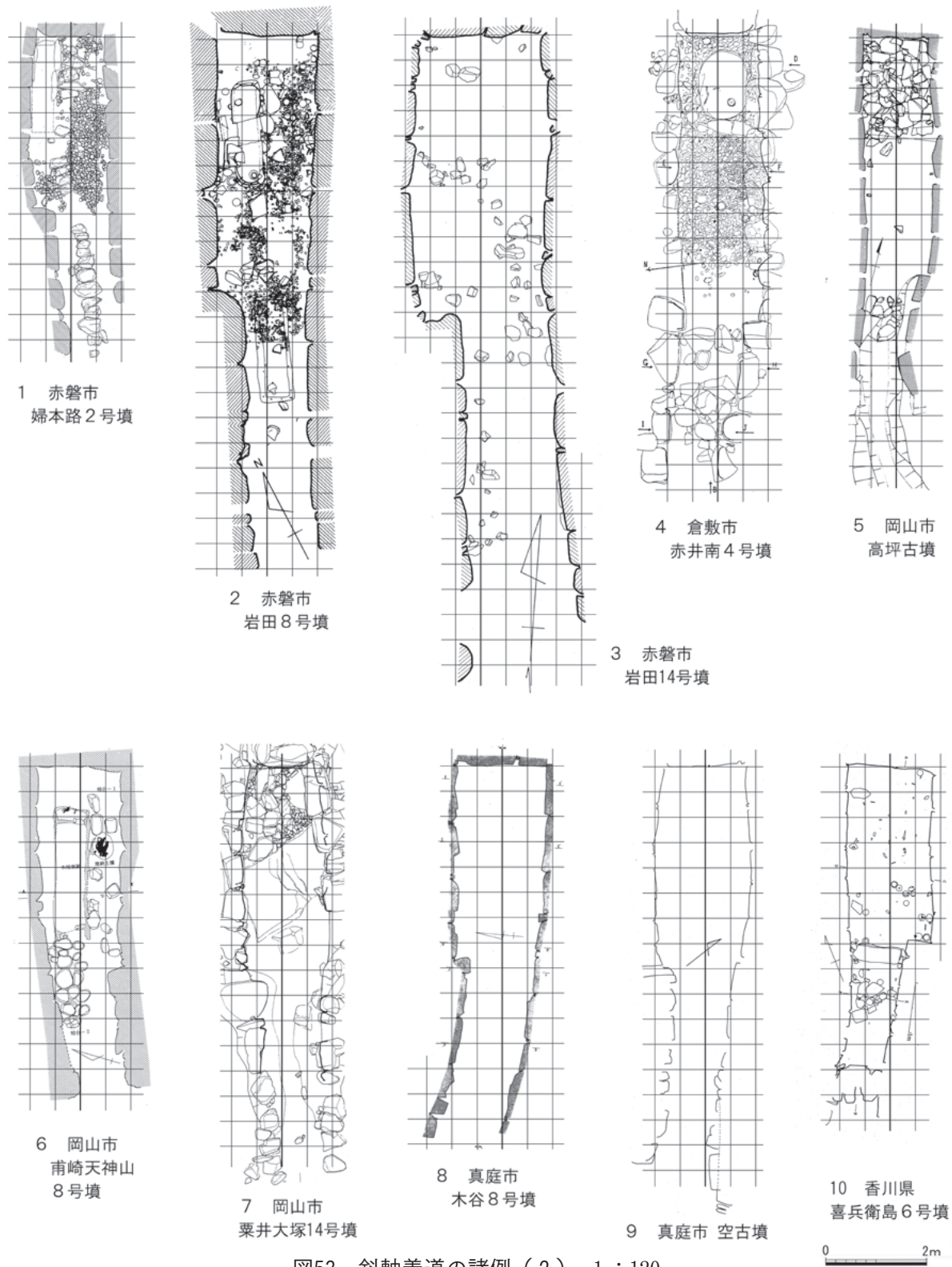


図53 斜軸羨道の諸例（2） 1：120

すれば限られた時期に用いられたことになる。

吉備の諸例 図51に亀ヶ原大塚古墳前方部石室を示したが、この石室も羨道が屈曲しており、八幡大塚古墳やこうもり塚古墳と同じ斜軸羨道と考えてよい。こうした斜軸羨道は吉備南部では珍しい存在ではなく、発掘調査や石室実測において主軸の設定に悩むことは少なくない。

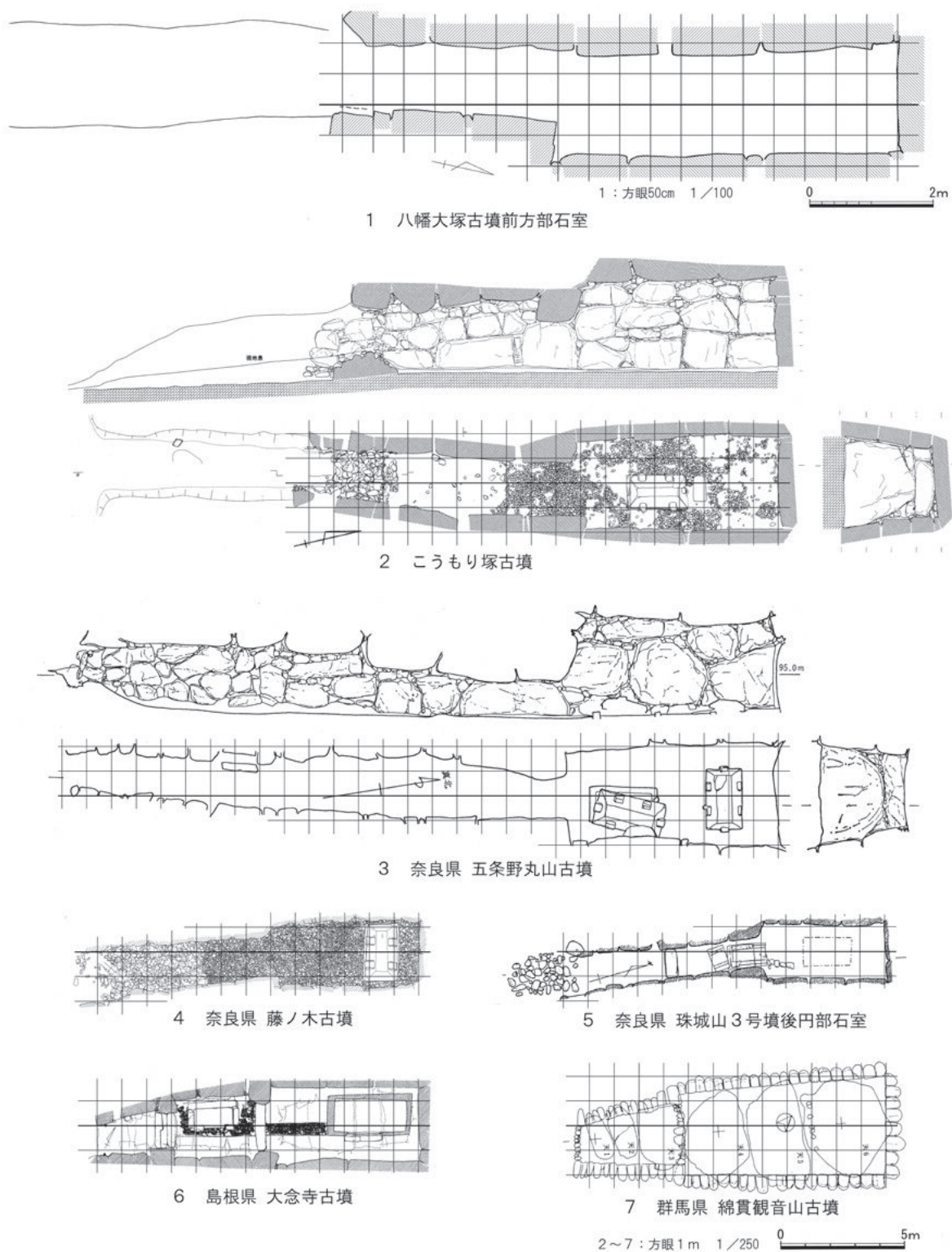


図52 斜軸羨道の諸例 (1) 1 : 100、1 : 250

さらに若干伸びるのかがわからない。二塚古墳の場合、後円部石室は斜軸羨道ではなく、羨道は主軸にそってまっすぐに伸びる一般的な形態であり、珠城山3号墳前方部石室も同様である。斜軸羨道と通常の羨道が大和においてどのような関係にあるのかは十分に整理できていないが、後円部と前方部の石室が同時構築であるなら2つの形態は共存し選択されたことになり、時期差をもつと

ぜこうした差を生じたのかはわからない。

八幡大塚古墳は大きな墳丘をもつが、石室はそれに応じた大きさではない。後円部石室は玄室幅2mで、こうもり塚古墳（同3.6m）や鳥取上高塚古墳（同2.7m）の石室規模にはとうてい及ばない。前方部石室は後円部石室よりも小形になるのは当然であるが、石材の大きさや入念な排水溝などを別とすれば、規模は群集墳の石室と大差はない。部分的な要素が卓越する一方、一般的な規模で石室を構築するという、アンバランスな点がこの古墳の特徴であり、被葬者たちの微妙な立ち位置、高い格付けと、それに応じた実力がいささか不足するという状況を反映すると考える。

（3）斜軸羨道

八幡大塚古墳とこうもり塚古墳 八幡大塚古墳前方部石室の羨道は玄門から斜め外側に出て行く形をとる。図52-1に示した石室平面図は2次調査で作成された床面よりやや高い位置での平面図と、3次調査で作成された羨道前側基底石材下端の図を合成したものである。羨道東壁が東に振れる形になるが、入り口が広がるのではなく、この部分の石材の面が斜めになっているため、羨道先端基底石上部の形状は破線となる。この石室は奥側が広がるため主軸を把握しにくい、玄室東壁と、それに平行する西壁の奥から2・3石の中点を通り玄室東壁に平行する線を主軸とした。これによれば、羨道東壁基底石上縁は主軸線上になる。主軸と平行に玄室東側壁を構築し、袖部から伸びる羨道の先端を主軸線に接する位置に設定するため、羨道の軸線が玄室軸線・石室主軸に対して斜めになると考える。

この軸線設定は、八幡大塚古墳前方部石室に先行して築かれたこうもり塚古墳も同じである。玄室の東壁は直線をなし、石棺の長辺に平行する。これに平行し奥壁中央を通る線を主軸線とすれば、羨道の先端は主軸線上に位置することになる。吉備を代表する2つの後期前方後円墳の石室は同じ設計で構築されたとしてよい。羨道には玄室とは別の軸線を設定したと考えること（沼澤2011）も可能であるが、こうした単純な設計で構築に問題はないだろう。なお、八幡大塚古墳前方部石室には長大な墓道を伴うが、こうもり塚古墳にも長い墓道が設けられる。

五条野丸山古墳 軸線が玄室の軸線に対して斜めになる羨道をここでは斜軸羨道と呼ぶが、これは吉備で出現したものではなく、そのモデルは大和にあると考える。五条野丸山古墳の石室は相当埋没した状態であり羨道前端付近の堆積が厚くなるため、石室平面図から石室主軸や羨道先端の位置を正確に求めることはむずかしいが、羨道の軸線が玄室の軸線に対して斜めになっており、吉備の2石室と共通の設計であると考えてよい。五条野丸山古墳については、一瀬和夫氏による墳丘の復元（一瀬2011）によれば羨道の前面は墳丘の上面にはならず、かなりの長さの墓道が付くことが予想される。また、石室の方位が五条野丸山古墳とこうもり塚古墳で共通することも指摘できる。

斜軸羨道は五条野丸山古墳に限ったものではなく、大和の資料では藤ノ木古墳や珠城山3号墳などがある。藤ノ木古墳の場合、通常用いられる石室平面図ではここに示した図よりも羨道側を上にするため玄室と羨道の曲がり目は目立たないが、その軸線では石棺は少し斜めになる。石棺が玄室主軸に対して直交し、玄室北東側壁（図下側）の両端を結ぶ線が主軸に平行するとみれば、図示のとおりである。珠城山3号墳もその例と考えるが、石室平面図が床面よりも少し高い位置で作成しており、羨道先端の本来の位置は図よりも少し上になると思われる。このほか、図示していないが、奈良県二塚古墳前方部石室も斜軸羨道である。ただし、羨道が報告で示された範囲までであるのか、

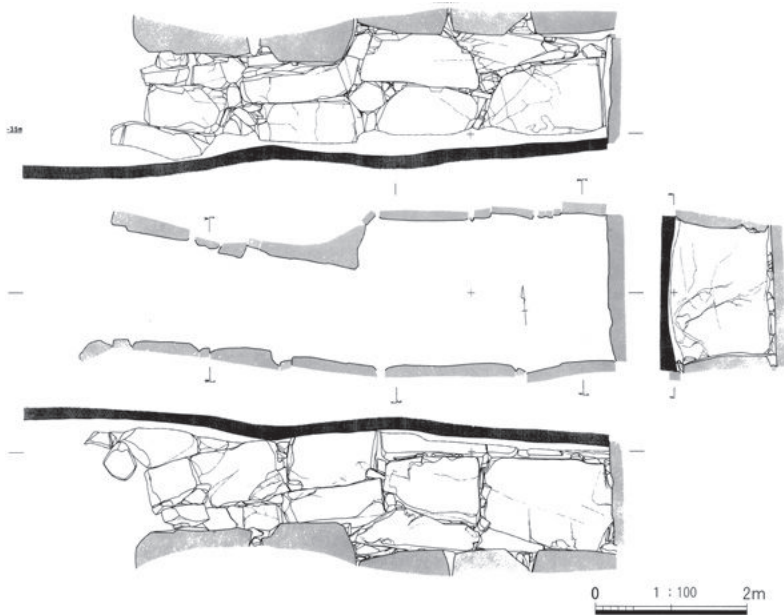


図51 亀ヶ原大塚古墳前方部石室 1:100

かれた可能性を考える。第3石室の主軸方位は後円部・前方部石室のそれとほぼ同一で、墳端に石室が開口したと考えられるので、一連の計画にもとづいて構築されたとみてよいが、何らかの事情で第3石室の構築が先行したと考える。

前方部石室と後円部石室の関係を知る手がかりはないが、図7の前方部墳丘断面によれば、前方部石室に伴う盛土層は下降しながら西にのびており、墳丘盛土を切り込ん

で前方部石室掘り方が設けられた状況はない。前方部石室は前方部墳丘と一連で構築され、前方部石室が工程のうえで後円部石室の後になるといったことはあったとしても、両石室は同じ時期に築かれたと考えておく。

壁面構成 第3石室の玄室壁面は奥壁と側壁の区別はなく4～5段に石を積んで構築される。玄室が前側で狭まる平面形は赤磐市八塚3号墳に類似する。玄門は羨道内に突出気味に1石を配置しており、畿内的な石室が普及する以前の特徴を痕跡的に保持する。

一方、前方部石室は大石で構築され、奥壁は1石にちかく、玄室側壁は2段で横目地が通る。石室形態が劇的に変化し、使用石材の巨石化が一気に達成されることがわかる。また、前方部石室玄室の平面形は狭長な長方形である。奥壁の1石化、玄室の長大化が段階的に進むという状況はない。

八幡大塚古墳前方部石室は石室規模が大きくはないという点を割り引く必要があるが、2段積み壁面石室のごく早い例とみられる。このことについて参考となるのが瀬戸内市亀ヶ原大塚古墳前方部石室(図51)である。石室はかなり埋没しており出土遺物は知られないが、袖部の突出は大きく八幡大塚古墳に近い時期と考える。壁面構成は推定を含むものの、想定できる床面位置から、奥壁は1石、側壁は目地が通りほぼ2段、北側壁の奥側は1石に近いとみられる。前述のように、亀ヶ原大塚古墳は八幡大塚古墳に続く墳丘規模の首長墳である。備中南部の三須丘陵地域では、江崎古墳や新池大塚古墳など、こうもり塚古墳の側壁3段積みが地域内で模倣の対象となるが、備前南部の首長墳では側壁の段数は固定せずに巨石化を進めた可能性が考えられる⁽¹⁸⁾。

使用石材の巨石化を見る上で問題になるのが後円部石室であるが、検討できる要素が少なすぎるのが難点である。わかるのは①玄室幅が前方部石室よりも広い、つまり前方部石室よりも大きな石室である。②奥壁は1石化しない。3段と想定。③側壁は横目地が通るらしい。この3点のみである。もちろん石材は第3石室のものよりも格段に大きく、巨石化という点では前方部石室と共通する。問題は②で、奥壁下段の高さは前方部石室のものよりも低い。奥壁が3段でそれに対応して側壁に横目地が通る大和の石室の壁面構成を採用したとみるのも一案であるが、前方部と後円部でな

丘がよく見える位置に築かれる⁽¹⁷⁾。こうもり塚古墳は古代山陽道に先だって所在したであろう陸路に、二塚山古墳は牛窓の泊地に面して築かれる。鳥取上高塚古墳は低地を避けて山麓に設けられた陸路に近接して築かれた可能性が高い。八幡大塚古墳も、それらと同じく児島屯倉の出入りに面して築かれた。

大形前方後円墳の被葬者を支えた配下の集団の墓のあり方は多様で、こうもり塚古墳は背後となる三須丘陵だけでも緑山古墳群や稲荷山古墳群など164基の群集墳が形成される。鳥取上高塚古墳の場合は5基前後からなる群集墳がこの地域の山麓・山上に散在して形成される。二塚山古墳では35基からなる阿弥陀山古墳群が港北側の山上に形成され、さらにそれよりも大規模な硫黄山古墳群が少し離れて所在する(宇垣2009)。もちろんこれは群集墳全体の数であり、前方後円墳と同時存在の数ではない。遠近や群集の度合いはそれぞれ異なるが、配下集団構成員の墓は首長墳の背後に展開する。そうしたあり方と異なるのが八幡大塚古墳で、歴史的環境で述べたように、古墳が所在する児島北東岸に築かれた後期の小墳は13基にすぎない。首長墳のみが築かれたと言うに等しく、この古墳の選地は多分に政治的なもので、本拠地から離れての築造であったと考えられる。

(2) 石室の特徴

備中南部の横穴式石室の変遷については、三須丘陵に所在するこうもり塚古墳と緑山古墳群の石室平面形や壁面構成の変化を検討した新納泉氏の論考(新納1987)が現在の研究の基礎となる。ここでは、使用する石材が大形化し、奥壁は1石化が進み側壁は段数が減少していくこと、また、玄室が長大化し細長くなることが指摘された。新納氏が分析の対象とした緑山古墳群とこうもり塚古墳を一括して扱うのではなく、石室規模の階層を区分し、最上位の超大型石室とそれに次ぐ大型石室に分けて変遷を考える見解(笹栗2010)や、これらの資料の先後関係を改めて問い直す論(大久保2023)も示されている。両氏の論で指摘されたのは、超大型の巨石墳であるこうもり塚古墳の築造が大きな画期をなすという点である。こうもり塚古墳については墳丘調査と出土遺物再整理の成果が示され(岡山県古代吉備文化財センター 2023)、備前最大の鳥取上高塚古墳の調査成果(光本・山口・ライアン2022)も示された。

さらに、横穴式石室の導入と展開の過程を総括するとともに、非在地型の首長墳を抽出して地域間の政治的関係を読み取る論考(尾上2020)や、地域をしばっての石室形態の検討(金田2018)がある。

3つの石室の関係 まず八幡大塚古墳の後円部石室・前方部石室・第3石室の関係を整理しておく。本来であれば石室裏込め土と墳丘盛土との関係で、石室の構築が同時になされたのか先後関係をもって築かれたのかを判断することができるが、墳丘はほとんどが失われ、残存部の盛土はごく一部しか調査されていない。

石室の構築は、第3石室がMT85～TK43型式期、前方部石室はTK43型式の新しい段階である。石室の構築と使用が一連の行為ではなく、3つの石室が同時期に構築されて使用時期がばらついたと想定することも不可能ではないが、第3石室と前方部・後円部石室の形態の差は大きく、第3石室が他に先行して築かれたと考える。第3石室が構築された段階で墳丘がどのような形状であったかは全くわからないが、石室構築と墳丘築成の手順からすると前方後円形の墳丘がその時点で形成された可能性はなく、第3石室に伴う墳丘が構築され、後にそれを包み込むように前方後円墳が築

ない。この木棺の被葬者と考えられる。

貝（図50） 大小の破片に割れて形状をとどめる状態であるため、土ごとに取り上げられている。殻長約12cm、幅9cm程度の二枚貝の片側2つを、どちらも内側を上にして重ねている。真珠色の光沢をもつ箇所も見られる。重なっている下側については、部分的に見えるのみで、詳細はわからない。貝の種類は不明で、用途も明らかでない。

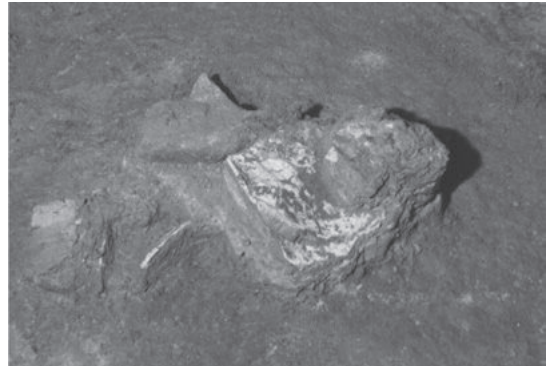


図50 貝

上に草摺裾札89の一部。左も草摺裾札か

f 関連資料

埴輪（図48） いずれも小片で、出土位置が確実な破片は墓道埋土あるいはその上からの出土である。窖窯焼成である。外面調整はヨコハケであるが（82～87）、破片が小さいこともあって静止痕の有無はわからない。内面調整はハケメとユビナデが見られる。円筒埴輪以外に朝顔形埴輪88・89がある。TK23～47型式期の埴輪とみられ、所在位置はわからないが、墓道を埋める土の採取場所付近に本墳に先行して築かれた古墳が所在したと考える。

図49～91は旧1号墳付近採集の須恵器甕破片である。以前調査された八幡山古墳は西の頂部に位置するが、ここを北浦と郡の境界が通るため東の北浦分の山頂は遺存していたようで、ここで採集されたものであろう。

8 考察

（1）墳丘の諸要素

墳丘規模と墳形 八幡大塚古墳は全長約64mの前方後円墳である。6世紀後半には、それまでやや低調であった首長墳の築造状況が変化し、巨石を用いた横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳が築かれる。筆頭となるのが総社市こうもり塚古墳（墳丘長96m）であり、赤磐市鳥取上高塚古墳（75m）がそれに次ぐ。八幡大塚古墳はその2基に続く規模であり、以下に瀬戸内市二塚山古墳（55m）、同亀ヶ原大塚古墳（40m）という序列になる。備中ではこうもり塚古墳に続いて江崎古墳（45m）が築かれるが、築造数では備前地域が優勢である。

長い前方部をもつこうもり塚古墳は五条野丸山古墳の築造企画を用いて築かれたと判断されており（金田2023）、鳥取上高塚古墳もその可能性が高い（宇垣2004・金田2023）。八幡大塚古墳はこれらと同様に長い前方部をもつ。墳端を確定できないため細かな検討は行いがたいが、こうもり塚古墳の墳形によく似る。二塚山古墳や亀ヶ原大塚古墳の前方部はこうした長いものではなく、上位の3基のみが五条野丸山古墳の築造企画を共有する可能性が高い。言うまでもないが、五条野丸山古墳は墳丘全長約330mと古墳時代後期最大の巨大古墳で、被葬者は欽明大王と考えられている（高橋2004）。

以前の報告では葺石と埴輪があるとされたが、どちらも八幡大塚古墳には伴わないと判断した。埴輪は閉塞に用いた土に含まれており、墳丘下を含めて、この古墳付近に先行して築かれた古墳があったとみられる。

立地 こうもり塚古墳から二塚山古墳までの首長墳4基は、いずれも小墳とは離れ、周囲から墳

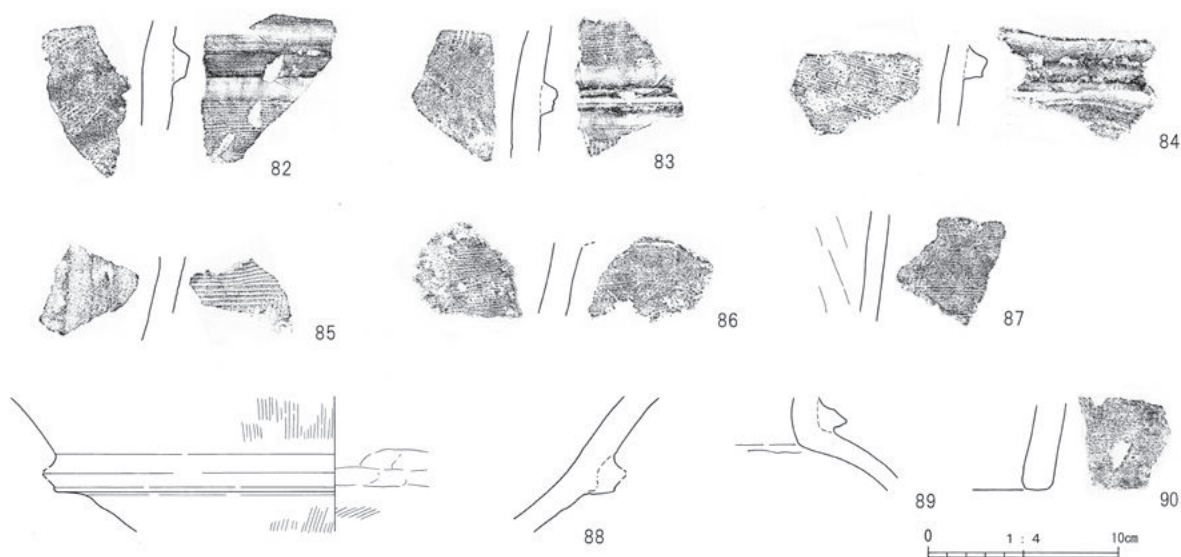


図48 埴輪 1 : 4



図49 旧1号墳出土遺物 1 : 4

に接していたとみられる。漆膜の存在とあわせ、障泥は革製漆塗であったと推定できる。岡山県内出土の障泥金具については、金田2023に一覧がある。

e その他の鉄器等 (図47)

鋏 ^{はさみ} 本体部分125と3片の破片がある。かなり大きな握り鋏で、馬の毛を整えるために用いたとすれば馬具の一種とも言える。先端部122はどちらの側になるのかわからない。小片123は122の対になる先端とみなした。

刀子 126・127の2点がある。完形の126は全長18.5cm、刃部長さ13.7cmと、刀子としては大形である。

128～135は用途不明の鉄器である。

128～132の5点は類似した形態で、先端を曲げて環を作る。129では、そこに幅約9mmの革帯が鏽に変わって残る。いずれも木材に打ち込んであり、脚端が残る130はそれが木材から突き出た状態、128・129は飛び出した先を曲げている。これらから、木材の厚さは2.7cmであったことがわかる。

133は直径5cm程度の環状になるとみられ、断面は方形である。鏽の状態から、何かに接していたとみられる。下面には鹿角と木質の破片が付着する。135は下側が刃になり、体部中ほどに透かしをもつ。134は環座金具で、長径5.3cmの環を吊り、方形の座金をもち木材に固定する。座金の上端には別個体の鉄片と木質が付く。木棺の金具の可能性はあるが、確定できない。

鍔 136～138の3個体があり、追葬の木棺に用いられたと考えられる。136が背の長さ約8cmで、他もほぼ同じ大きさである。背の断面形はいずれも長方形である。

石室の埋土からは上顎の切歯2点が出土しているが、埋土水洗で検出のため出土位置は明らかで

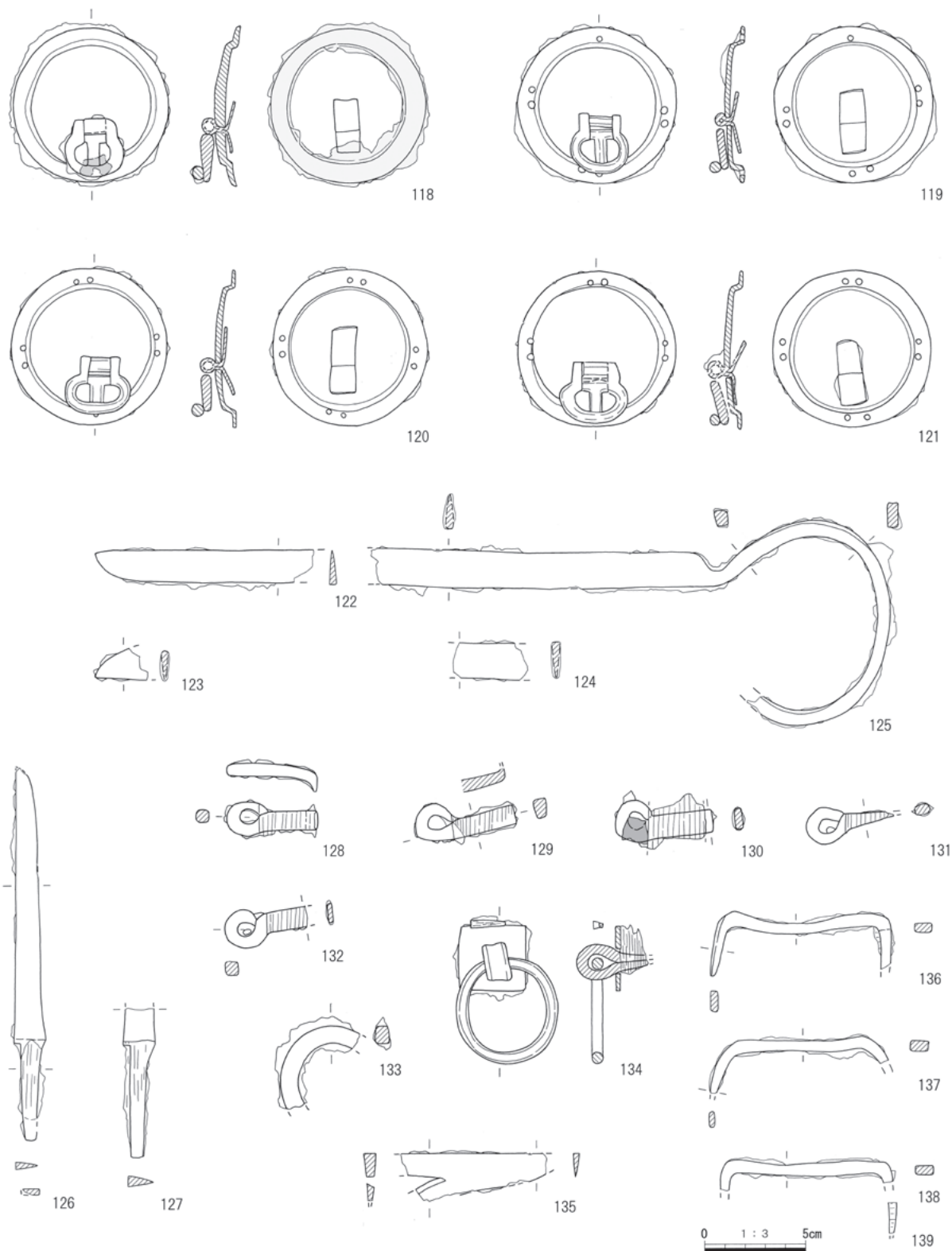


図47 馬具（2）・その他の鉄器 1：3

いて裏返った状態である。鉸具は座金具の下寄りに付き、鉄板を2つ折りにした脚金具を座金具の中で広げて固定している。座金具には障泥に綴じ付けるための孔が2個1対で4方に設けられるが、119の上側は1孔である。118についてはX線による孔の確認が未了である。118では鉸具先端に革帯から変わったとみられる錆があり、座金下面から外にむかって滑らかな錆面が広がっており、革

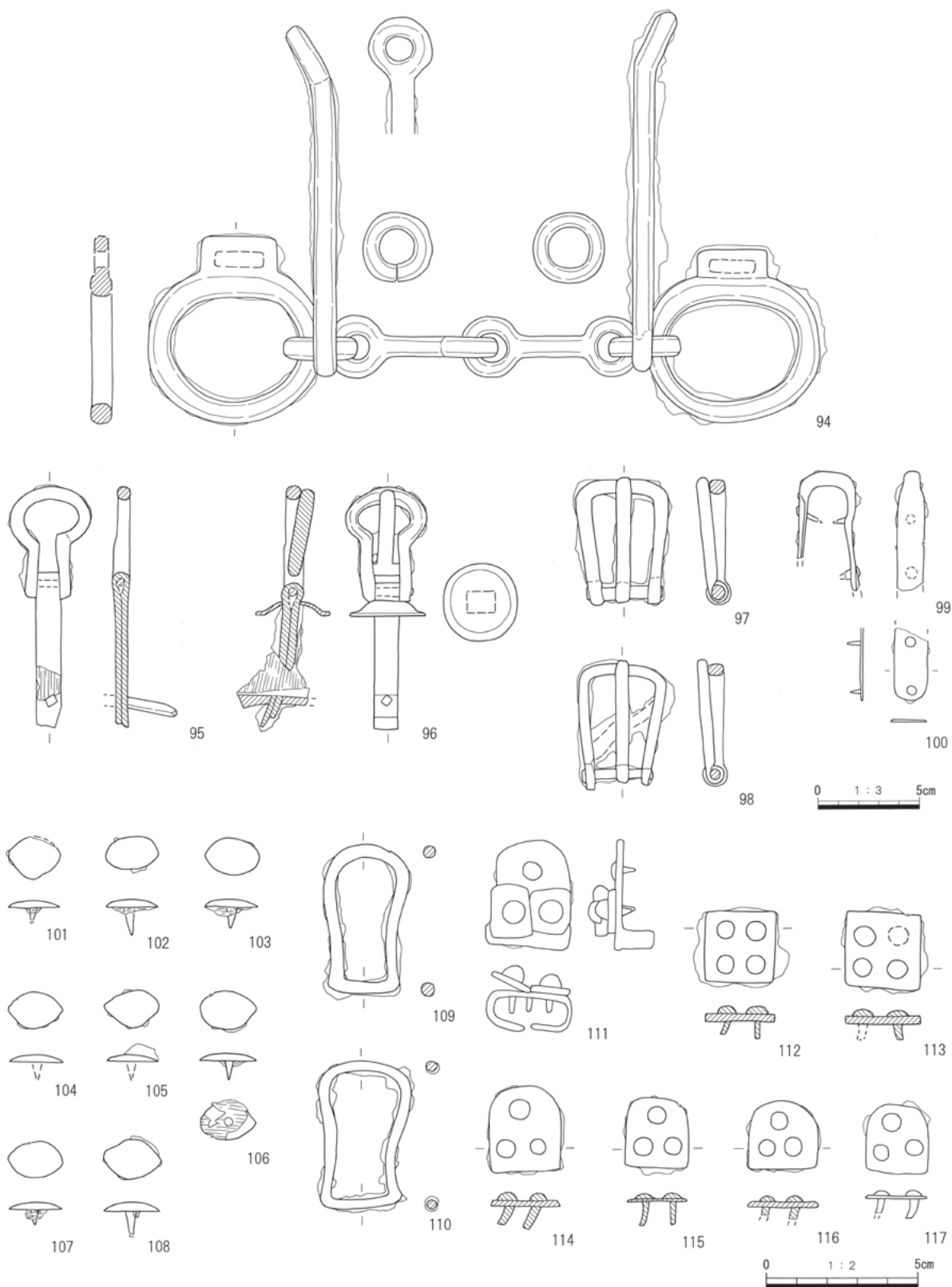


図46 馬具（1） 1：3、1：2

3つの鉤で留める。そのうち2つの鉤には小さい方形の座金を配する。

障泥金具 石棺蓋の上に置かれた障泥を吊すための金具である。118～121はほぼ同じ大きさで、118で座金具の直径7.7cmである。T字形の刺金をもつ小形の鉸具は、いずれも本来とは逆に向いて

端は約7mmの幅で斜めに曲げ、下端は外側に短く反らせる。上側の湾曲部分には残存5個の鉾を打つ。鉾頭の直径7mmで、鉾脚1本が遺存しており、長さ約7mm、少し曲がって打たれている。鉾が打たれる部分の内面には革が接したとみてよい面が細長く残っている。形状から、小札甲の脇下の防具と考えられる。

小札甲の特色 以上に示した小札甲は、豎上第1段、腰札、草摺裾札に鉄小札、他が革小札で形成される鉄革併用小札甲である。緘技法は各段緘b類で、富木車塚型に分類されている（清水1993）。各小札の幅は26mm前後と大きめで、形はよく揃う（図44）。草摺裾札は豎上第1段と同じ大きさの小札で、曲げ加工によって少し短くなったのだろう。

本例のような鉄革併用小札甲として、福島県清戸迫8号横穴墓、富山県加納南9号墳、長野県大室186号墳、奈良県珠城山3号墳、福島県八幡23号横穴墓、栃木県益子天王塚古墳、静岡県団子塚9号墳、奈良県市尾宮塚古墳、佐賀県潮見古墳などの出土資料が知られており、八幡大塚古墳と同じ部位に鉄小札を用いるのは、上記のうち冒頭から珠城山3号墳までの4例である。鉄革併用小札甲については、鉄小札で機能を強化した革小札甲（横須賀2017）、鉄小札よりも軽いことや変形のしにくさが革小札の利点（初村2018）、軽量性、柔軟性、堅牢性のバランスをとった（橋本2020）などの見解が示されるが、一致した評価ではない。

ここに示した八幡大塚古墳例は、緘には組紐を、草摺覆輪には絹布を用いており、緘に革紐を用いる上記の諸例とは異なり、装飾性が高い藤ノ木古墳出土例などの鉄小札甲と共通する。後胴最上段や草摺下端の鉄小札が、防御の機能において果たす役割はわずかである。部分的に用いられる鉄小札は、甲全体の形状を整え形が崩れるのを防止し、フォルムを鉄小札の甲と同じものにするために必要であったと考える。腰でくびれ、裾が大きく開くことが甲の形、上級の軍事指揮官の姿として共有されており、その規範のなかで軽量化をはかったのが鉄革併用小札甲であろう。八幡大塚古墳資料は、甲の差別化を示す良好な資料である。

d 馬具（図46～47）

轡 ^{くつわ} 94は方形板状の立間をもつ環状鏡板付轡である。形状をよくとどめる一方、立間が完全に埋まるなど錆による膨らみが顕著で、各部の太さを正確に測ることがむずかしい。銜の上に鏡板を並べ、眼鏡のような形にまとめられていた。鏡板と引手、銜を遊環で連結する。引手は先端をく字形に曲げて引手壺を形成している。鏡板の長径は図右側で8.5cmである。

鞍 ^{しおで} 95は刺金がない形態で、鉄板を2つ折りにした脚には木質が残る。脚端に鉄釘を入れて止めている。96はT字形の刺金がある鞍で、円形の座金をもつ。脚は95と同じく鉄板を2つ折りにし、先を少し曲げており、95と同様に止めに鉄釘を入れる。木質がよく残り、これが装着された鞍材の厚さが4.0cmであったことがわかる。なお、鉄釘と木質の間は厚い錆である。

98・99は、やや大きな鉸具で、鐙を吊る革帯先端の金具と思われる。どちらも刺金の基部を鉄棒に巻き付けている。106の下面には革帯の痕跡が斜めに付く。99・100は木製壺鐙吊金具の上端と下端で、それぞれ2つの釘が残る。

101～108は鞍飾金具で、未掲載1点を加えて9点の出土である。長さ18mm、幅12～13mm、杏仁形の平面形で、長さ5～9mmの釘が付く。106では下面に木質が残る。上面が銀張等の可能性はあるが、現状は鉄地のみに見える。繫に用いたとみられる小形の鉸具109・110がある。留金具は、方形の112・113、爪形の114～117がある。111はそれらよりも大きく、下端で革帯を締め込むようにし、

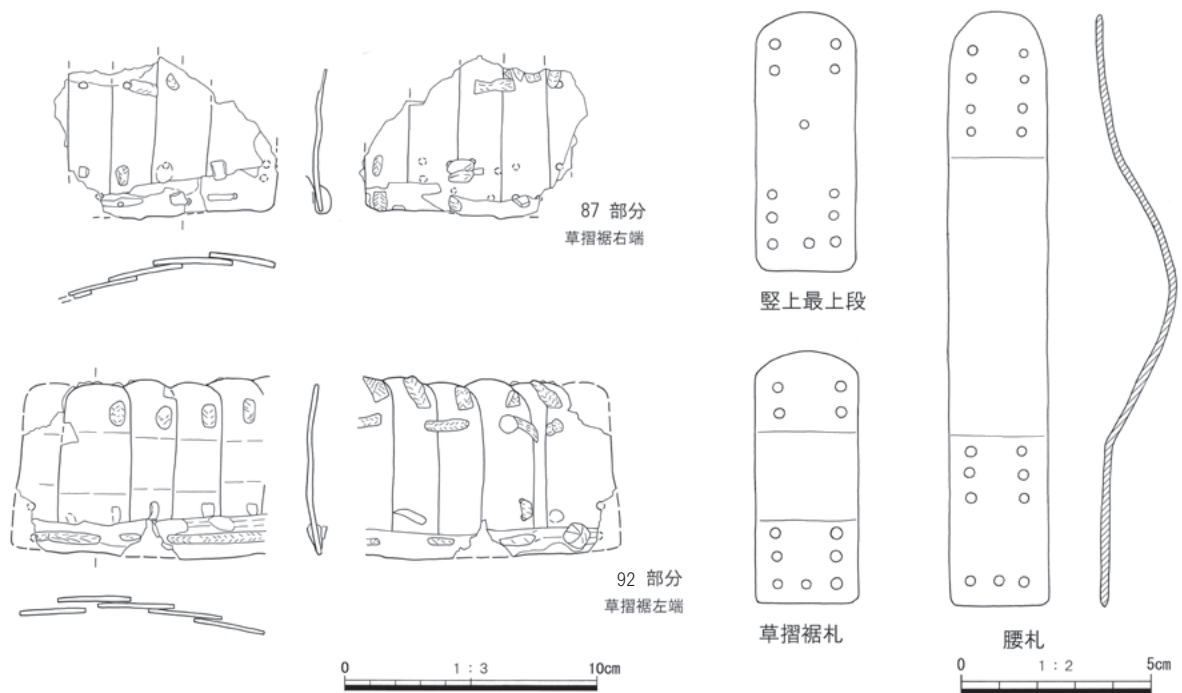


図43 草摺裾の両端 1 : 3

図44 小札 1 : 2

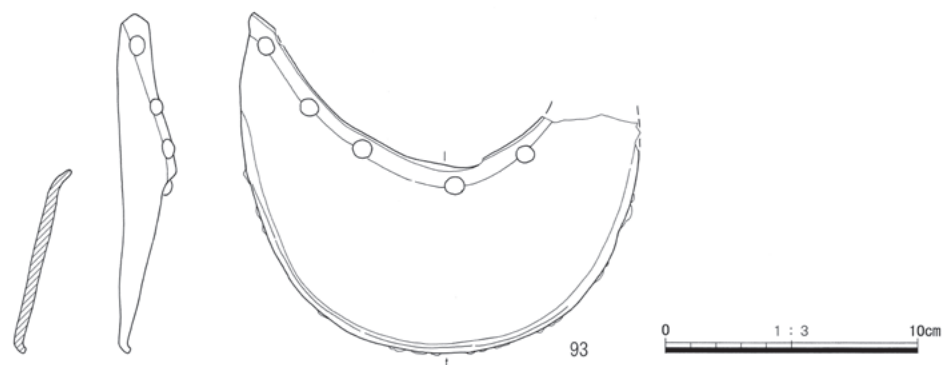


図45 小札甲 (6) 1 : 3

通るため、以下の作りと考えた。下捌孔を用いて小札裏側から布を編み込む。隣接する小札の下捌孔をとばしてその次の小札裏面の下捌孔から紐を通して並縫いにする(92裏面)のが基本であるが、隣接する小札の孔に通す場合もある。続いて布を折り返し、外側から3.5~5.8cmの間隔で縫い付ける。縫い付けは返し縫いにする。これにより、外側は切れ目のない組紐で縁取られることになる。用いられる組紐は緘紐よりも細いものである。

草摺裾札の左右両端では他の小札とは紐の使い方が異なる(図43)。右端では端の小札とその手前の小札までは草紐で結ぶが、最も外側の下捌孔と綴孔に縦方向で組紐を通す。裏面では革包側縁覆輪を組紐で綴じているようにも見えるが、確定はしがたい。左端では、合わせ部分を内側でふさぐために端の小札の重ねを変える。布包覆輪を綴じる組紐は結び目を作って終える。また、綴は端から1枚手前の小札で草紐から組紐に変えている。

付属具(図45) 93は小札甲の付属具とみられる製品である。帽子の庇に似た形状の製品で、残存幅15.9cm、断面部分の長さ7.4cmである。ほぼ三日月形の平面形であるが、左右対称ではない。上

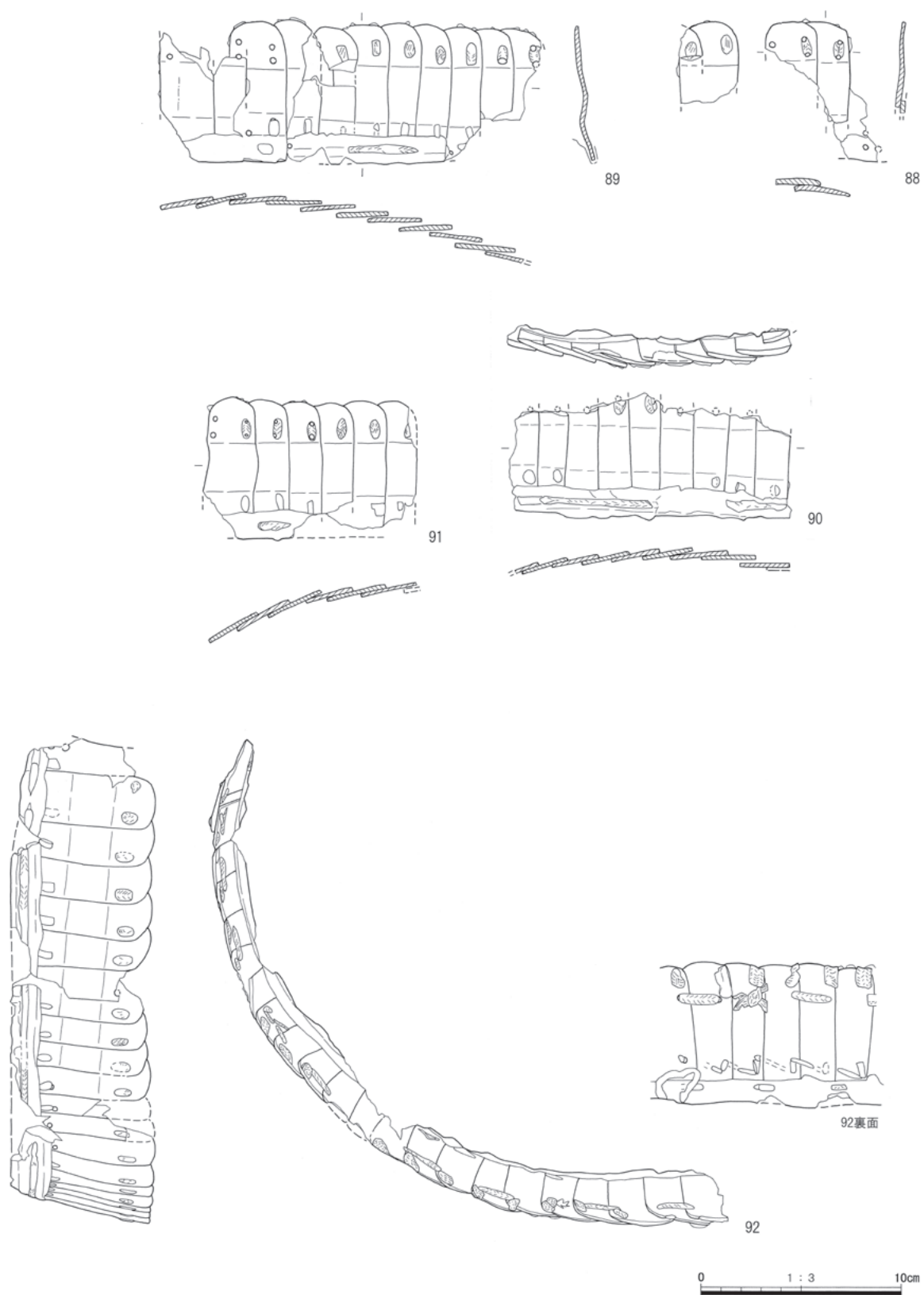


图42 小札甲（5） 1 : 3

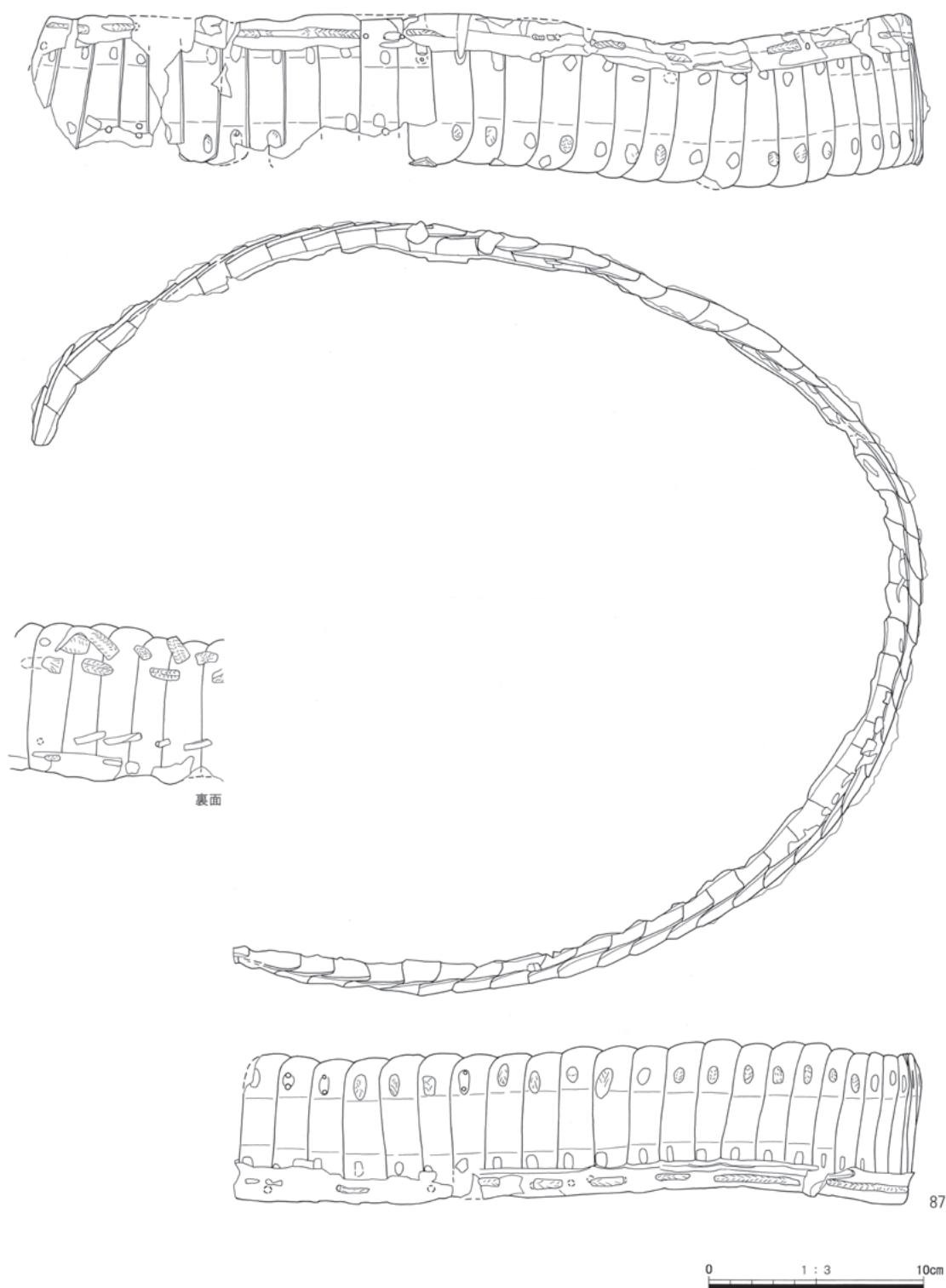


图41 小札甲（4） 1：3

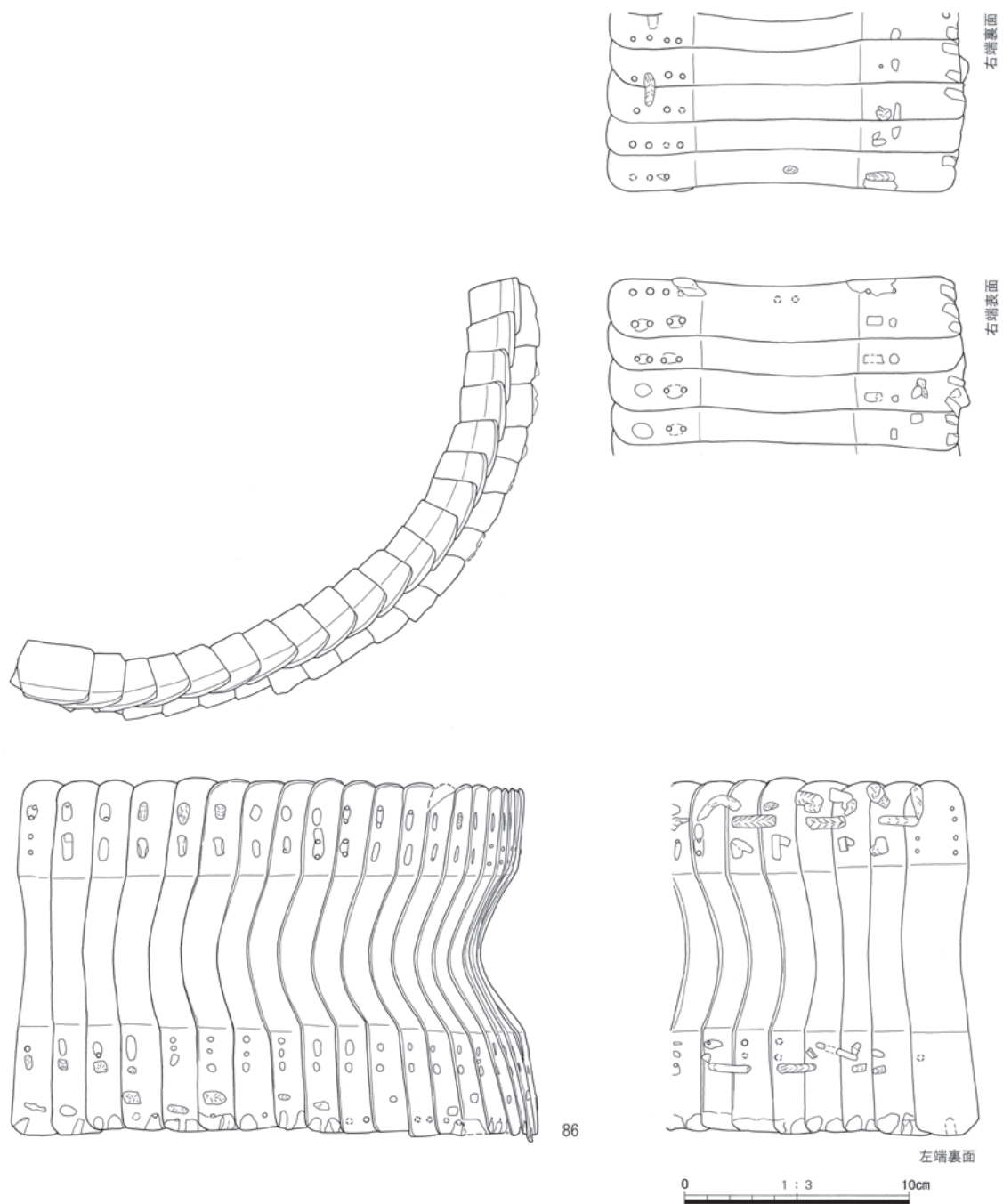
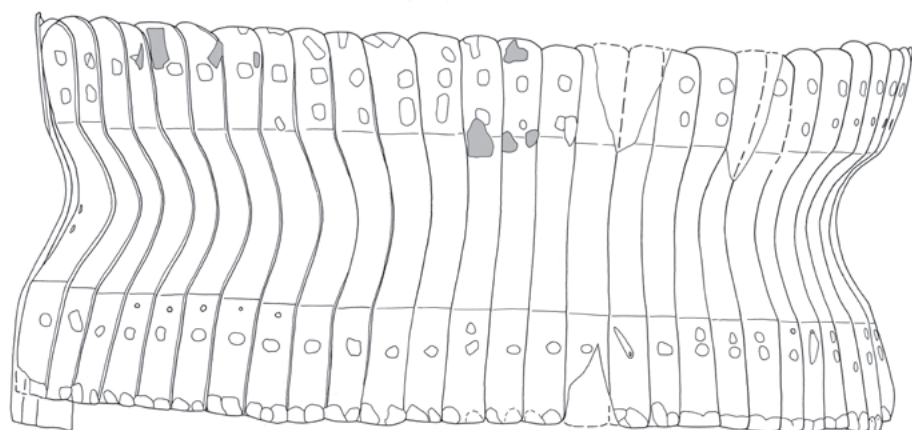
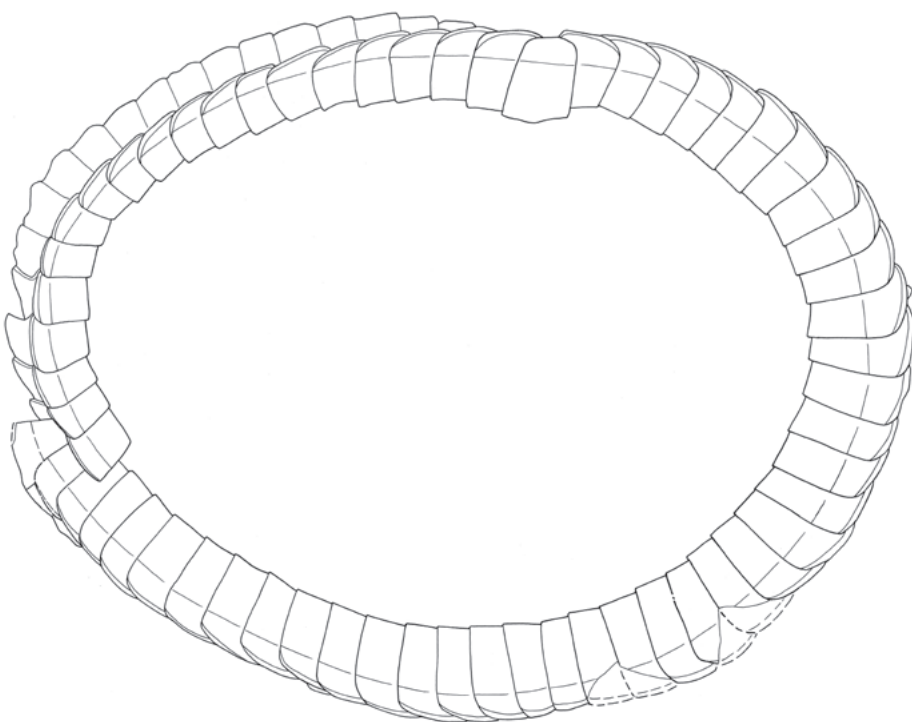
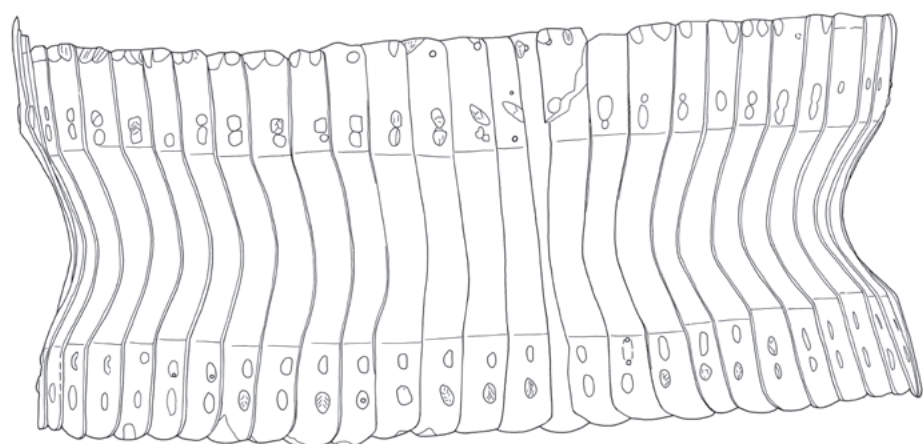


図40 小札甲（3） 1：3

草摺裾札は長さ6.6cm、幅2.7cmで、中ほどが浅く湾曲する。湾曲がかなり明瞭なものと、ごく浅いものがあるが、90付近から徐々に曲がり浅いものに移行して92の右側付近ではほぼ平札状になり、再び若干の湾曲をもつ小札になる。

小札は上から緘孔2つ、綴孔2つ、下搦孔である。緘紐と綴紐の形状は腰札の上側と同じであり、それぞれ組紐と革紐を用いる。92の裏面では緘紐を結んでいる箇所がある。

下端は布包覆輪で、固定には太さ約3mmの組紐を用いる。平絹の布を2つ折りにして用い、折り目を表側の上端にする。布、組紐ともに完全に残っているわけではなく、実物と痕跡が入り交じり表裏の遺存状態も異なるため、組紐での縫い付け方は今ひとつ明確でないものの、外側の紐が長く



85

0 1 : 3 10cm

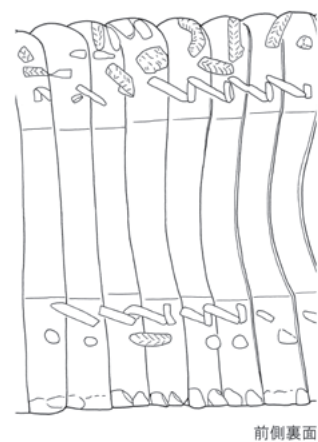
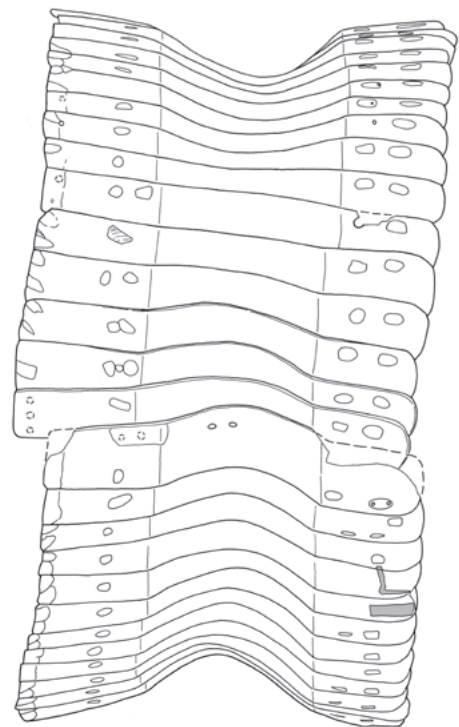
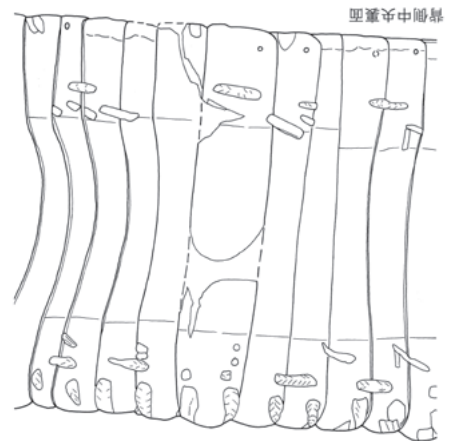
图39 小札甲（2） 1 : 3

図39左の側面図で前になる側が腰札列の着装時左端になる。残存はごく一部であるが、革包覆輪^{ふくりん}の痕跡が下の屈曲部付近に残る。小札の中央には縦に2つの孔が設けられる。図40の右端が腰札のもう一方の端で、こちらの方が遺存状態がよい。端部の表裏には、部分的であるが革包覆輪が残る。また、裏面上側では上の綴孔から第2 緘孔へ組紐が立取をなし、下側も同様に緘孔から上の綴孔へ立取の組紐が見られる。小札の中央部には縦に2つの孔があり、それを組紐がつなぐ。引合緒を付ける孔があってもよいのかもしれないが、現状では認められない。

86は85から切り離したうえで添えて置かれる。下記の草摺裾札の遺存状態からみて、切り離しは腰札のみで草摺には及んでいないと考えられる。副葬時の破壊とは必ずしもみなしがたく、切り離しの理由は明らかでない⁽¹⁵⁾。

草摺裾札(図41~43) 87~92が草摺裾札である。87が腰札85をとりまくように置かれていたまとまりで、腰札85の平面図(図39)とは逆に、図41では図の下が石室西側壁の側である。87左上先端部は折れていたようである。87から続く部分を図42に示した。小片化しているものもあり⁽¹⁶⁾、本来の並び順を判断しにくい。遺物番号の順と考えた。89と90は接合できるが、一連で図化することがむずかしく別図とした。遺物の出土状況で述べたが、草摺裾札の着装時左側部分は破片の出土位置に乱れがある。

87がすべて左上重ねであるのに対し、図42に示したまとまりはすべて右上重ねであり、重ね方向が変化する箇所の破片はない。折損部分での重複を生じないように算定すると図42右上重ね部分の小札は55枚で、87の左上重ねの56枚とほぼ等しい。破片を大きく取りこぼしていないとすれば、中央から左右へ56枚程度、全体で113枚程度が連なっていたと考えることができる。この推定を妥当とすれば草摺裾札の中央は87の端に近い所となり、腰札85背面の小札の重ねが変わる位置のほぼ後方になる。87の外周延長は74.0cmであり、草摺下端はそのほぼ倍の長さがあったことになる。



平札（図38） 長さ6.8cm、幅2.6cmが基本的な大きさであるが、ある程度の個体差があり、長さ6.9cmや幅2.5cm、広いものでは2.8、2.9cmのものもある。長さのばらつきの方が小さい。すべての小札に第3緘孔があり、80以外は裏面にワタガミの布が部分的に残る。

78は小札10枚が右上重ねで連なり、両端は完結する。長さ18.5cmである。79と81は接合しないが、79の左端と81の右端はそれぞれ端になり、緘紐の状態も似る。両者を合わせると左上重ね10枚となる。78が前胴左上端、79・81が前胴の右上端になると考える。残りのまとまりが後胴の上端になると考えられる。右上重ねの82・84と左上重ねの80・83からなるので、中央で左右に重ねが分かれる構成であったと考える。83右端の小札が中央になるかは不明であるが、少なくとも片側に8枚はある構成であったことになる。82～84は横断面が曲がるが、横幅がある後胴を丸め気味にして収納したのであろう。

ワタガミは細かい目の布である。これと小札の結合に第1・第2緘孔を用いる。ワタガミを貫く組紐の延伸方向はわかりにくい、83の内側で第2緘孔から右上にのびる紐が見られることから、右上がりを繰り返しながらワタガミを縫い付けるワタガミ綴付法B類（初村2011）と考えておく。84裏面のワタガミ綴紐は中央と右側で大きな面積となるが、長さが余った紐を団子状に結んでいて、それが崩壊しているようである。緘は裏面の第3緘孔で横取となる。79・81で緘紐は斜め上に向かうが、収納時にこの部分が下に押し込まれる形になったのであろう。綴には革紐を用いる。83・84では表面で上下の孔を縦に通じ、裏面では右上がりになっており、裏面で革紐が鋸歯状になる綴第2技法で綴じたことがわかる。下^{したがため}搦孔は3孔であるが遺存する下搦はなく、84で革紐の痕が見られる。

81の表面右端の小札の端には第1緘孔がなく、第2緘孔の下に孔を設けて組紐を通してある。

腰札（図39・40） 平面形が楕円形になる85と、85の前に置かれた平面形が弧状をなす86の2つからなる。85は背面を玄室西側壁に向けて置かれており、図39平面図では上が玄室西側壁の側である。85は、中ほどで内湾し上下両端が外開きになる大形の小札が組まれた形状を保って錆着しており、長径36.1cm、短径27.9cm、高さ15～16cmである。86も同様に錆着しており、上端の差し渡し29.9cmである。どちらも表面は緘紐は位置がわかるものの、錆で綴紐がわかりにくくなっており、裏面の方が遺存状態がよい。

85は小札59枚、86は20枚の連結である。85は図39平面図とその上側の立面図にあるように、小札の重なりが左右に分かれる。分かれの中央になる小札をのぞくと39枚が着装時の左（平面図右側）に連なり、右は19枚である。右側に86の20枚を加えると小札の数は同じになる。下記のように85の左側の端と86右端の小札は側縁の加工がなされており、86は85から切り離されたものと判断できる。

小札は長さ15.5～15.6cm、幅2.6cmである。湾曲部の長さは約7cmで、そこから屈曲する上下の部分はわずかに内反する。緘は上側裏面で第2緘孔を横取、表面を立取とする。第1緘孔から裏面側を上に向かう緘紐が小札上端付近まで残っていることが多い。緘紐は横取部分では太さ3～5mmで断面が円形ないし楕円形であるが、強く引っ張られているため、本来は断面が長方形で幅約7mm、厚さ約2mmの平打組紐であることがわかる。なお、これは平札や草摺裾札の緘紐も同じである。綴孔は上下2つずつで、これを幅3～4mmの革紐で綴じた状態が見られ、保存状態がよい箇所では縦に二重に巻いた革紐が残る。平札の場合と同じ鋸歯状の輪郭になり第2技法である。

小札下側の綴は上側と同様である。緘紐は裏面で横取になって表面に出る。下搦は幅6mmの革紐をらせん状に巻く。

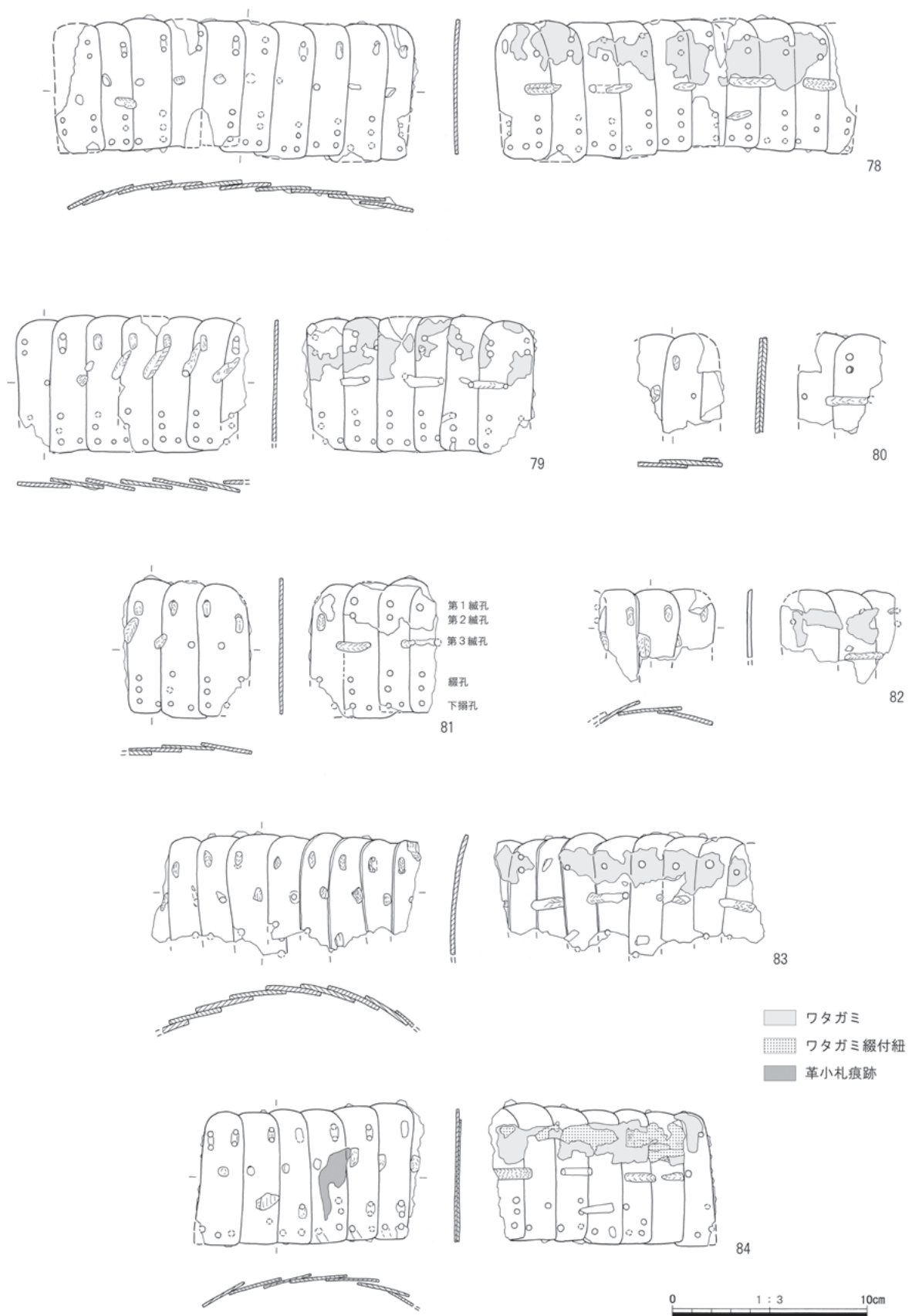


図38 小札甲（3） 1 : 3

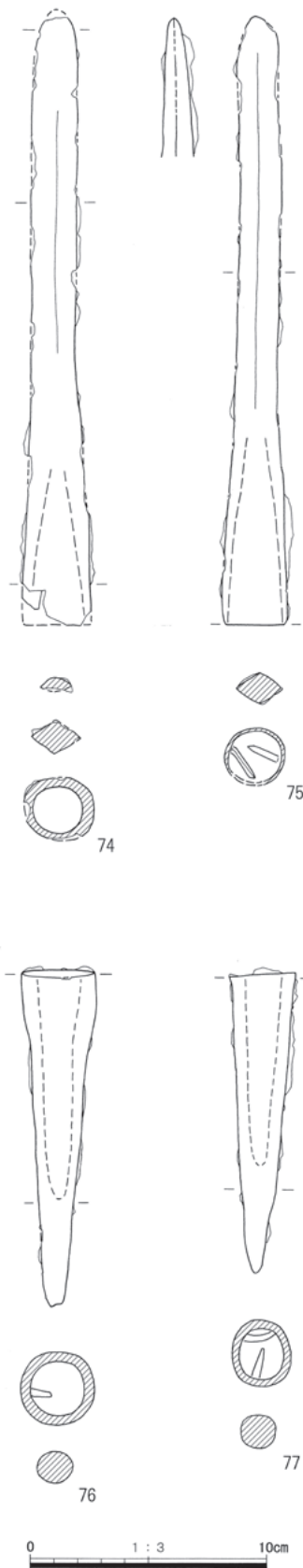


図37 鉄鉾・石突 1 : 3

78～81は須恵器である。78は石室床面出土の須恵器壺の肩部破片である。破面は新しいものではない。この個体の破片は他に出土しておらず、破片の状態では石室に持ち込まれたか、残りの破片が石室外に持ち出されたかのいずれかであるが、1片のみが残るというのも考えにくく、前者を考える。79～81は石室外での採集とみられる。79は口径が大きいようで、有蓋高杯の蓋かと思われる、口縁端は深い凹面をなす。80は小形の高杯であろう。器種不明小片81は胎土が緻密で、本墳の時期ではなく埴輪の年代に属する可能性がある⁽¹⁴⁾。

b 武器

鉄鉾(図37) 鉄鉾2点とそれに伴う石突2点がある。鉄鉾75の長さ25.9cm、基部の直径2.5cm、石突77の長さ12.8cm、基部の直径2.7cmである。鉄鉾は断面菱形の細長い刃をもつが、表面がかなり剥落しており錆が不明瞭になっている。また、鉄鉾の袋部と石突は錆による膨らみが顕著で、本来の形状がわかりにくい。

鉄鉾74以外の3点は目釘が遺存しており、石突76は1本、鉄鉾75と石突77は2本で、曲がって入っているものが多い。鉄鉾75では幅2.5mmの角釘を2方向から打ち込んでいる。基部下端から11mmと13mmの位置である。石突76は柄の木質がよく残り、鉄鉾74の袋部内にも見られる。出土状況でもふれたが、鉾の全長は2.5m程度で、石棺の上に置かれたと考えられる。大阪府南塚古墳や京都府物集女車塚古墳など鉄鉾の配置が判断できる例があり、それらの検討から、被葬者を邪悪から護るための武器で、石室内に立てて置かれたと考えられており、石室奥側からの出土が多い(上林2002)。本例もそうした目的で配置されたとみられるが、石室に十分な高さがないため石棺上に置かれたと考える。

c 小札甲

竪上最上段と判断できる平札、腰札、草摺裾札がまとめて出土しており、鉄革併用小札甲1両が副葬されたと判断できる。2列円頭系の小札で形成される甲である。保存状態は良く、^{おどし}緘紐や革紐も部分的に遺存する。革小札は、平札84の表面や腰札85の外面上部などに光沢のある錆面として、しばしば認められるが面積が小さく、形状を把握するには至らない。草摺裾札87の内面に残るものが最も広いが、幅2.0cm以上、長さ3.8cm以上で直角の角をもつことまでしかわからない。なお、小札には^{おどし}緘孔や^{とじ}綴孔があるが、図では肉眼観察で見える孔や孔の存在を示す錆の窪み等を示し、錆で完全に埋まって見えないものは示していない。表示がない場合、必ずしもそこに孔がないことを示すわけではない。

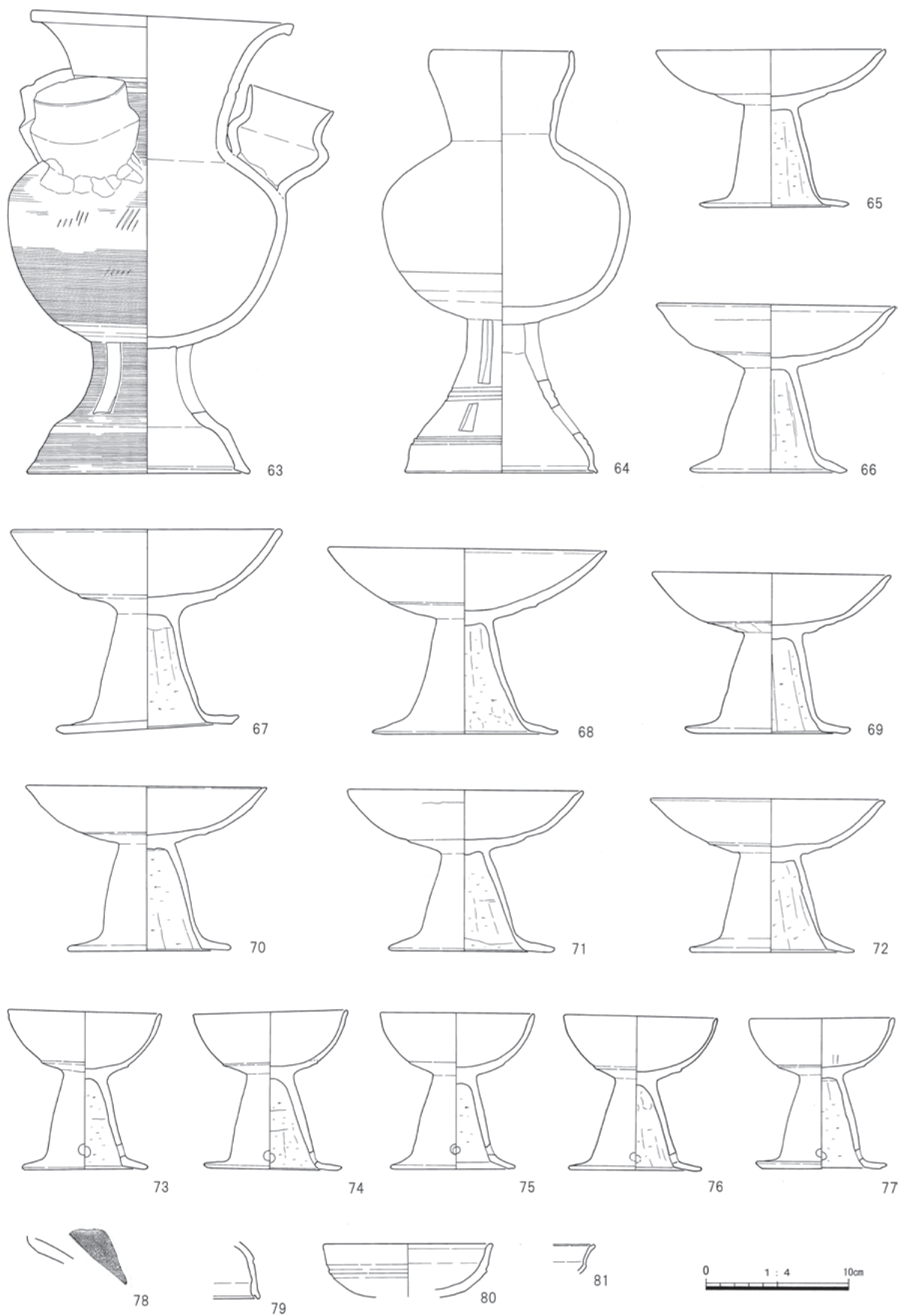


図36 須恵器・土師器（3） 1：4

石室開口時に踏まれて生じたとみられる割れは別として、古い損壊はない。

高杯 長脚の無蓋高杯7点と小形の高杯4点がある。脚の透かし孔はすべて3方向である。無蓋高杯のうち46～49は杯部を稜線で水平に区画し、櫛状工具を用いた列点文(46・47)、ヘラ描き斜線(48・49)をめぐらせる。50・51は段を設けて無文とし、52は無文、無区画である。

脚柱部上半は細く棒状で、51・52はカキメがある。これら脚注部の内面上半には絞り目があるが、観察しにくいため表示していない。脚端の形状はそれぞれ異なる。無蓋高杯48・50・51と後述のはそう58・59・61は黒色の自然釉が半ばかかり、よく似た発色である。小形の高杯のうち53では杯部内面に当具痕がある。

検出状態や破面への土や赤色顔料の付着から、無蓋高杯46は脚柱中央で折り、小形高杯54は脚端を欠損させ、56は脚を割っていることがわかる。これら以外に無蓋高杯47、小形高杯53の脚部に欠損が見られるが、新しい傷と判断した。

はそう 57や61などのように、体部が比較的大きく頸部下端が太めなものを含む。口縁端は狭く、57以外は痕跡的なものを含めて端部に面をもつ。体部下半の調整はいずれもヘラケズリであるが、それを残す58・59、ヘラケズリ上端にナデをかける57、下半にかける62、完全にナデ消す60と、仕上げは多様である。60は口縁部と頸部に櫛描波状文、水平に区画した体部に櫛状工具による列点文を入れる。

60は口縁部～頸部が割られ、破片が石室袖部に近い位置からも出土した。57は小札甲に近い位置でやはり口縁部～頸部が破碎され、その上から赤色顔料が撒かれていた。

壺 子持台付壺63は袖部に近い位置からの出土とみられる。長方形透かし孔を3方に配した脚をもち、小壺3つを肩部に付けている。頸部に2条の沈線を配し、それより下の広い範囲にカキメを施す。

脚部は割られている。また、小壺のうち2つでは口縁部端に長さ1cm以下の小さい欠損が2つつ対で見られ、意図的に傷つけられたと判断できる。

台付直口壺64はやや長い台を上下に2分し長方形の透かし孔を2段3方に配する。壺部に装飾はなく、外面下部にヘラケズリを加える。台部分が壺とはずれており、割り取られたとみてよい。

このほかに須恵器の甕(図26-2)があるが、調査以前に持ち去られて遺存しない。

土師器高杯 大型65～72と、小型73～77がある。いずれも整った形状である。大形の高杯は皿形の杯部と筒状の脚部からなり、杯部下端の脚接合部の端はごく浅い段になる。67で口径18.7cm、器高14.4cmである。外面調整は丁寧なナデである。脚部内面はヘラケズリで、縦長の面を作るように削っている。小型の高杯は椀形の杯部をもち、円形透かし孔を脚下端の2方に配する。口径、器高ともよくまとまり、76で口径10.7cm、器高10.9cmである。内外面の調整は大型と同じである。大型高杯71は脚部上端で杯部が折り取られている。袖部の土器群と馬具の間に置かれた1点は杯部が割られているようである。

後期古墳では須恵器が圧倒的に多く、土師器の出土は少ないが、八幡大塚古墳では土師器高杯の出土量が多い。大型高杯は、管見の範囲でこうもり塚古墳、箭田大塚古墳、八幡大塚古墳と同じ地域に所在する岡山市北浦旗山2号墳、倉敷市琴海1号墳、香川県喜兵衛島古墳群(1・4・6・8・15号墳)から出土している。首長間での同一器種の共有と、児島地域内の小墳への土器の伝播が考えられる。

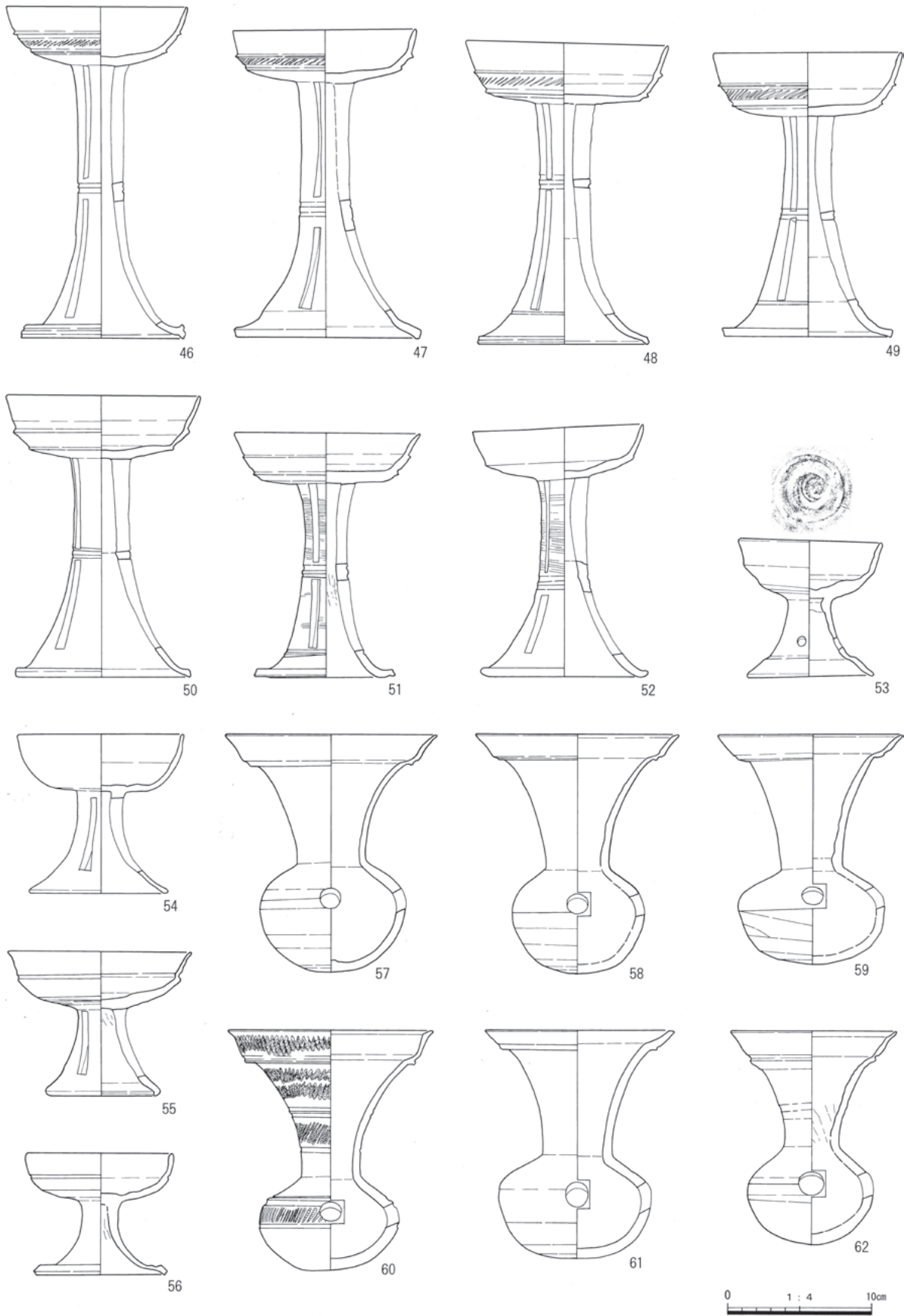


図35 須恵器・土師器（2） 1：4

靱金具（図33） 幅2.8cmの鉄製帯形金具で、とじ合わせになる後方では上端が斜めに下がり、細長い台形が向き合う形になる。平面形は半円形にちかく後方が直線的になる。横方向12.5cm、縦方向10.3cmである（釘を含めず）。

木材の表面に金具よりも少し幅が広い布をあてがい、その上から鉄板を釘で打ち付けてあり、金具の形状は下の木材の形である。内側には部分的に木質が遺存し、打ち込まれた釘の先端の錆が横に広がる状況が見られる。これが木材内面の位置を大まかに示すとすれば、木材の厚さはほぼ1cmで、左右両隅でやや厚さを増して内側の平面形は楕円形に近くなる。

金具内側の布は上下に数mmはみ出すが、この部分には縁飾りの伏組^{ふせぐみぬい}がなされる（斜線部分）。釘は頭が5～6mmの円形で、体部の太さ約1mm、全長は1.4cm程度である。これが前側と両側面には2列で、後方では1列で打たれる。平面図右外側全体に布が付着しており、布で包まれていた可能性がある。また、石棺内所在位置の北側には漆皮膜が散在しており（図24）、木製部分に漆が塗られていた可能性もある。

この資料は、胡籐^{ころう}金具と靱金具の特徴が混じった折衷形態の金具と評価されている（土屋2021）。

（6）石室内出土遺物

a 須恵器・土師器（図34～36）

杯 蓋・身17点が出土した。石室開口時の写真（図26-2）にもセットになった杯が写るが、29・30と31・32は固着した泥の輪郭で蓋と身を合わせて蓋を上にした状態であったことがわかる。33・34と35・36はセットで収蔵してあり、合わせた状態で出土したとみられる。また、35のほか40も上部に泥が付いており、伏せた状態であったことがわかる。29、31、33のほか38、39、41、44は内面に薄い汚れが付いており、蓋と身を合わせた空間が保持されたとみられる。杯身45は泥の位置で立てかけられた状態であったことがわかるが、それ以外は身と蓋を合わせて水平に置かれていたとみられる。

杯蓋は口径13.5～14.6cm、高さ4.0～4.5cmで、41が器高4.7cmと少し高い。29と38は稜がやや緩いが、それらと35・37～39は口縁端に面を作り出す。大半が丸みのある器形であるが、31は上面が平坦で器高が高く、41は上面が狭い。杯身は口径11.9～13.3cm、高さ4.1～4.5cmで、口縁部は反り返り気味に立ち上がる。42は底面が広い。

蓋の上部、身の底部には回転ヘラケズリが施されるが、半分以上の固体で頂部付近で部分的にヘラケズリがかからない箇所が見られる。これは第3石室の杯類でも見られた特徴であり、ヘラケズリの省略傾向ではなく、工人あるいは窯の癖のように思われる。ロクロ回転は右と左がほぼ半々である。42には底面に短い沈線があるが、これはヘラケズリ前に刻まれている。43は細い線2本のヘラ記号がある。このほか、杯蓋33の内面には短くごく細い線が複数入っており、乾燥段階にネズミが走った痕かと思われる。

第3石室の杯類にくらべてゆがみは少なく、焼成はよい。その一方、杯蓋39の内面には土器製作時に付着したとみられる長さ5mmの粘土小塊がある。また、杯身45の体部には製作時に小孔2つを生じ、粘土塊を詰めてふさいでいるが、1ヶ所は丁寧に埋めていないため小さな穴が残っている。液体を入れなければ問題はないが、実用の製品としては適切ではない。副葬用に製作されたことを示す可能性がある。

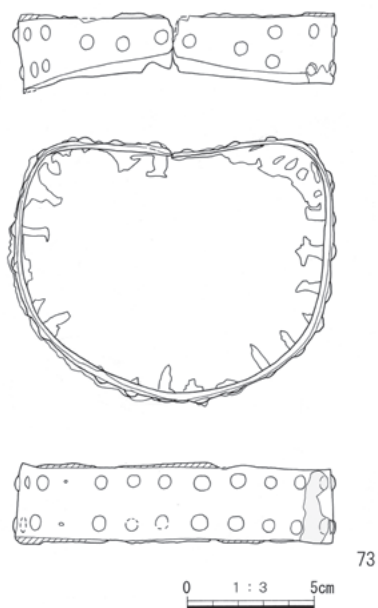


図33 靱金具 1 : 3

小片を含めた個体数、13、15、4、7本に、それらに接合する可能性がない59～65の数7本と57のうち1本を加えると47本となる。関部での集計は判断がむずかしいものがあり、鏃身部ではこの数よりも少なくなる。47本が副葬されたと考えておく。

すべて片刃式の長頸鏃である。鏃身関が角関になり小さな段をなすものが多いが、斜関になるものを含む。鏃身長さは3.0～3.9cm、鏃身幅7～8mm、鏃身と頸部をあわせた長さは11.9cm付近にまとまりを示すが、長いものは12.4cm、短いものは9.2cmである。細くなる茎先が多くは欠損しており全長がわかるものは少ない。最も長いのは52右端で端が図の下端になる個体で20.6cm、個別図示のなかでは61が茎先がわずかに折れて20.0cmである。ほぼすべての個体に矢柄先端部が遺存しており口巻きが残る。いずれも樹皮巻きで、54左から2本目の個体で長さ4.8cmにわたって見られる。口巻きを含む矢柄の太さは8～9mmである。

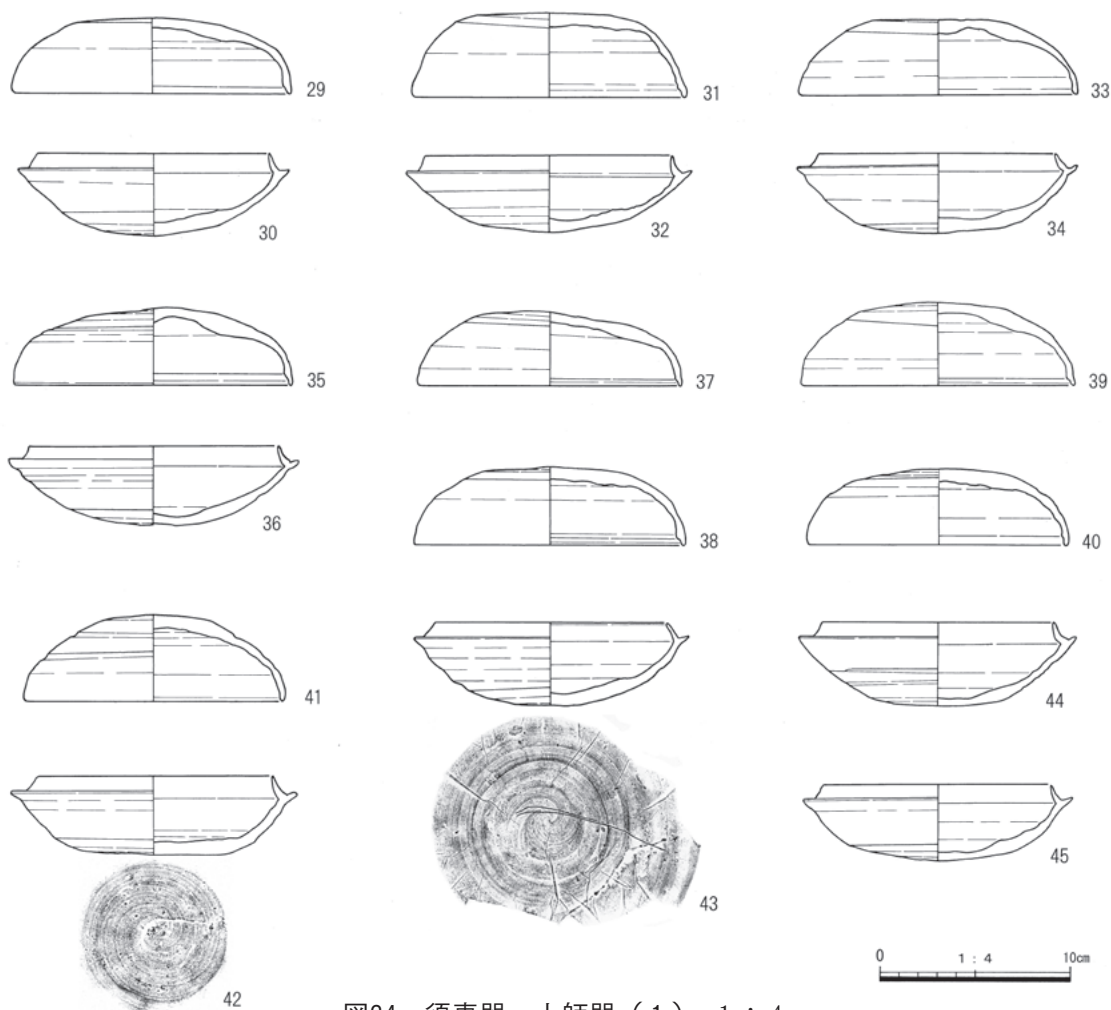


図34 須恵器・土師器(1) 1 : 4

刀身はわずかに内反りになる。棟幅は9mmかと思われる。一部が錆で不明瞭であるが、茎元には挟りがある。目釘孔は茎の先と元の2ヶ所に設けられる。刃関孔はないようである。

鞘を中心に外装がかなり残る。図上段が副葬時に上に向けられた側である。環頭が付く柄頭は鹿角製であったとみられるが、この部分は完全に失われている。柄間は木材を革で包み、その上を太さ約1mmの糸で巻く。柄縁と鞘口は鹿角製であるが、崩れていて形状等は不明である。崩れた鹿角に赤色顔料が見られる。

鞘木は切先付近では残存が良くないが、それ以外の箇所はよく遺存しており、鞘木表面が残る部分も多い。鞘口に近い部分では細かい目の布や革かと思われるものが見られるが、小片がわずかに付着という状態である。図上段の切先から40cm付近では鞘木の上に細かい布目痕が残る。それに接して、一部は部分的な残存であるが、幅5.5mmの平打組紐が少なくとも5本、方向を同じくして刀身に対して斜めの方向で遺存する。それらから約10cm切先の側では幅7mmと先ほどよりもやや幅広い組紐3本がやはり刀身に対して斜めに遺存する。ここよりも切先に近い側にも組紐が断片的に残り、特に切先から12cm付近では組紐がある程度の幅をもって並ぶが、組紐の劣化が顕著で、組紐個別の幅を識別することがむずかしい。鞘木を布で包み、その上を5本ないしそれ以上の組紐を揃えて巻き付けたとみてよい。単一の組紐群をこのように巻き付けることはできないため、組紐の帯は2つで、両者をらせん状に巻いたとみてよい。布や組紐の色は残らないが、華麗な鞘であったと思われる。

濃いグレーで示したが、切先付近には幅5mmの棒状のものが接していた痕がある。この刀にかかわるものか、あるいは近接して所在する鞆の一部が付着したのか不明である。

環頭41は基部からの高さ2.7cm、幅6.0cm半円形で、幅5mm弱の鉄棒を振り、その上に銀板を被せており、環の内側中軸にそって銀板の合わせ目が見られる。柄頭側の基部には刻み目を入れた太さ1mmの銀線を巻いている。基部には鹿角がわずかに遺存し、鹿角上面は赤彩がなされている。また、遺存範囲は小さいものの、2つの鹿角上面は完全な水平にはならず、柄頭上面はわずかに凹面をなしていたようである。

平根鏃(図31) 20点が副葬されていた。2点がずれるが、他は先端を揃えて並ぶ。鏃群の下面には皮革を反映したとみられる錆があり、それと同様の錆は鏃の先端部にも部分的に見られる。革で包まれる、あるいはそれを用いた容器に収められていたと考えられる。一まとまりであったようであるが、現在は4つに分離している。別に図化したのが、47の右に48が接着する。

有頸平根鏃で、鏃身はやや縦長の三角形である。ほぼ完存の状態にある50上側で鏃身長5.8cm、鏃身幅2.5cm、頸部長2.0cm、茎の先端をわずかに欠失して全長12.3cmである。いずれの個体も矢柄の先端部が遺存しており樹皮を用いた口巻きが残る。よく残る48の右下で、口巻きは長さ4.2cmにわたって見られる。口巻き部分の直径は細いもので8mm、多くは9mmである。錆着しているため個別の鏃の関部を十分に観察することがむずかしく、47では表示が十分ではないが、49～50のように、すべてが棘関をもつと判断できる。

長頸鏃(図32) 石棺の北西隅に先を向け、全体が扇形に広がるような形状で所在していた。錆着した大きなまとまりで取り上げられた可能性があるが、現在はいくつかのまとまりと個別の個体からなる状態である。先端が折れるなどのため個体数の把握はむずかしい。55、56、66～72などの破片は、まとまって錆着した51～54の一部であった可能性があるため、それらは含めず、51～54の

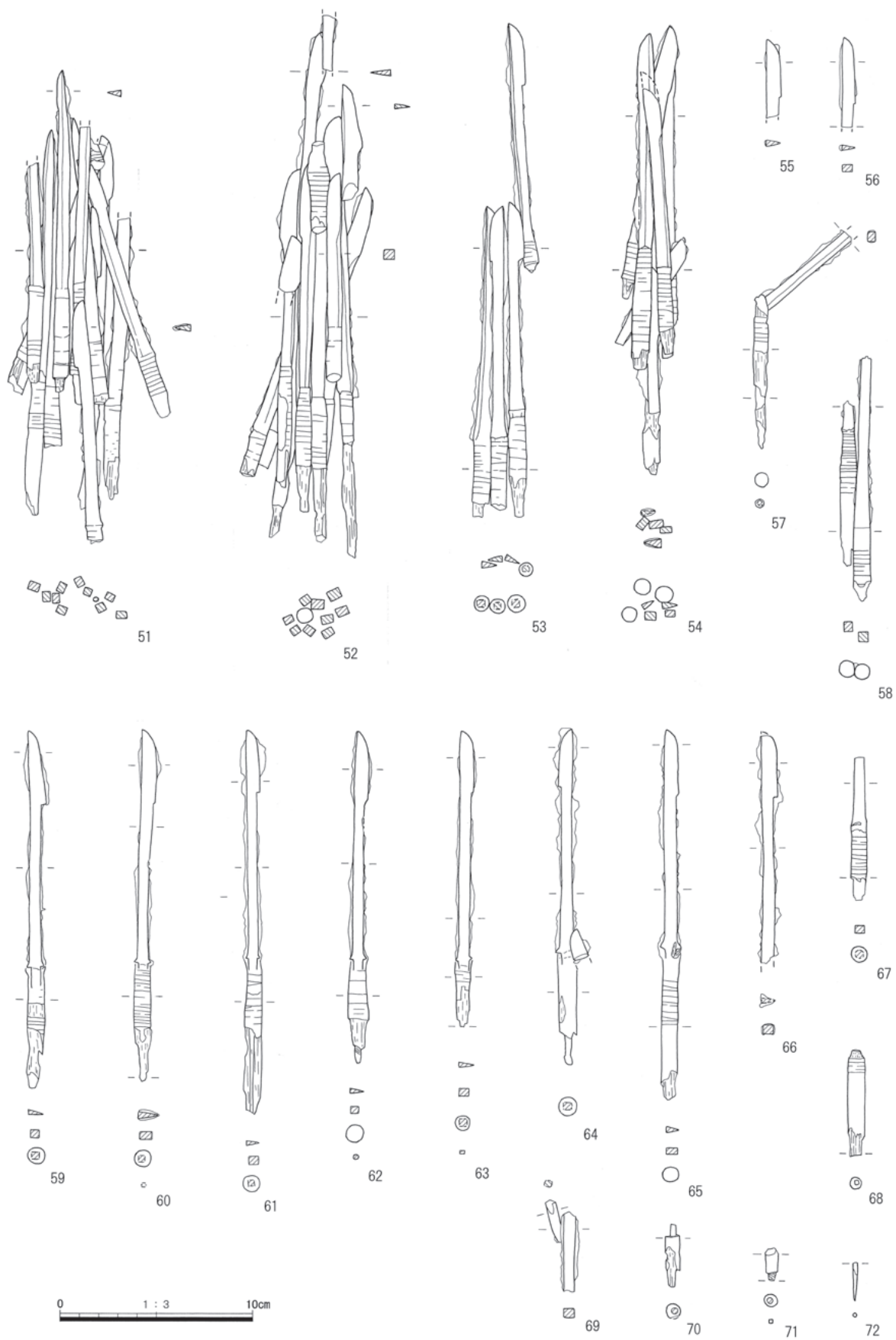


図32 長頸鍬 1 : 3

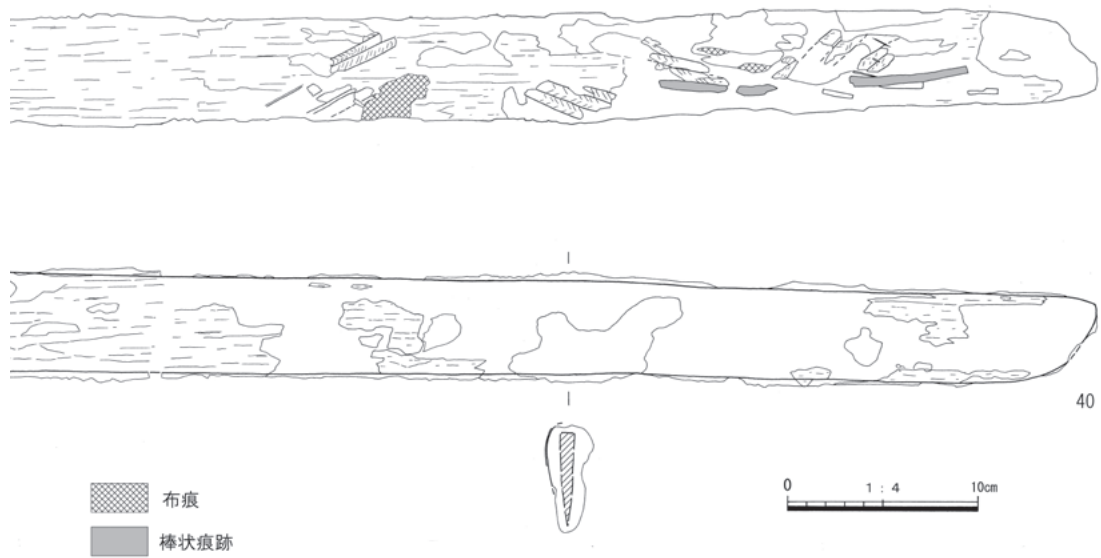


図29 振り環頭大刀 1 : 4、1 : 2

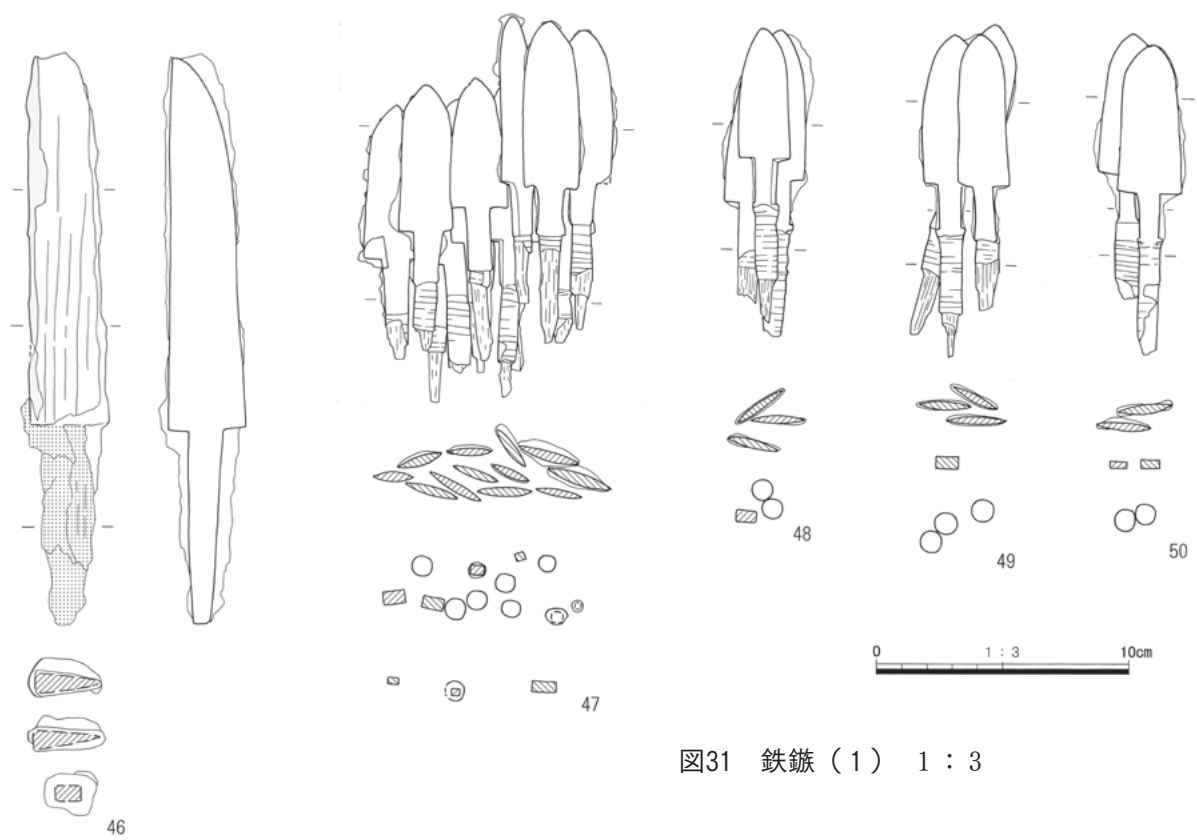


図31 鉄鏃（1） 1 : 3

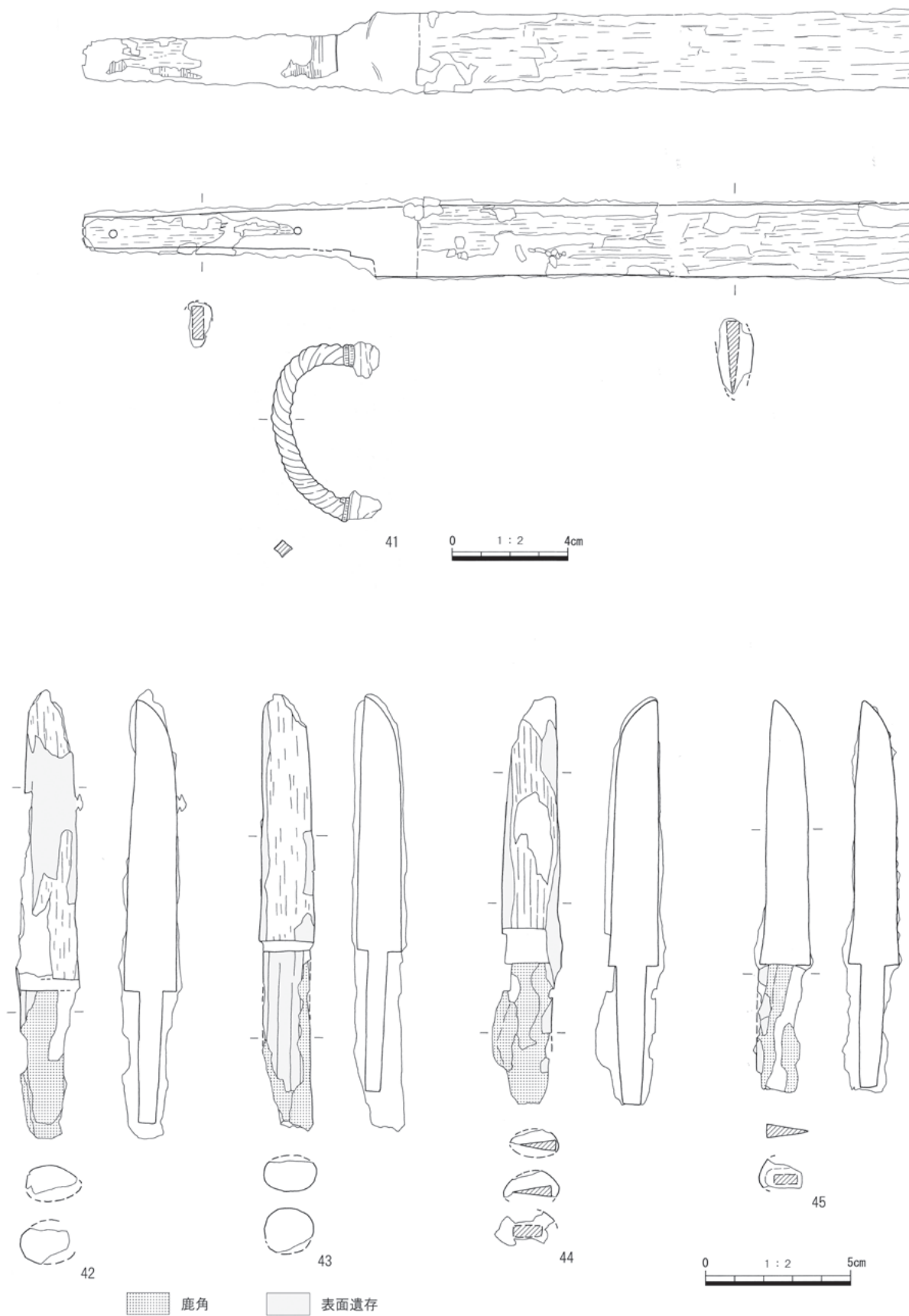


图30 刀子 1 : 2

副葬品の配置はかなり整然としている。石棺内は装身具と武器で、それに鞆が加わる。石室内では武器は石棺上の銚だけである。武具と馬具を石棺前側の左右に置き、その前側に飲食器である須恵器と土師器を配している。出土鉄器には銚3点が含まれており追葬の木棺が存在したことがわかるが、その位置は不明である。石室内の遺物がそれによって片付けられた状態は見出しにくく、基本的に遺物は石棺の被葬者の副葬品であり、配置状況をとどめるとみなしてよいと思われる。

(5) 石棺内副葬品

耳飾り(図27・写真1) 同形同大で2個1対の耳飾りである。14で全長55mm、主環の長径24mmである。主環、遊環、中間飾り、副飾りを表裏にそなえた心葉形垂れ飾りという構成で、遊環以下は金製である。中間飾りは薬研車形とも呼ばれ、偏球形3つを連ねた形である。上側の球には遊環を通す孔があり、下の球は縦断面がC字形で垂れ飾り等を入れて閉じている。

倭では唯一の西批期百済の耳飾りで、百済の官人層が着装するものとされる(高田2022)。

銀製空玉(図28) 直径14mm、高さ16mmで、やや縦長の球形である。上下両端に小孔を設ける。半球形2つを中央で接着して製作してあるが、多くの個体が上下に分離しており完存するものは2点である。銀製であるが、劣化して暗褐色～黒色を呈する。24～27などは劣化して一部が欠失しており、多数の小孔が生じているものもある。それらよりも劣化が著しい半球6個体は実測を行っていない。図示した資料と未実測分では16.5個分となるが、小片で取り上げられたものもあり、玉17個である。首元のみを飾る首飾りである。

鍍金されていたとみられるが、表面にそれが残るのは16のみである。20は内面に金がある程度残り、21、28～32、38にも部分的に金が残る。小孔は直径約1mm、半球形に成形した段階で内側から刺突で開けられている。孔縁のバリは取られておらず、縁がごくわずかに突出する。以下のように半裁されたとみられるものがあるが、外面にくらべて内面の状態が良いものもあり、劣化が進んで半球2つに分離したものがかなりあるとみられる。1～27は平面形が円形で、本来の形状である。31以下は歪みを生じており、31と32では半球の下端が内側に折り返されている。また、37のように大きく変形したものもある。副葬時に玉の緒を切るだけでなく、半数ちかくの個体は接合部ではずして縁を折ったり、つぶすなどを行ったと判断できる。28～29はわずかに歪みがあるが、意図的なものか判断しがたい。

刀子(図30) 5点が副葬されていた。いずれも柄は鹿角、鞘は木製である。鞘口と柄縁の間を42と43は3mm、44では12mmあける。一方、45は鞘の痕跡はなく抜き身であったと判断でき、46は鞘口と柄縁を合わせる。鞘・柄ともに保存状態がよく表面が残るものがある。特に43は柄の図化の関係で裏側になったが、鞘表面が全体に残る。

鹿角の柄の表面は赤色に塗られ、縦方向の削り加工の稜が等間隔にうすく残る。43では、柄表面の一部に細かい布目が残る。鞘木の表面は柄と同様に赤色に塗られる。状態の良い43では鞘の表面は木材の表面にならず薄い皮膜状のものに覆われ、42・44も図の右端で薄い皮膜状のものが鞘口をこえて柄にかかる。皮革が鞘を覆うと判断でき、43では獣毛と考えられる箇所がある。毛皮張り鞘(橋本2021)と考えられる。刀身はいずれもよく似た形状で、茎は細長い。全長に大きな差はないが、43は刀身が他よりも短く、その分、茎が長くなる。

振り環頭大刀(図29) 全長115.3cm、刀身長さ95.0cm、刀身幅5.0cmの大刀である。平造、平棟で、

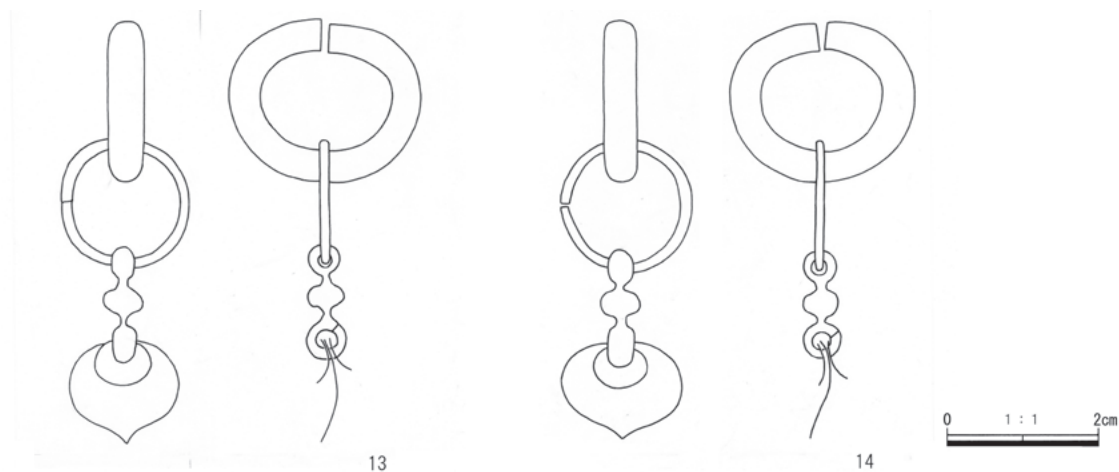


図27 耳飾り 1 : 1

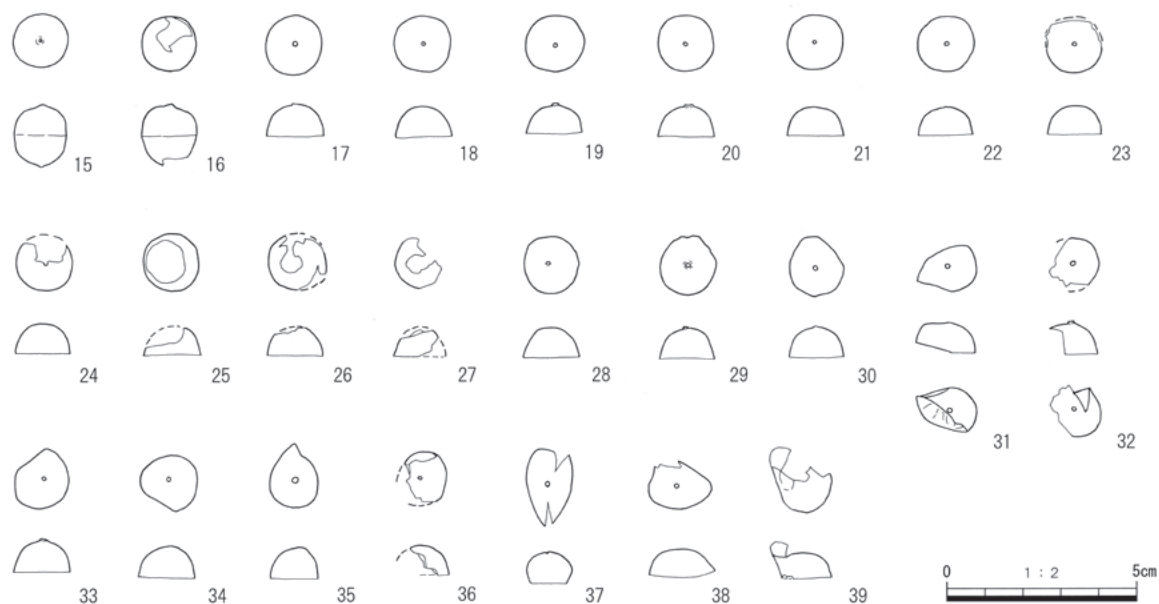


図28 空玉 1 : 2

石棺前側東半 図から鉸具97・98、鐙99がこの位置にあったことがわかり、土器類は置かれず馬具が置かれたと判断できる。それらの南側の破片は、はそう60と思われる。また、その南側にあるのは土師器高杯のようである。

袖部 須恵器高杯・はそう、土師器大型高杯が重ねて置かれる。口縁部を下に向けるものや横倒し、正位など置き方はさまざまである（図26－4）。

このように見ていくと、出土点数が多い杯蓋・身が出土状況図にないことがわかる。図26－2に石室開口直後の写真を示したが、杯、高杯、はそうなど、かなりの数の土器が原位置を離れた状態である。前述のように土器類は完全に埋没しない状態であったため、それらが取り上げられたとみられる。これらはほぼ写真の位置、袖部からその北側にかけて置かれていたと思われる。

なお、袖部の土器集積の北西側、玄室中央には須恵器甕が置かれていたが、調査時までには失われている⁽¹³⁾。このほか、羨道部分で床面よりもかなり高い位置で鉄鏃1点が出土したと記録されるが、遺物が不明である。

器は所在がわかる状態で、そのため取り出したり引き抜かれるなどがなされたようである。須恵器杯の状態については遺物記載でもふれる。

土砂の流入が比較的多かったのは玄室中央西壁に接する部分で、西側壁下段、奥から2石目と3石目の縦目地から流入している。また、袖部奥側も流入土が多かったようである。このほか、羨道にも土砂が入っているが、これの多くは石室開口時にその部分から落ち込んだものと思われる。

石棺上 玄室奥側に設置された石棺の蓋石上面の前側には、障泥金具4点（118～121）が2点ずつ対になって所在する。これらの周囲には漆膜が広がり障泥の輪郭を示している（グレー表示）。金具の向きから、馬の左右各1枚からなる障泥を、どちらも外面を上に向けて少しずつらせて置いたことがわかる。輪郭がクランク状になる東端が形状をとどめるとみられる。南縁の中央と西端は弧状にくぼむが、この2箇所は天井石から水がしたたっており、そのために痕跡が失われている。南と西は直線で終わるが、ここは石棺蓋の傾斜変換線であり、本来の端部ではない。北側は輪郭が残らない⁽¹¹⁾。

石棺奥側 石棺と奥壁の間には鉄鉾2点（74・75）が所在する。先端の向きは1点が南東、もう1点が南西である。石棺の南東隅近くから出土した鉄器が鉾の石突76・77のいずれかと思われる。鉾は柄の長さが2.5m程度あり、石棺蓋上に置かれたとみられる。

石棺前側西半 西壁に近い位置に小札甲が置かれる。後述のように鉄革併用小札甲で、^{たてあげ} 竪上最上段の平札と腰札、^{こざねよろい} 草摺裾札が残る。平面図では小札が接続した円弧が複数という形になるが、それらの最も内側で楕円形をなすのが腰札85で、背面側を石室西側壁に向けて置かれる。腰札の内側に入っていた小札は早い段階で取り上げられており、その際のメモにある形状を示したが、78や79などの平札ではないかと思われる。腰札85の東外側に、これから切り離された腰札86が添えて置かれる。それらの外側に草摺裾札がある。最も大きいまとまりは腰札を南側からU字形にとりまく87で、草摺の着装時右側部分である。石棺の前側、石室床面直上に貝があるが、これの上に3～5cmの厚さの土を挟んで草摺裾札89の左端があったことがわかった⁽¹²⁾。これと一連の90もこの位置になる。また、その南西にも草摺裾札の小さいまとまりがある。一方、腰札85の北側にまっすぐに伸びるまとまりが図示されるが、長さから草摺裾札92の左半と考えられる。図25遺物出土状況平面図の作成以前に高い位置にあった破片が取り上げられたとみられることもあって、草摺裾札の左側部分の破片の位置関係は一部が明確でないが、草摺裾札87に近い部位である89・90が少し離れて位置しており、草摺裾札の左側は破片の位置関係が乱れていたとみられる。それらは石室床面よりも高いので、土砂の流入によって移動したと考えておく。

小札甲の南側は土砂流入箇所の前側であり、石室開口時には土器が埋まっていたと動かされていないとみられる。この部分には土師器高杯を中心に土器が置かれる。土師器高杯は杯部が大きいものと椀形の2者があり、前者を大型、後者を小型とするが、小札甲に近い箇所では土師器小型高杯がまとめて置かれ（図26-3）、その横に須恵器高杯54とはそう57が置かれる。54は脚先端が、57は頸部以上が割られており、ともに赤色顔料が付着する。破面にも付着しており、2つの須恵器を割った後に赤色顔料を塗布している。

それらの南、入り口側には土師器大型高杯がまとめて置かれる。66と68は杯を伏せて、67と脚部が折り取られた71の杯部は上向きである。また、ここでは須恵器高杯46を脚部中ほどで折り、脚部は正位、杯部は伏せて距離をとって置いてある。



1 石棺前側（南から）



2 玄室袖部付近（石室開口時）（南から）



3 玄室中央西側（南東から）



4 袖部（北から）



5 小札甲（南東から）

図26 石室内遺物出土状況

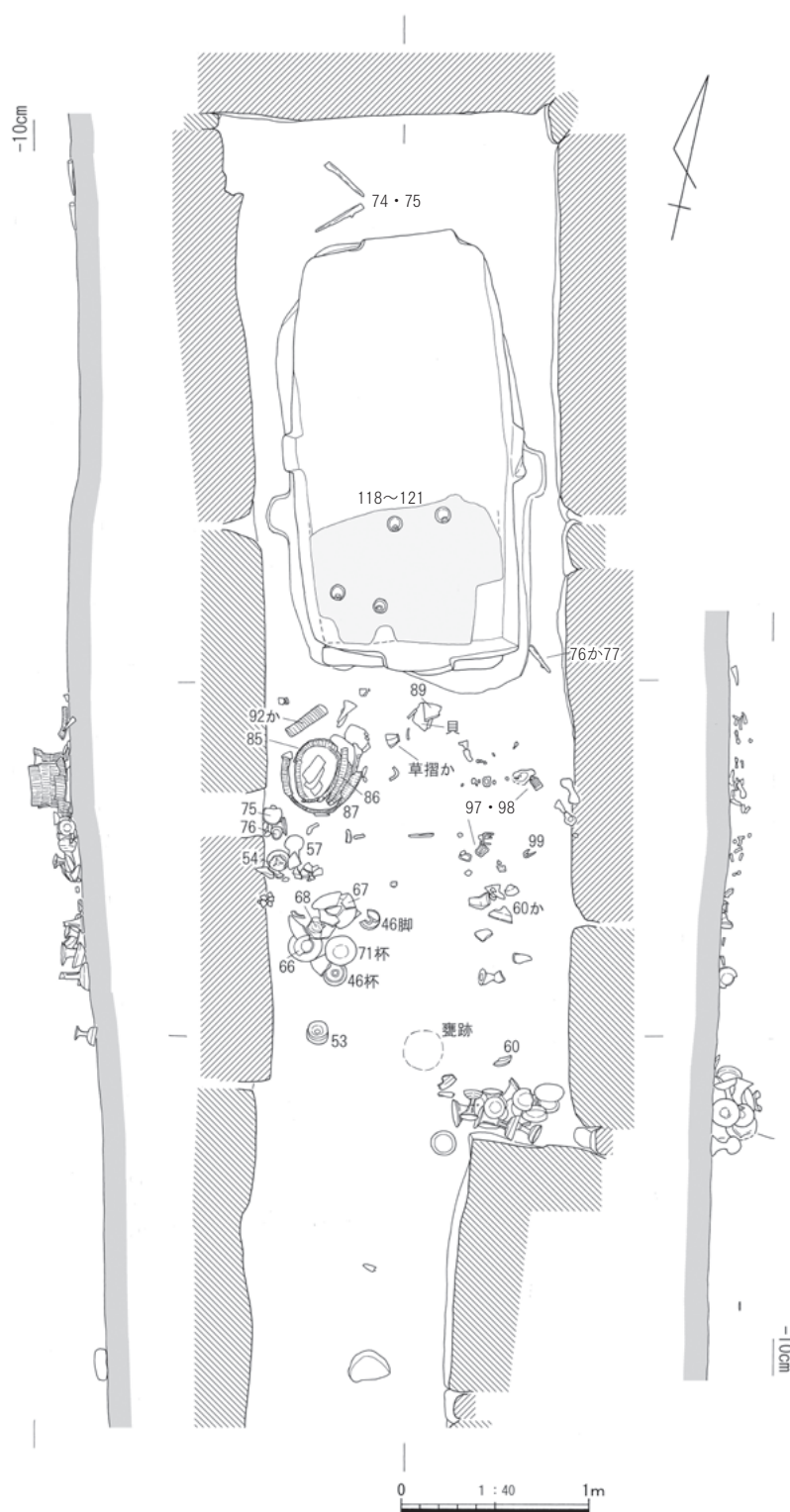


図25 前方部石室遺物出土状況
1 : 40

に接する位置に轡金具^{ゆき}73がある。棺の北端には2組の鉄鏃が置かれる。東側板に近い位置に平根鏃47~50のまとまりがあり、2本をのぞいて先端位置と鏃の方向はよくまとまる。長頸鏃51~72は西の2本をのぞいて方向はおおむね同じながら、やや広がって重なった状態である。立てかけて置かれた矢が崩れ落ちたかの印象を受ける。鉄鏃と轡金具の間には漆膜が散在する。棺の中軸にそって被葬者の骨片が散在する。また、棺の南側、被葬者頭部付近では赤色顔料の広がりがあるが、別に赤色顔料の小塊が点在しており、これが水で広がった可能性がある。

b 石室 (図25・26)

遺物の取り上げ図がないことと、石室開口時に土器の一部が動かされたなどのため、遺物の出土状況はやや詳細を欠く。

石室にはある程度土砂が流入していた。場所によって量に差はあるが、それほど多い量ではなく、石棺の底石を埋めるほどの厚さはない。出土した須恵器には、泥が固着したものがある程度の量含まれる。固着は土器の上半に限られ、泥の範囲は明瞭であることが多い。石室内で土器が露出していた部分に細か

い泥が付着して固まり、容易に落とせない状態になり、土中に埋没した部分は取り上げ後に土が洗い落とせる状態であったとみてよい。石室内は一時期滞水し、それが作用したと考えられる。泥の固着範囲から、たとえば須恵器子持壺63は斜めの状態で土器上半が露出し、須恵器杯29・30は蓋と身を合わせた状態で杯身の受け部までが石室内に出ていたことがわかる。石室開口時にかなりの土

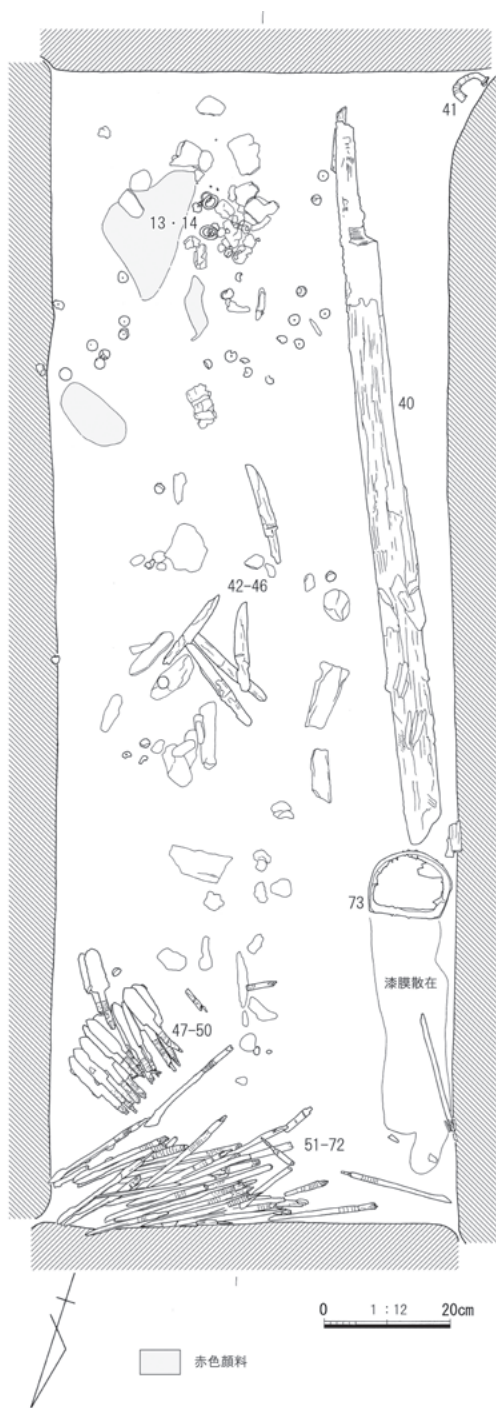


図24 石棺内遺物出土状況
1 : 12

それに対応する柄とする。

両側面に1つずつ縄掛突起が作り出される底板は、蓋石と同様に棺身よりもかなり幅広である。縄掛突起の両側には側縁が直線に作り出されるが、両小口は形が整えられておらず原石の平面形を残している。平面形が楕円形の石材を用い、縄掛突起付近のみを加工している。上面には小口板と側板を据える溝状の刳込みを設ける。

厚めの石材を加工して各部材を作り出すのではなく、目的にほぼ合う大きさと厚さの石材を用い、最小限度の加工で製作したため、蓋石や小口板・側板には加工が十分に及ばない箇所や窪みが残し、蓋石や底石は幅が広くなり、逆に身部の隅部分では底石の幅に余裕がないといったことが生じたとみてよい。そうしたなかでも南小口の縄掛突起の加工は他に比べて丁寧で、南小口板は石材の窪みも目立たない。南側、つまり石室入り口側からの見栄えを考えて石棺は作ってある。

外面の赤色顔料はベンガラとみられる。刳込み部分などにも塗られており、石棺の組み立て前に塗られたことがわかる。西側板内面の北小口に近い位置には短い縦線が赤色顔料で記されており、図示できないが、東側板では+が記される。石棺組み立ての目印と考えられる。

組合式であるので、石室構築後に搬入し組み立てることができるように見えるが、作業する空間がほとんどないため、部材の重量を考えるとそれはほぼ不可能であろう。

(4) 遺物の出土状況

a 石棺 (図24・写真5)

石棺内南端に近い位置から耳飾り1対(13・14)が出土した。埋葬の頭位は南、石室入り口側である。その北側には^{うつろだま}空玉15～39が散在する。被葬者の推定頸部付近、東西50cmほどの範囲にまとまりを見せるが、棺内北端の鉄鏃に近い場所に位置するものもあるなど所在する範囲は広い。玉の緒を切って広く撒いた可能性もあるが、空玉はきわめて軽いため、水によって動くことを考慮する必要がある。被葬者胴部付近には鹿角装刀子5点(42～46)が置かれる。向きはかなりばらつくが、切先はいずれも南に向く。西側には振り環頭大刀40が切先を足側、刃を外に向けて置かれる。環頭41は石棺の南西隅に動いている。この大刀の切先

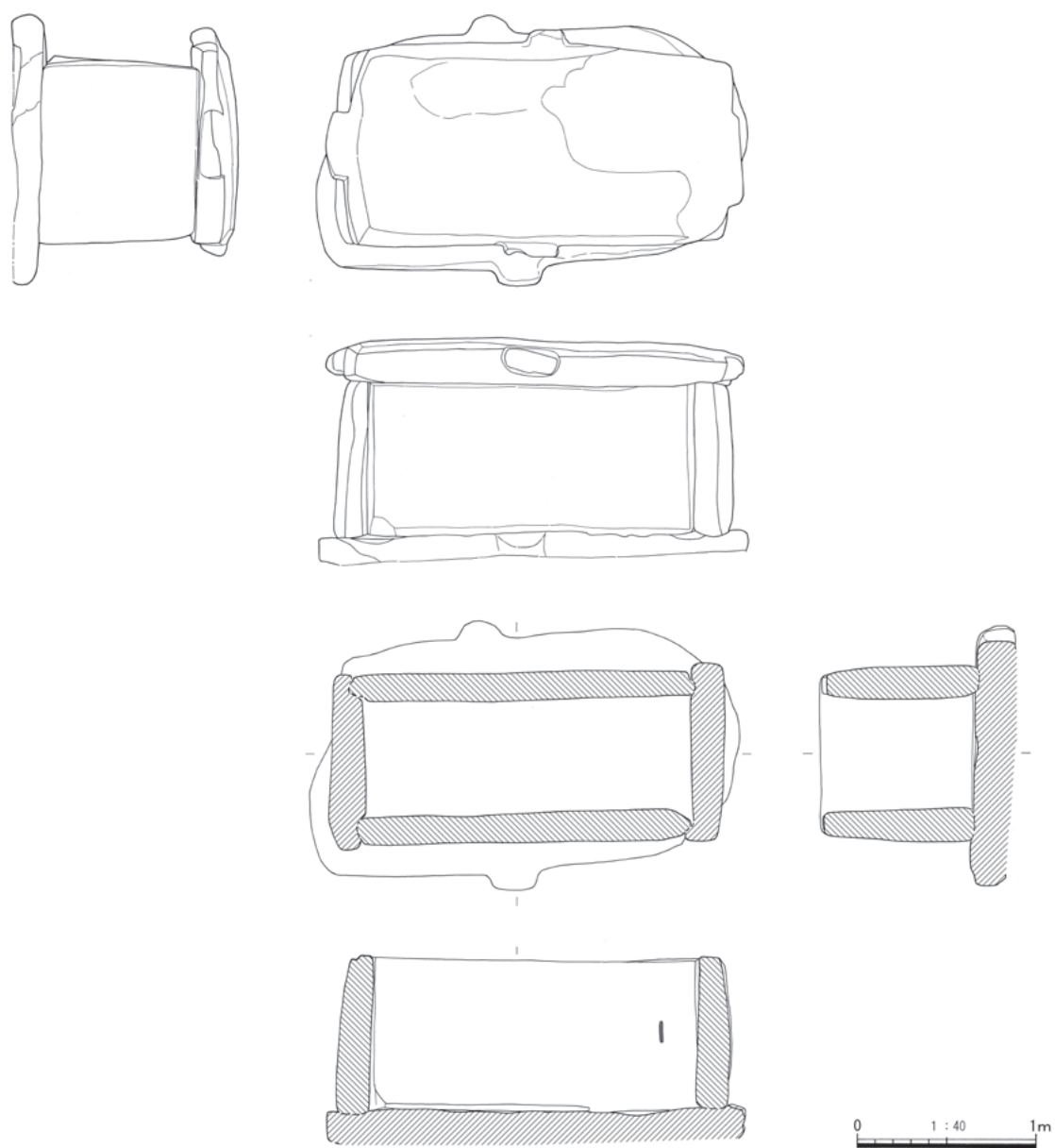


図23 石棺 1 : 40

蓋石は扁平な板状で、長さは棺身のそれにほぼ等しいが、横幅は棺身の幅よりもかなり広い。小口と側面に縄掛突起が作り出される。南（平面図左側、入り口側）小口の縄掛突起は幅37cmで丁寧に加工されているが、北（奥壁側）小口の縄掛突起は幅53cmと、きわめて幅広になる一方、突出はわずかで、突起を形成した荒割りの跡が残る。上面は、中央から南側は敲打加工されて端に斜めに下降する斜面が作り出されるのに対し、北西側は石材が薄くなるため未加工の自然面を残す。下面には小口板と側板を受ける刳込みが設けられる。また、下面は部分的に窪むが全体にわたるものではなく、天井部は基本的に平坦と言えるようである。

小口板と側板は、それぞれ方形と長方形に加工される。これらの外面では、他の部分と同様に敲打痕が見られるものの平らにならず面が浅く窪む箇所がある。原石の窪みが残った部分であり、南小口板と東側板には少ないが、西側板と北小口板では広い範囲を占める。小口板のうち南小口板上端は幅を狭めて枅を作り出す。小口板の内面両端には側板を合わせる刳込みがあり、側板の小口は



1 排水溝奥側（南から）



2 排水溝蓋石（石室前端(北)上から）



3 排水溝側石（石室前端上から）

図22 排水溝

との隙間は6 cm程度しかなく、玄室幅いっぱいである。図23は小口板・側板に蓋石下面の割り込みを合わせた状態であるが、検出状況（図25）の蓋石は、奥側に約5 cm、蓋石南側が東に約5 cmずれて設置されたようである。組合式に限らず家形石棺蓋石蓋側面の縄掛突起は通常は複数であるが、本例は1つずつで側面に設けられる。また、蓋石・底石ともに身部に対して幅が広く、底石にも縄掛突起を設けるなど、特異な点が多い。

底石と蓋石、2枚の小口石、同じく2枚の側石で石棺は構成され、小口板が側板をはさむ。棺身の長さ223cm、南側小口板の幅99cm、蓋石下面と底石上面の間隔が84cmである。底石の厚さが推定になるが、全体の高さは127cmである。石棺底面は南側がわずかに高くなる。

図21 墓道と閉塞施設
(南から)



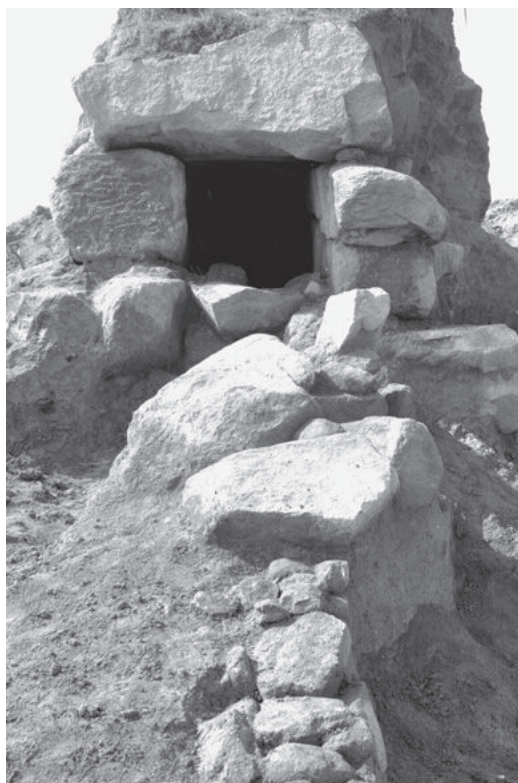
1 石室入り口と墓道（3次調査直前）



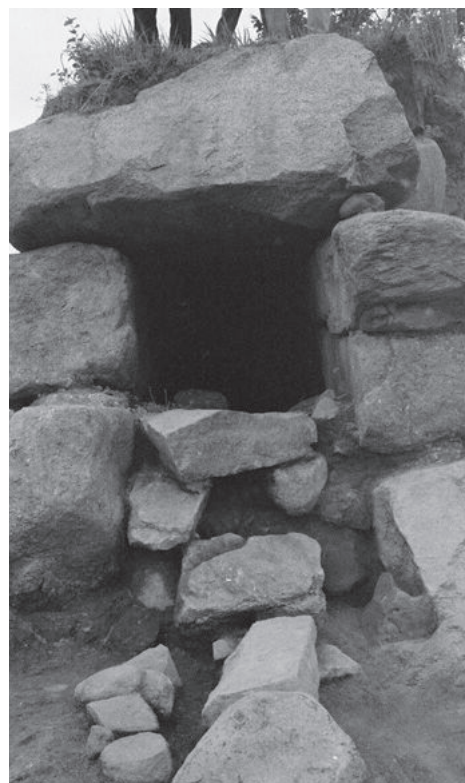
2 墓道の閉塞施設

3 閉塞施設下部

4 排水溝上の石組み



3



4

（２）墓道と排水溝

墓道と閉塞施設 羨道の前には、長さ5.7m、幅1.4～1.65mの墓道が設けられており、ここに羨道入り口部分から続く閉塞施設が構築される。墓道の肩は羨道先端の上端近くまであったようで、羨道の壁面が墓道の壁面に接続するとみられる。

石室を閉塞するのは羨道先端付近に長さ約3.3mにわたって設けられた石積みで（図17・21－2）、羨道天井石に達する。この石積みから少し間をあけた墓道中央にも長さ約2.1mにわたって石積み配される。高さは約60cmと奥側のものより低く、斜面の勾配は緩い。石積みの表面に見られる石材は長さ30cm前後、幅20cm前後のものが多く、奥側の石積みでは長さ80cm以上、幅40cmの大形の石材が石積みの前側と最も高くなる中央部に見られる。前側の大形石材は後述の排水施設の上を被覆するように置かれる大形石材（図21－3）の一部で、これの上に礫を積み、その上に大形の石材を配して石室を閉じたようである。石室内側の斜面は8段程度の石組みで、下半は石を横置きで組んでおり、上半は縦置きをまじえて重ねている（写真4）。石積みの入り口側斜面は石室側のよう

に石を組んだ状態ではなく、土をまじえて石を積んだようである。

2つの石積みの間は谷状になるが、ここを含めて墓道内は灰色を基調とする土で埋められる。埋土のサンプルは明褐灰色のシルトで粗砂を多く含む。水分を多く含んで一気に埋められた土は分層しにくいようであるが、断面図の少し違和感がある分層はそれを示すのかもしれない。閉塞施設の石組みが前後2箇所になる例として京都府物集女車塚古墳があるが、その構造とは異なる。

小墳では羨道の前に小径状の墓道が設けられるものがあるが、こうした規模の大きな墓道はこうもり塚古墳や広島県二子塚古墳など大形の前方後円墳に限られる。

排水溝 羨道入り口付近床面から墓道底面を直線でのびる排水溝がある⁽⁸⁾。検出全長5.9mであるが、先端を欠失しており、本来はもう少し長い。側石と蓋石で構築される暗渠で、幅約10cm、深さ約15cmの空間を形成する。蓋石は大きいもので長さ40cm、厚さ10cm、側石には長さが30cm程度で厚さは同じく10cmほどのものを用いる。排水溝北端（始点）の奥側、閉塞施設の石室側斜面下端中央では3石が並び、その上に平石が配される。この部分も排水施設の一部であって、石積みの下で水を通し排水溝で出すという構造になるのではないと思われる。また、排水溝の始点部分では、小さい蓋石の上に大きめの石を重ねて二重の蓋石とする。さらに、石積み高くする過程で長さ75cmの厚い平石が蓋になる箱形の構造を設ける（図21－4）。上側のものは暗渠というよりも、石積み内に空間を作って水を集め、下の排水溝に落とすために設けられたとみられる。

排水溝始点部分で排水溝にそって西側に配された石には赤色顔料の塗布が認められ⁽⁹⁾、排水溝北端の石材の北20cmの羨道床面にも赤色顔料が見られた。

岡山県下では横穴式石室の排水溝はTK43型式期に出現するが、その例は少ない。また、排水溝を設ける場合でも素掘りの溝であったり、それに蓋石を配する程度（赤磐市婦本路2号墳、倉敷市赤井西4号墳など）であり、本例のように石組暗渠とするのは倉敷市赤井南3号墳や総社市八紘1号墳などがあるにすぎない。本例はこの地域で最も整った排水溝である。

（３）石棺

玄室の奥側に石室主軸と平行に石棺が設置される。竜山石製の組合式家形石棺⁽¹⁰⁾（図23）で、外面全体に赤色顔料が塗布される。底石の長さが242cm、縄掛突起を含めた幅は151cmで東西の側壁



1 西壁



2 東壁



3 奥壁

図20 前方部石室石組み

井石先端から羨道先端までそれほどの余地はないため、動かされたのは閉塞上部の石材ではないかと思われる。石室の石組み（図19⁽⁷⁾・20）は、下段にはおもに塊状の石を用い、その広口を壁面に用いる。石を縦置きにする場合も多い。上段には横長の石の側面や小口を用いることが多く、そのため石室外側では突出する石材がしばしば見られる。

図17 墓道埋土注記

- | | | | | |
|----------|----------|-----------|---------|-----------|
| 1 灰黄色混合土 | 6 灰黄色混合土 | 11 灰褐色土 | 16 褐色土 | 21 灰色土 |
| 2 黄褐色土 | 7 灰褐色土 | 12 黄褐色土 | 17 灰色土 | 22 灰褐色混合土 |
| 3 灰黄色混合土 | 8 黄褐色土 | 13 灰色土 | 18 灰黄色土 | |
| 4 赤色土 | 9 赤色土 | 14 灰褐色混合土 | 19 赤色土 | |
| 5 黄褐色土 | 10 褐色土 | 15 灰色土 | 20 灰色土 | |

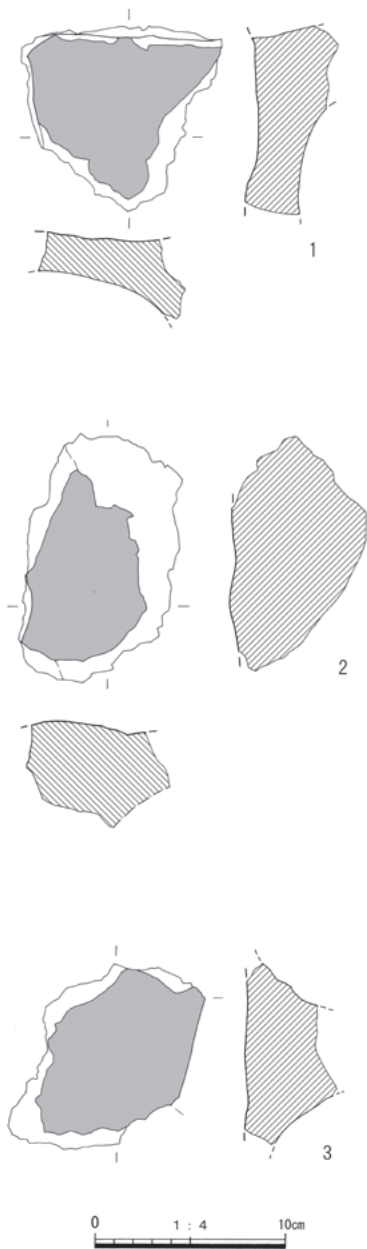


図18 前方部石室
目張り土 1 : 4

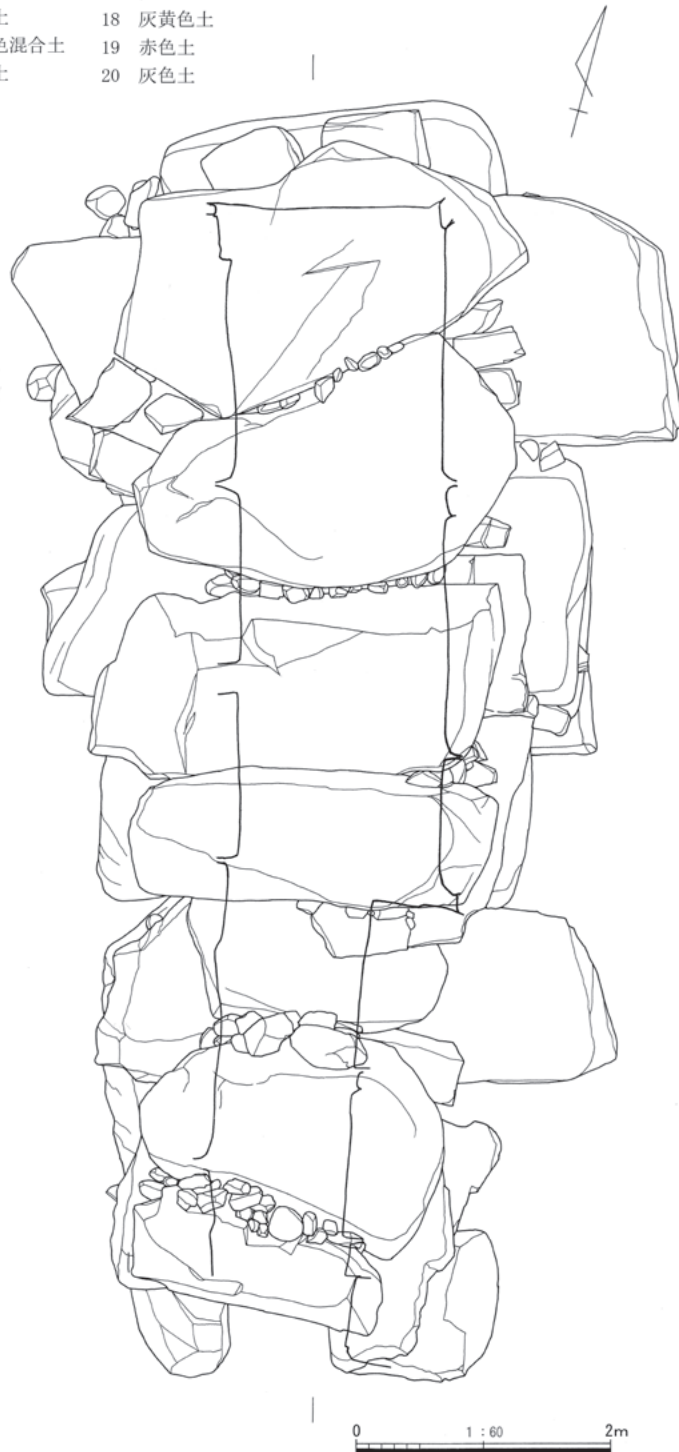


図19 前方部石室石組み 1 : 60

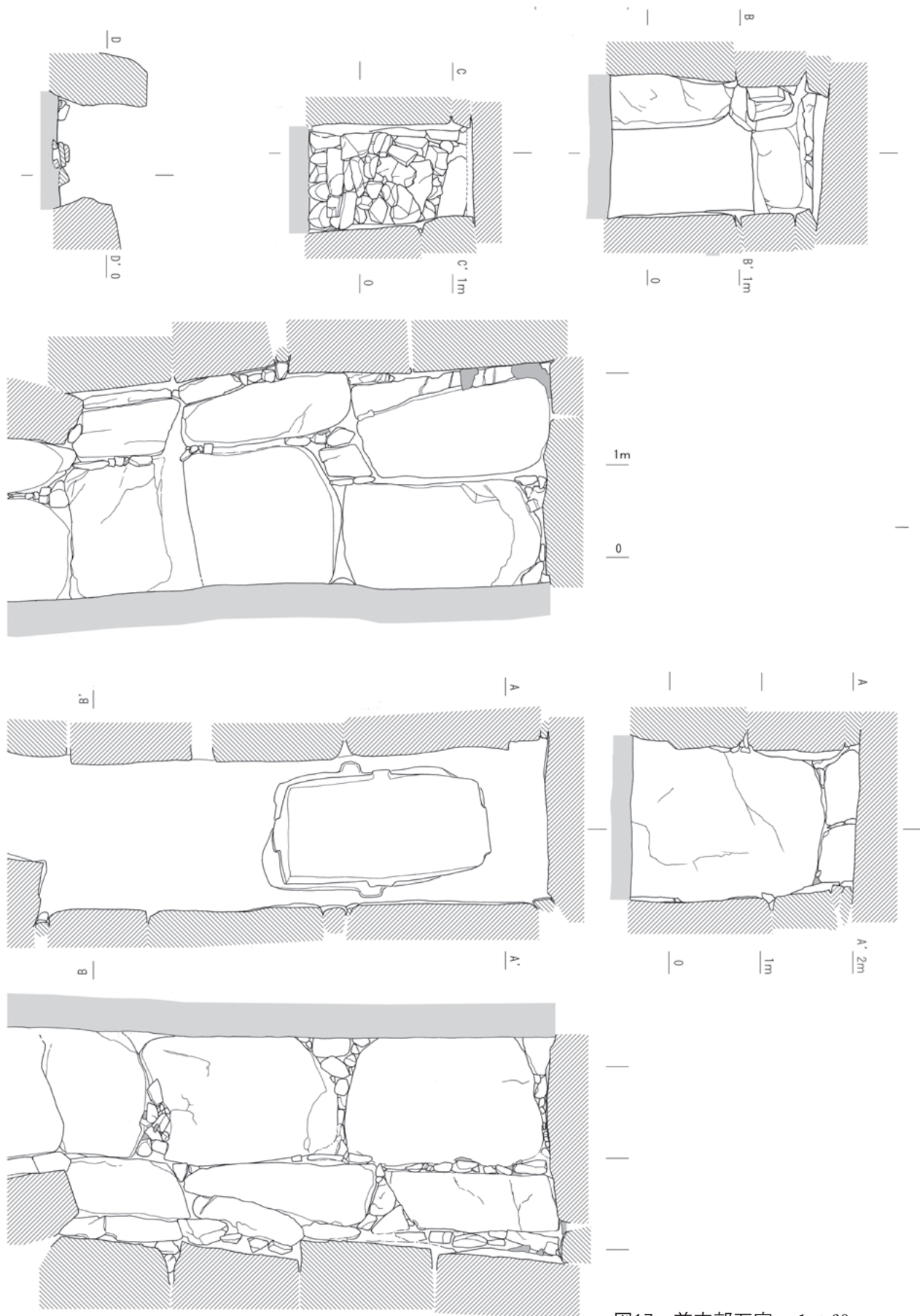
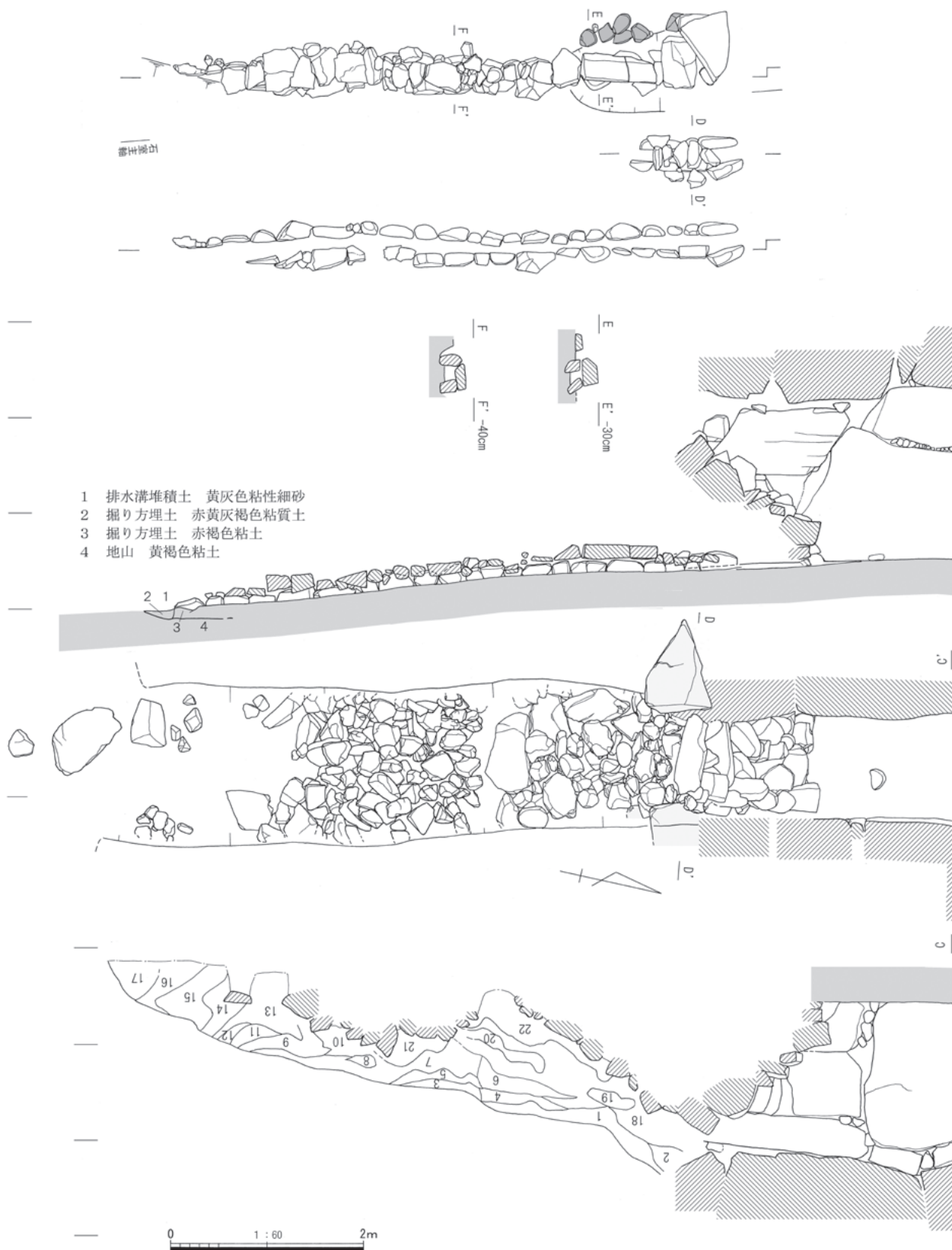


图17 前方部石室 1 : 60



された製品か、形態の伝播かを改めて考えていく必要があるだろう。銚⁽⁶⁾ は大きさに差があり、5、7～9、10に区分できる。5～9は断面が長方形であるが、10はほぼ方形である。

7 前方部石室

(1) 石室の構造

規模・形状 南に開口する全長9.4mの右片袖式の横穴式石室である(図17)。玄室は奥壁幅1.73m、長さは東側壁で5.6mと狭長である。玄室は東壁が直線をなし、西壁は奥から2石目と3石目がそれに平行する。西壁の奥から1石目は若干斜めに据えられ玄室の北西隅はやや鋭角になる。玄室の幅は、中央付近の1.6mが基本となる。玄室の高さは奥壁で2.45mで、4つの天井石の下面は前側にむかって少し下降する。羨道の長さは玄室側に少し入り込む袖石の先端から3.8mで、軸線は玄室の軸線に対して斜めになる。羨道幅は玄門が1.1m、入り口までの間も石の形状で変動はあるがほぼ同じ幅である。高さは1.55m、天井石は3つである。

壁面 奥壁は1石に近い形状で下段が大きく、上部に2石を配置する。奥壁下段に使用された石材は厚い板状の石材である(図20-3)。縦に用いれば奥壁を1石にすることができたのではないかと思われるが横向きに使っており、総社市こうもり塚古墳や奈良県五条野丸山古墳の奥壁に倣って奥壁上部を別石材にした可能性がある。

東側壁は、玄室から羨道奥側まで下段に高さが揃った大石4つを配しており、床面から1.4m付近に横目地が通る。上段は、玄室奥側では1石を配し、それと天井石との間は薄い石材で埋めており、玄室前側では2段目石材の高さの不足を補う石を配して3段にする。玄室奥側の石で長さ2.15m、高さ1.4mの大きさである。羨道奥側は2段、前側は3段積みで3段目には扁平で長い石材を用いる。壁面を構成する石材が丸みをもったり、平面形が台形であるなどのため三角形の隙間を生じるが、その部分は長さ15～30cmの石で間詰する。

西側壁は玄室、羨道ともに基本的に2段積みで、一部で上に薄い石が加わって3段になる。石の大きさが揃わないため、目地は水平にはならず上下する。また、玄室奥から2石目と3石目には縦目地が通り隙間が大きい、3石目の形状がよくないため、この箇所には外側で間詰を行ってある(図20-1)。

羨道先端部分は閉塞施設があるため壁面の図が作成されておらず、ややわかりにくい。西壁先端は2段積みであるが、図17平面図にあるのは上段、図19はそれを除去した下段石材である。また、羨道東壁先端は図17平面図では部分的に現れる。前側が2段目、奥側が3段目のようである。

羨道を含めた石室壁面と天井石には赤色顔料が塗られる。顔料があるのは壁を構成する面で、濃い赤色である。遺存する箇所は少ないが、奥壁と側壁の目地には目張り土があり、その表面にも赤色顔料が塗られる(図17 濃いグレー)。石室の完成時には間詰石が見えない平らな壁からなり、赤い箱の中といった状況であったと思われる。

図18に目張り土のサンプルを示した。表面にはベンガラとみられる赤色顔料がよく残り、土の表面を整えたハケメ状の擦痕が見られる。いずれも裏側には間詰め石の形状が残る。また、1の上辺と3の右辺は壁面の石材に接していた部分である。これらから、目張り土は厚い部分で10cm程度の厚みがあったことがわかる。5mm以下の花崗岩小礫を含む明赤褐色粘質土である。

天井石は7石である。工事によって先端の天井石が除去されて開口したとされるが、遺存する天

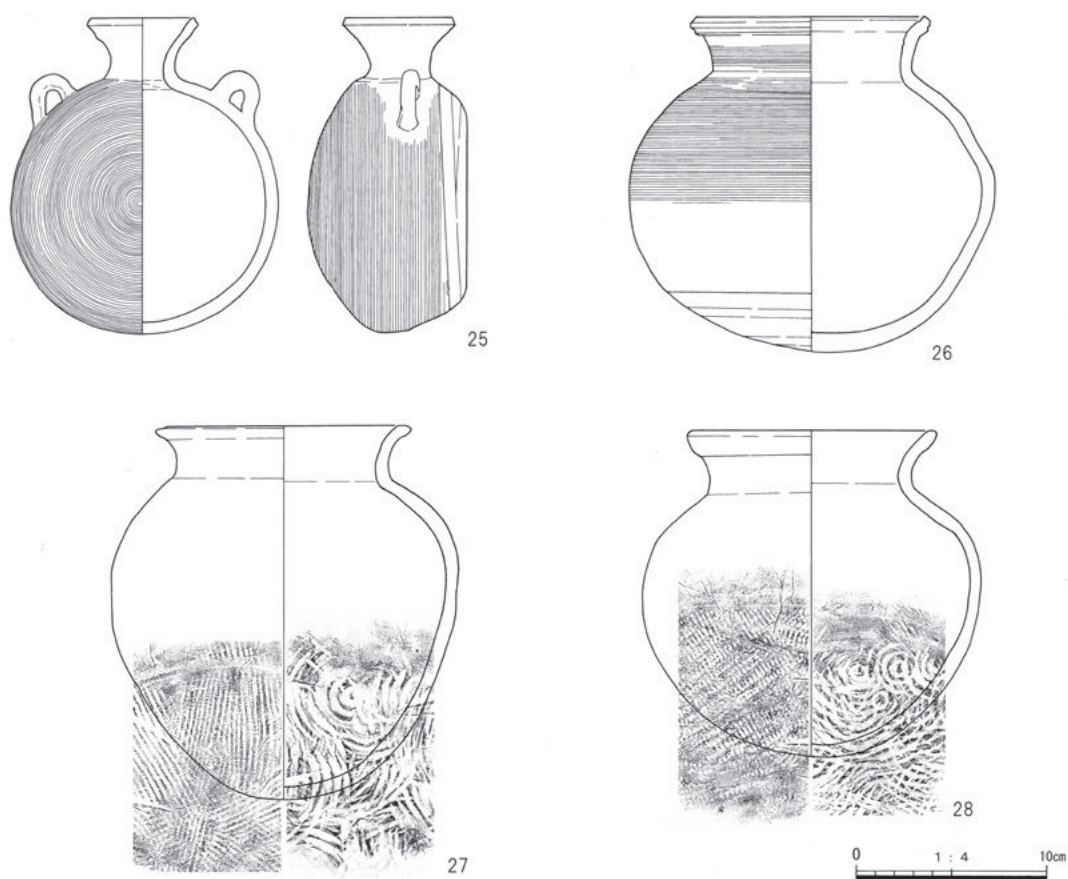


図15 第3石室出土遺物（2） 1：4

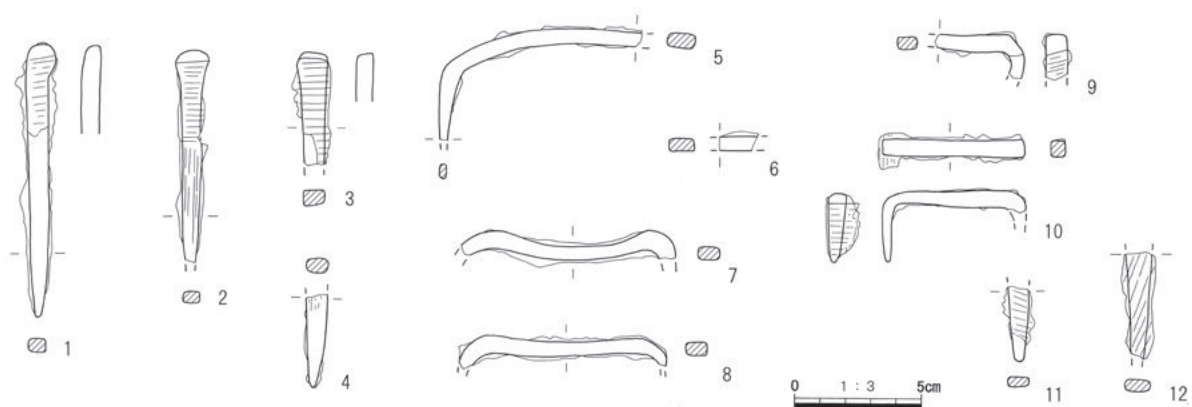


図16 第3石室出土遺物（3） 1：3

26は方形気味に肥厚させた口縁部に沈線を入れ、頸部から体部上半にかけて細かいカキメを施す。甕27と壺28は胴部下半の内外面がタタキである。甕27は水平に張り出す口縁部をもつが、端部に小さな欠損が多く見られる。壺26も口縁の一部が欠損する。

木棺に用いられた釘4点（1～4）と鋤4点以上（5～12）が出土している。釘2の上側木質幅が示す棺材の厚さは3.2cmである。釘1・2の頭部は側面形が円形で、X類（金田1996）である。畿内系の釘と評価されており、赤磐市八塚1号墳や倉敷市茂浦3号墳など備前南部を中心に点的に分布することが知られている（金田1999）。ここで1例を加えることになったが、畿内から搬入

段の石組みになる。奥壁には横目地が見られるが、側壁には見られない。天井石は長さ1.3m、幅50～80cm、厚さ35～55cmと比較的小形である。袖をなすのは幅30cm、高さ80cmの角錐台状の石で、羨道壁面から突出気味に配される（図11）。なお、この図は奥壁付近の作図が未完である。

玄室の奥側には高さ20～28cmの石4個が長さ2.1m、幅90cmの長方形をなして配され、その間に小さい石材が点在する。石の高さがややばらつき、大きめの石であるが、配置から棺台とみられる⁽³⁾。この4石の南側から玄門にむかって厚さ10cm程度の石が列状に並ぶ。長さ1.7mとみることもでき、追葬棺の棺台と思われる。この石から続く形で玄門部に石が集中しており、これは調査時に閉塞施設と判断された。

遺物の出土状況（図12、図13-2・3） 玄室内から須恵器と^{かすがい}鏝を中心とする鉄器が出土した。須恵器は杯蓋・身24、提瓶1、壺2、小形の甕1点からなる。いずれも破損はなく、配置に乱れもないことから、石室床面は攪乱を受けていないと判断できる。

玄室前側で提瓶25、西側壁に接して甕27が、それらの奥、玄室中ほどで杯2点と鉄器が出土した。それ以外の杯類と壺26は玄室奥側の石室床面に並べられた状態である。杯の蓋と身を合わせたものではなく、杯身で伏せて置かれたものがあり、杯蓋も正逆両方の置き方がある。また、2箇所では2点が重ねて置かれていた。伏せて置かれたものを含んでおり、使用の状態ではなく片付けられた状態とみられる。これらが石室床面上であるのに対し、壺28だけが棺台と考えた奥壁前の石のうち西側の石に乗る形で出土した（図13-3）。他よりも約20cm上である。石室使用の最終段階に土を入れる場合があると考えているが⁽⁴⁾、その上にこれが配された可能性がある。鉄器は須恵器群の手前を中心に出土しており、2点はそれらから離れた位置である。

出土遺物（図14～16） 須恵器杯蓋・身は、いずれも若干の歪みがある製品である。色調や胎土の特徴はあまり揃わない。杯蓋1・5・6・7の天井部、杯身14・22・24の内底には当具圧痕がある。また、杯蓋3には×、杯身16には直線、同20にはIX字形のヘラ記号がある。

杯蓋1は外面肩部に凹線があり口縁端に面をもつ。それ以外の杯蓋は上部が平たく口縁部が垂直気味に下がるものが多く、なかでも2・5・8・9は上部が広く平たい器形である。11は口径12.9cmとやや小さいが、器形は他と大きくは違わない。他は口径13.7～15.3cm、器高3.9～4.8cmで、法量はかなりばらつく。

杯身のうち13は口縁端部に面をもつ。16⁽⁵⁾・19・20は口縁部の立ち上がりが低いが、他は比較的高く、なかでも13・14・21・23は高さがある。ただし、その4点も口径11.6～13.3cm、器高4.3～4.7cmで、口径はかなりばらつく。

杯蓋上部外面、杯身底面の調整は回転ヘラケズリであるが、範囲は広狭がある。また、1・3・5～12・14～16・21では、頂部にヘラケズリがかからない箇所が残る。ヘラケズリの省略というよりも、ヘラケズリをごく浅く雑にかけのを常とするため、わずかに窪み気味に作った頂部に十分にヘラケズリがかからないことが多いようである。ロクロ回転は16以外は右回りである。

口縁部の立ち上がりが低い杯身20は追葬に伴うものであろう。杯身16・19、杯蓋7・12もそのように考える。

13・14・16・18・19・21・23・24では口縁部や受け部の端に小さな剥離状の欠損が見られ、副葬以前の使用で生じた傷の可能性がある。杯蓋1と杯身15は外面に赤色顔料が部分的に付着する。

提瓶25は器高16.7cmと小形である。環状の耳と外に開く口縁部をもつ。壺・甕も小形である。壺

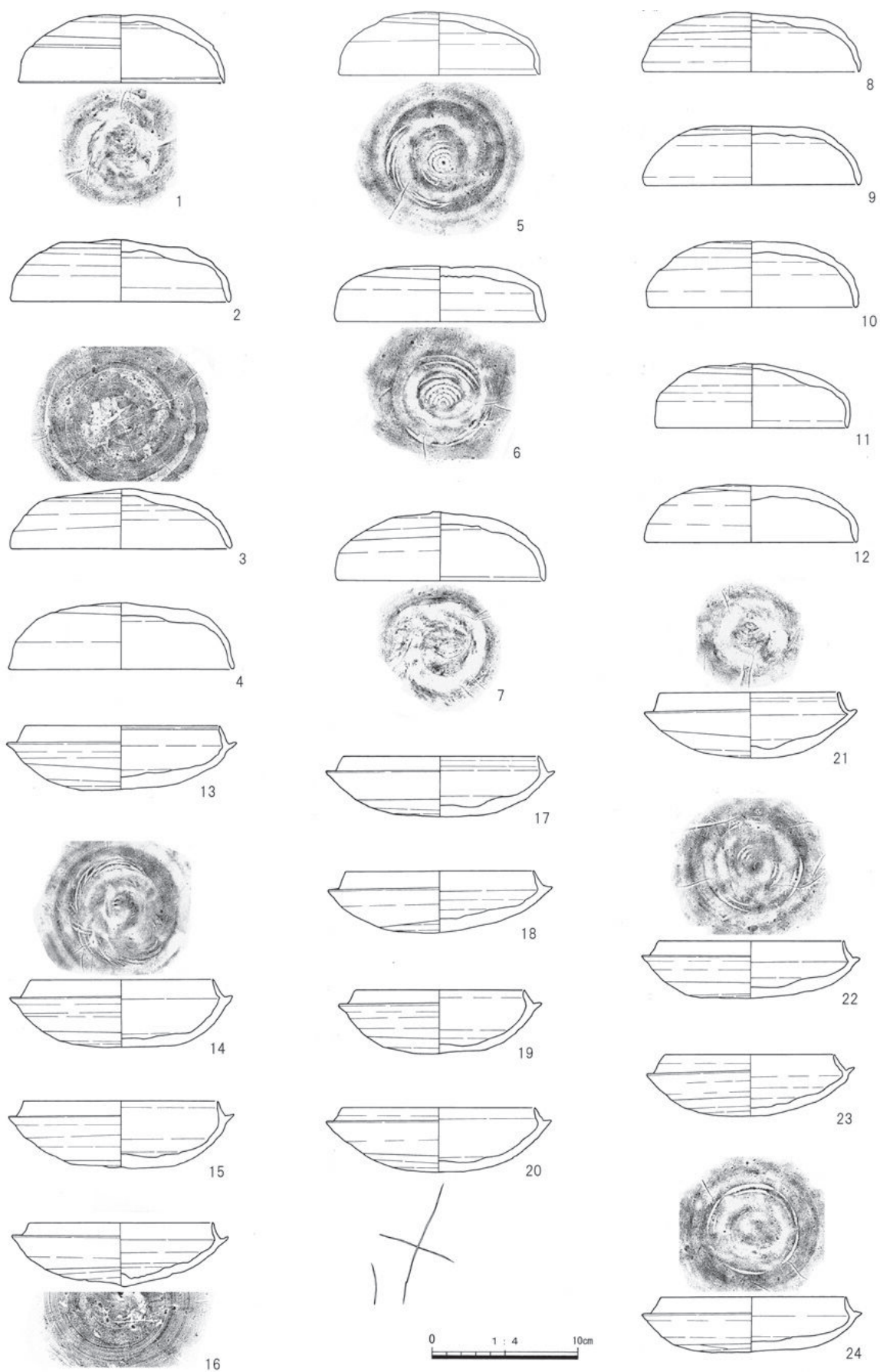
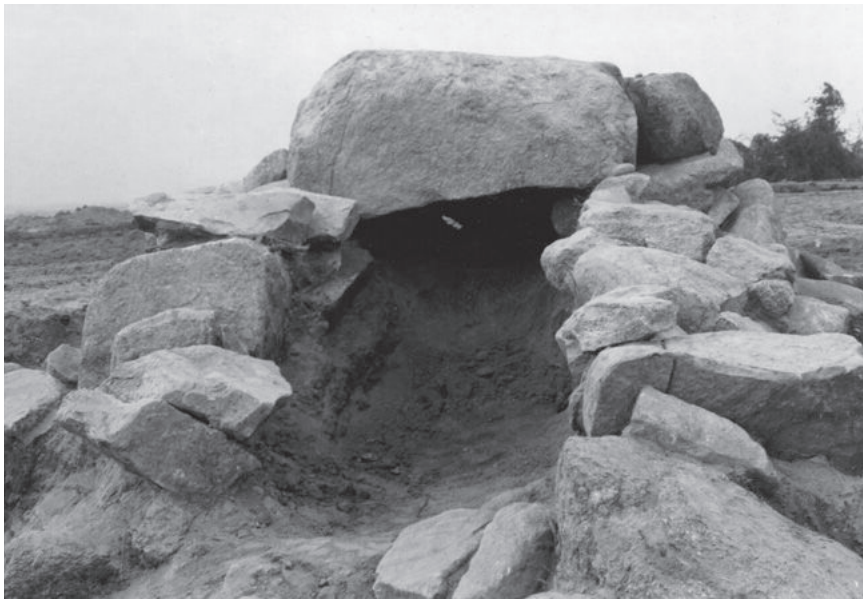


图14 第3石室出土遺物 (1) 1 : 4



1 石室



2 遺物出土状況
(玄室前側)



3 遺物出土状況
(玄室奥側)
(1～3：南から)

図13 第3石室

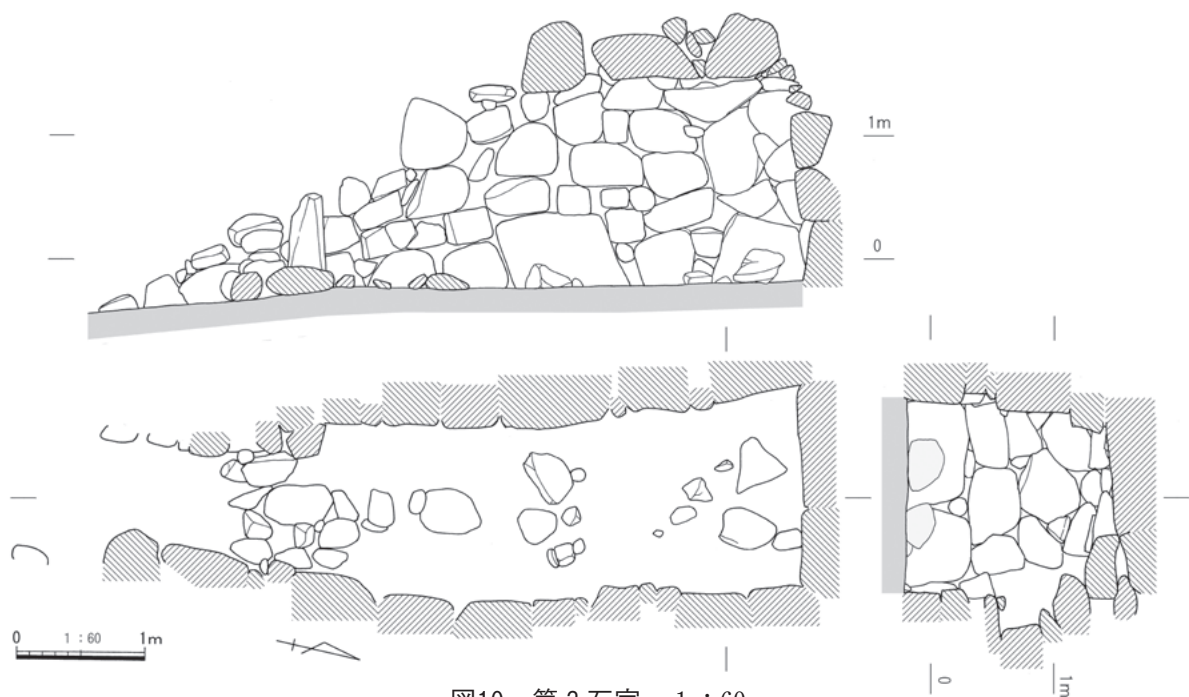


図10 第3石室 1:60

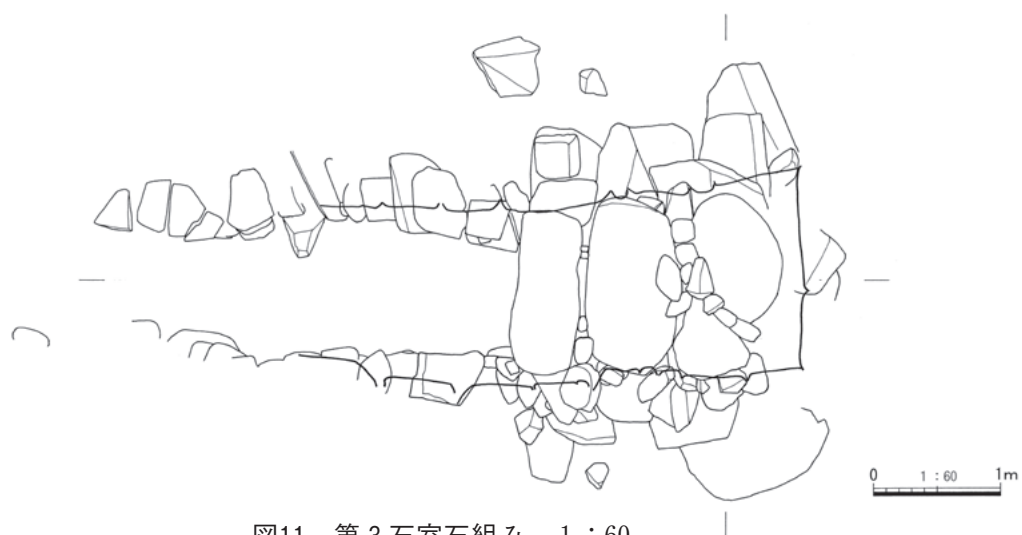


図11 第3石室石組み 1:60

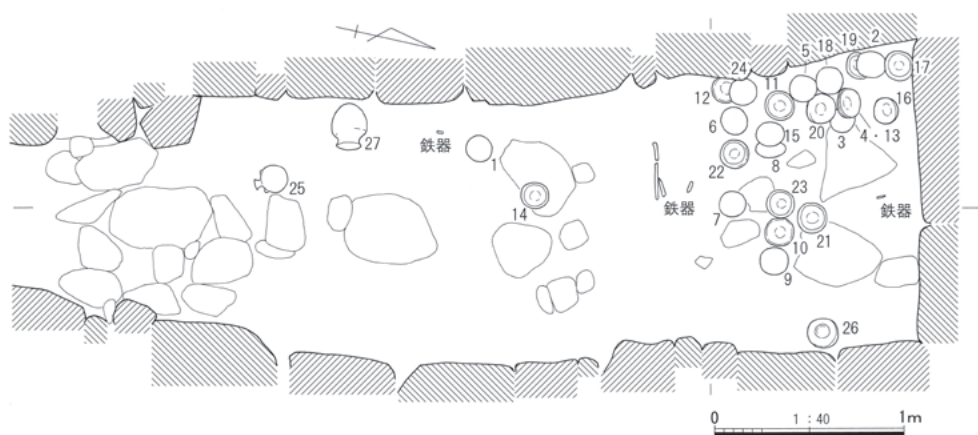


図12 第3石室遺物出土状況 1:40

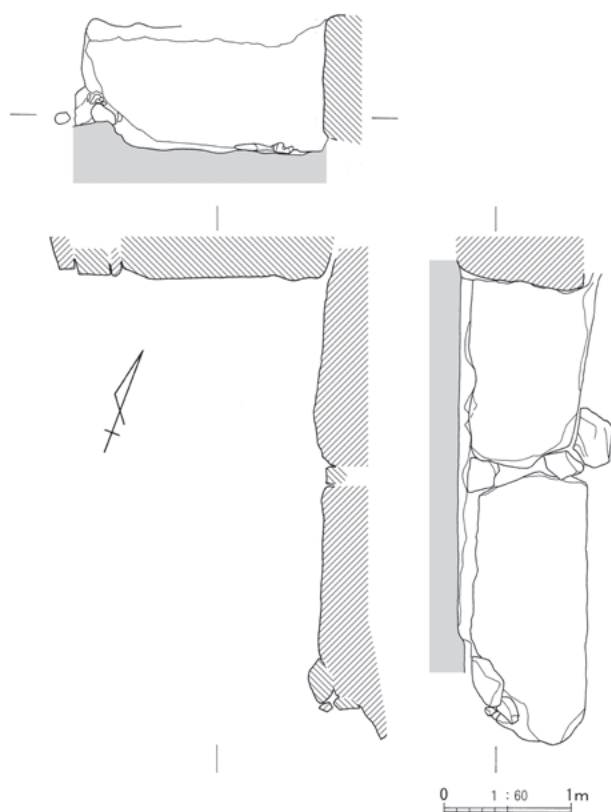


図8 後円部石室 1:60

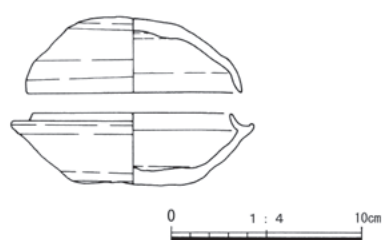


図9 伝 八幡大塚古墳出土須恵器 1:4

5 後円部石室

掘削で生じた崖面に石室の一部が残存する(図8)。高さ90cm～1.0m、幅1.5～2.2mと、よく似た大きさの3石がL字形に残る。奥壁は1石の側とみられ、他と同様に南に開口する石室で、奥壁幅2m⁽²⁾、玄室残存長さ3.7mである。残存状況から、奥壁は3段で横目地が通る石組みの石室であったことが想像される。なお、註に記したようにわかりづらいところがあるが、石室掘り方底面まで掘り下げられた状況であり、石室床面は図に表示された位置よりも高くなるとみられる。床面は三角形の平面形で遺存したかと思われるが、発掘調査資料にはこの石室からの出土遺物はない。

以前、工事関係者が所持する八幡大塚2号墳出土須恵器杯蓋・身が報告されたが(小林・野崎・横田1997)(図9)、TK217型式の古い段階のもので、前方部石室・第3石室の須恵器の年代とは合わない。工事範囲に全く別の古墳が所在したのではないとすれば、この石室の追葬に伴う須恵器ではないか。石室床面が掘り下げられているとすれば、それは調査以前になされたのではないかと想像している。

6 第3石室

石室 南に開口する左片袖式の横穴式石室である(図10)。前方部のくびれ部近くに位置するが、墳丘は削られ、残存した前方部墳丘をとりまくように形成された削平面の端に石室のみが所在する状態であった。玄室奥側の北東隅付近は掘削工事で損壊し、石が抜けている。玄室前半から羨道にかけては削り取られたか流出かで遺存状態が良くないが、玄室奥側には天井石3石が遺存する。

羨道先端に少し離れて所在する石までとすると6.3mであるが、壁面を形成する石の端までとすれば、石室全長は5.6mである。長さ3.8mの玄室は、奥壁幅が1.60mであるのに対し前端は1.20mと狭く、平面形は羽子板形である。東西両側壁基部のラインは緩く湾曲する。玄室の高さは奥壁部分で1.75mである。羨道の軸線は玄室軸線に対して斜めとも言えるが、湾曲した玄室主軸をそのまま延長したような平面形である。羨道は長さ約1.8m、玄門部で幅80cm、前端付近で70cmである。

石材には貝殻が付着するものがあり、海浜の転石が用材である。奥壁と側壁の石組みに差はなく、最下段に高さ50～60cmのやや大きな石を配し、その上に厚さ30～40cmの石を積んでおり、ほぼ5

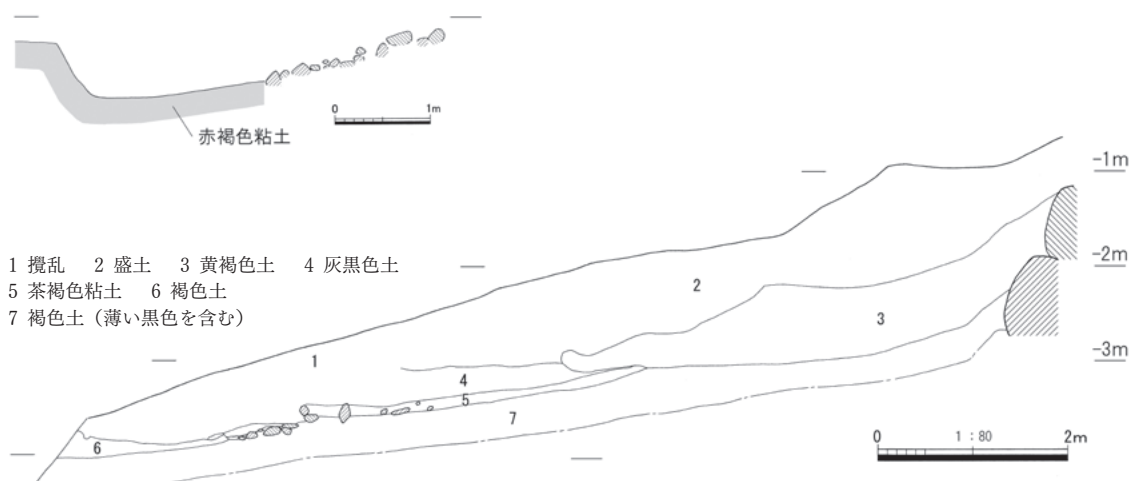


図7 墳丘断面 1 : 80

墳丘全体が畑として利用されていた。前方部は斜面に狭長な畑が2段に設けられ、上面も全体が畑である（図5－1・2）。墳端は後円部南側が下降するようである。南側をのぞく墳丘外側3方には幅9mほどの畑が広がる。平坦な畑のように見え、墳丘外側に平坦面を設けるなどがなされた可能性がある。

墳丘の大きさは、空中写真で計測すると全長64m、後円部径26m、前方部長41m、前方部幅32mで、前方部を北東に向ける。古墳の墳端付近の畦畔は墳端の位置を正確に示すものではなく、現地で検討することもできないため、数値は1つの目安でしかないが、後円部に対して前方部がきわめて長い墳形と言うことはできる⁽¹⁾。

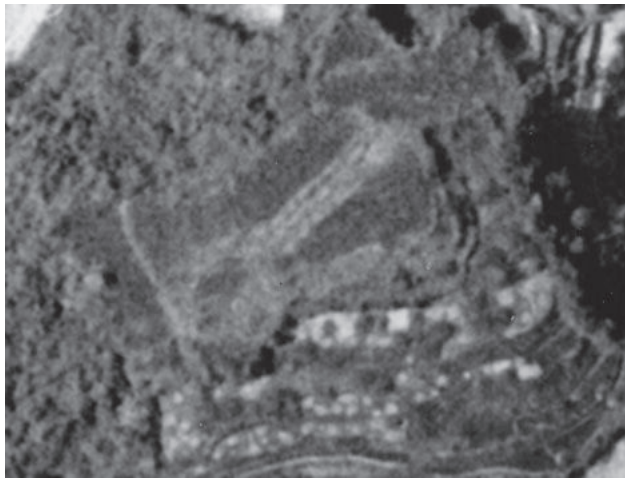
なお、図4以降での北方位は磁北である。調査当時の磁北は、座標北に対して6°20′西に振れる。

また、出土遺物については、土器、金属器、その他で、それぞれ連番を付している。

墳丘盛土 図7上段は墳丘の西側での断面であるが、断面の位置が不明である。赤褐色粘土を切り込む落ち込みがあり、その底面から葺石面が緩い傾斜で上がっていくとされる。礫は10～25cmの大きさである。葺石としては角度が緩すぎるが、崩落した葺石の上面と言えなくもない。しかし、八幡大塚古墳の時期に葺石を伴う古墳がないことに加えて、位置と高さが不明で墳丘下の遺構等の可能性もあり、葺石があると積極的に評価することはできない。

図7下段は残存墳丘の西斜面に設けられたトレンチ南壁の断面で、表示の高さは墳丘測量図と同じである。トレンチ東端（図右端）の2石のうち上側が前方部石室天井石、下側が玄室西壁上段石材となる。墳丘は厚さ40cm前後の黄褐色土、灰黒色土等からなることがわかる。5・6層の礫が図7上段断面の礫にあたるのかもしれない。なお、トレンチの2石が接する高さが石室天井石下面の高さになるとすれば、石室0mは墳丘測量図の－4.0mにおおむね相当することになる。

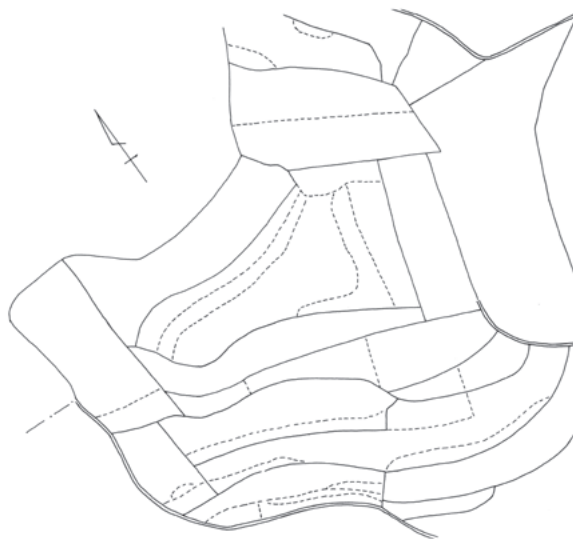
3つの石室の床面高さは正確にはわからない。第3石室が－6m、後円部石室が－9.5m付近かと思われ、西側にかなり下降する。山頂の稜線は西に向かって一度下降するが、その地形によるものである。



1 1963年4月



2 1961年7月



3 公図 作成年・縮尺不明



4 1970年4月

図5 工事前後の地形



図6 工事前の地形（丘陵を南東から見る）
写真中央が後円部後端付近。右に前方部。



图3 周边地形 1 : 10,000



图4 墳丘測量図 1 : 600

急の調査がなされた。

名称と記載内容から、①～③は同一の古墳を指し、④もその内容を伝えるものとみてよい。

さて、八幡大塚1号墳についてであるが、発掘調査の経緯を簡単に記した鎌木1967に、既知のものをⅠ号墳、新たに発見された横穴式石室をⅡ号墳、Ⅲ号墳と呼ぶと記されており、1号墳とされた古墳は、①～④、あるいは⑤となる。発掘調査資料のなかに旧1号墳付近表面と記されたラベルが付く須恵器片91（図49）があり、以前調査され位置がわかる⑤八幡山古墳が1号墳であると考えられる。とはいえ、過去に失われた石室、つまり①～④を指すとのメモも別にあり、この問題ははっきりしない。

鎌木1967にはⅡ号墳とⅢ号墳の調査成果が記されるが、実測図によれば、さらに4号墳が調査されている。個別の石室の状態で調査されたわけであるが、下記のように大形の前方後円墳と判断すると、この3つの横穴式石室は同一の墳丘に含まれる。そして後円部石室と判断できるのは4号墳（4号石室）で、2号墳は前方部石室となる。2号墳の名を残すことも考慮したが、こうした状況からすると旧名称を続けて用いることはむずかしいと言わざるをえない。北浦八幡山大塚古墳が適切な名称となるが、これまでの名称を引き継ぐ必要もあるため、八幡大塚古墳とする。

4 墳形と墳丘

墳丘は遺存しておらず、過去の資料による推定である。

墳形 調査時に残存していた墳丘は不整形な楕円形で、南北26m、東西24m、高さ約5mである（図4）。これは工事による掘削を受けた後の規模・形状であり、円丘の裾は崖状になり、周囲に削平面が広がる（写真2）。

工事前の墳丘形状を知ることができる資料として、空中写真と現地の写真、公図（切図）がある。図5-1に昭和38（1963）年の国土地理院空中写真、図5-2に昭和36（1961）年のものを示したが、そこには前方後円墳の墳形を見ることができる。前方後円墳に見まがう丘陵や畦畔形状もあるため無批判に依拠することはできず、前方後円墳とした場合、資料が整合するかを考える必要がある。

写真は不鮮明であるが、図5-4に写る円形の地形が図4の「八幡大塚2号墳の墳丘」にあたる。これと上段の写真を対照すると、「八幡大塚2号墳の石室」は「前方部」に位置することになる。

調査前の墳丘立面がわかるのが図6で、「前方部」は上面が平坦で長くのびており、円墳状の地形は、これが削られてできたことがわかる。「八幡大塚2号墳の石室」は「前方部」の中に位置しているが、山頂の円墳が完全に埋め立てられることは考えがたく、前方部に石室があったとするのが適切である。後円部にあたる位置に、以下に述べるように「八幡大塚2号墳」よりも規模の大きな石室があることも、前方後円墳であったとの判断を支持する。

調査では、「2号墳」のほかに「3号墳」と「4号墳」が調査されている。以下では「2号墳」を前方部石室、後円部に所在する「4号墳」を後円部石室と呼ぶ。くびれ部近くに位置する「3号墳」は第3石室と呼ぶ。1墳丘に3つの横穴式石室をもつ例は少ないが、奈良県二塚古墳や京都府牧正一古墳などが知られている。

工事着手前の墳丘は、図5-2や図6からわかるように後円部は上部が失われて前方部よりも低くなる。大形の石室が石材採取によって破壊されたと伝えられるが（前述②～④）、これは後円部石室を指し、天井石などの採取にあたって後円部上部が失われたと考えられる。

ければならないものの、律令制下の備前国児島郡三宅郷は児島の北東部一帯とみられており、郡地区がこの範囲で最も広い平地の1つであることや、児島北東部で後期古墳が最も多く築かれるのが郡付近であることからすれば、郡地区に屯倉を想定することが妥当と考えられる。

3 立地と古墳の名称

(1) 古墳の築造場所

古墳が築かれたのは児島北東岸の岬状の小丘陵、八幡山の山頂である(図2・3)。丘陵の南西には郡港、東側には北浦港がある。埋め立て等で海沿いの平地は広くなっており、古墳時代には海に大きく突き出した地形であった。島であったかにも見えるが、丘陵と南東の山との間は海拔5mであり、背後と接続する。

山頂は南西(37.3m)と北東(40.8m)の両端が高く、その間を尾根がつなぐ形状であった。南斜面は比較的緩やかな傾斜で、かつては畑として利用され、北西側は急傾斜で下降し海岸に達する。工事によって丘陵の上部は約12m切り下げられ、現在は介護施設とその駐車場(28.9m)になっている。

南西の頂部には八幡山古墳が所在した。採石のための丘陵掘削が古墳に及ぶことになったため昭和27年に緊急の調査がなされた。調査時にはすでに石室の上部と前側が失われていたが、南に開口する横穴式石室で、奥壁幅1.2m、残存長さ3.9mである。出土した須恵器は7世紀中頃と7世紀末頃の2時期であるが、前者が築造の年代であるのか、それも追葬であるのか明らかでない。

なお、大正5年の2.5万分1地図では丘陵の西頂部に神社の記号がある。かつては神社が所在し、それがこの丘陵の名前になったと思われる。

(2) 古墳の名称

これまで八幡大塚2号墳という名称が用いられ、すでに数多くの文献に記されてきた。そうした名称の変更は軽々しくは行いがたいが、古墳の全体像を示す機会に八幡大塚古墳に変更する。

このことについて、これまでに示された情報を整理しつつ説明する。古墳の位置と名称が混乱していることは以前にも指摘されたが(神谷2003)、2号墳についての情報が断片的であったことに加え、1号墳がどの古墳であるのか不明確なことによる。

古墳が所在する丘陵である八幡山や、字名の太塚を冠する古墳については、以下の記録がある。

①北浦の丸山、太塚(永山1930)：一覧に名称のみが記載される。

②北浦太塚古墳(鎌木・間壁1954)：「北浦部落西方の台地上に存したが石材採取のため全壊した。かなり大きな横穴式石室であったとの事である。」

③郡 八幡山 太塚古墳(鎌木1962)：「北浦部落西方の台地上にあった大きな横穴式石室墳、今はなし。」この文献では八幡山を大字北浦の西に隣接する大字郡とするが、丘陵の一部が郡に属することによる誤記であろう。

④「八幡山と呼ばれており、数基の横穴式石室をもつ古墳が知られていた。そのうちの、すでに消失した1基は、牛飼いが牛とともに、雨やどりができるほどの大きさだったという」(間壁・間壁1972)。

⑤八幡山古墳(鎌木・間壁1954・鎌木1962)：前述。昭和27(1952)年に鎌木義昌氏によって緊

での築造が優勢と言えるようである。なお、沿岸部のうち、北岸・東岸地域では築造数が少ない。

集落遺跡では5世紀後半の玉野市田井の浦遺跡がある。遺跡の全体像は明らかでないが、製塩土器のほか鹿角加工未成品、5世紀後半の須恵器が出土している。農業以外の生業も行い、他地域の物資を入手することができた集団の存在が推定できる。

後期になると古墳の築造状況は大きく変わる。児島の南沖合に所在する喜兵衛島は香川県直島町に属し可耕地がほとんどない小島であるが、MT15型式期から古墳の築造がはじまり、最終的に15基からなる群集墳が形成される。TK10型式期には倉敷市金浜古墳や喜兵衛島2号墳など、横穴式石室をもつ古墳が築造される。玉野市出崎灰出古墳は児島南岸の岬の先端に築かれた古墳で、上記2古墳と同様の横穴式石室をもつ2基の古墳として調査されたが、石室は近接し埴輪を伴っており、全長20m台の小規模な前方後円墳の可能性が考えられる。

TK43型式期以降、横穴式石室墳の築造はさらに活発になる。玉野市地藏山古墳や倉敷市琴海1号墳のように沿岸部に立地するものが大半を占め、内陸の小平野での築造数を凌駕する。沿岸部のうち最も築造が多いのは児島西岸から西に所在する連島にかけてで、北岸や東岸はそれ以前にくらべれば古墳の数は多くなるが、西岸部ほどの数ではない。多くの場合、単独あるいは数基が一般的なあり方であるが、西岸部では6基からなる倉敷市湾戸古墳群、同三軒屋古墳群などが形成される。そうしたあり方からすれば、横穴式石室墳13基が群集する島嶼部の喜兵衛島古墳群は特筆される存在といえる。

TK43型式以降、中部瀬戸内地域では土器製塩が活発になされたことがよく知られている。喜兵衛島遺跡や倉敷市阿津走出遺跡、玉野市出崎長崎遺跡など、大規模な土器廃棄層をもつ遺跡が形成された。

児島北東岸の後期古墳 児島北東岸には、八幡大塚古墳以外に13基の横穴式石室墳が築かれる（図2）。それ以前に築かれたとみられるのは箱式石棺を埋葬施設とする石切古墳と、前半期と推定の1基だけで、大幅な築造数の増加といえる。これらは北浦から東側の地域に散在して分布する。これらのうち稲荷山古墳（鎌木・間壁1954、鎌木1962）、箱崎古墳（玉木・白石・小林2000）、北浦旗山2号墳（神谷2003）、八幡山古墳（鎌木・間壁1954、鎌木1962）、名称未定古墳（間壁2013）については報告がある。いずれも部分的な調査や出土資料報告である。これらのうち北浦旗山2号墳、箱崎古墳、八幡山古墳の3基からは、神谷正義氏が指摘するように石錘が出土している。円礫を周回するように敲打を加え、紐掛け面を作り出したもので、弥生時代後期に見られるものと変わりはない。この種の石錘が古墳時代後期まで存続することと、これを副葬品として用いる地域性を指摘できる。

児島屯倉 6世紀の児島を語るうえで、また、八幡大塚古墳を考える際に重要な要素となるのが児島屯倉である。欽明天皇17（556）年、ヤマト政権の大臣、蘇我稲目がみずから児島におもむいて児島屯倉を設置した。この前年には吉備の5郡に白猪屯倉が設置される。また、敏達天皇12（583）年には吉備海部直羽嶋が日系の百済高官である日羅の招聘に成功し、政権は大伴糟手子連を遣わして児島屯倉で日羅を慰労したことが記されており、ここが外交館舎の機能も有していたと考えられている。

この児島屯倉の位置については八幡大塚古墳の南西に位置する郡地内に想定されてきた。現状で幅約800m、奥行き約1kmの谷平野で、地名の郡は屯倉の後に設けられた児島郡家の遺称と考えられてきた（永山1930）。八幡大塚古墳の内容と地名にもとづく推定が補強し合うような論は避けな

ではなく、西日本各地に広範に認められる現象であるが、岡山市貝殻山遺跡（284m）や倉敷市種松山真菰谷遺跡（180m）など、典型的な高地性集落が形成される。ただし、中期の土器型式名で知られる倉敷市前山遺跡が標高60m、同時期の城遺跡が50mの尾根上であることに留意する必要がある。高所に形成される集落は争乱や社会の緊張を反映したもの、あるいは海上航路の見張りや交易にかかわるなど様々な解釈があるが、児島を含む瀬戸内海の島嶼・沿岸だけでなく、より広域な範囲の集落立地から読み解く必要がある。

第2は土器製塩の開始である。製塩そのものはより古い段階からあったであろうが、専用の土器を用いての製塩は、中期中葉の倉敷市菰池オレントウ遺跡など、児島から小豆島にかけての地域ではじまる。

3つめは他地域からの祭祀遺物の搬入である。八幡大塚古墳に近接する岡山市飽浦山本ノ辻からは細形銅剣3点が出土しており、玉野市由加山からは平形銅剣5点、さらに倉敷市広江浜遺跡から銅戈が出土している。

第4はサヌカイトの豊富さであり、遺構数で換算すると、倉敷市城遺跡や同池尻遺跡などの石鏃の保有量は、備前・備中の瀬戸内海北岸地域の集落よりも多い。

第1に示した高地性集落がかかわるかは今後の課題であるが、第2から第4までの特性が示すのは地域外との交流である。3点目が示すのは、西の地域との交流であり、西部瀬戸内地域を分布の中心域とする平形銅剣が、さらには、より西の北部九州から細形銅剣や銅戈がもたらされた。専用の土器を用いての製塩も、土器製塩のその後の展開を見れば交易用物資の生産であることは明らかである。香川県金山で採取されたサヌカイトは吉備の瀬戸内海北岸域にもたらされるが、児島の集団が交易の中継を担ったことをサヌカイト保有量の多さが示している。大陸につながる北部九州から大阪湾に至る東西のルートと、南北のルートは児島で交差することになる。鉄器化によって南北の物資移動は減少するとしても、東西方向のそれは増加するとみてよい。瀬戸内海中部の中央という地理上の特性にもとづいた交易の中継地としての機能は、近世、近代まで続くことになる。

弥生時代後期には、土器製塩は瀬戸内海南北兩岸の沖積平野に立地する集落でおもになされるようになり、児島での塩生産は低調となる。この時期の遺跡としてよく知られるのは倉敷市向木見遺跡で、出土の特殊器台をもとに向木見型が設定された。

弥生時代後期の流通をうかがわせるものは少ないが、玉野市日比沖の瀬戸内海から突線鈕式銅鐸の破片が出土している。後期後半に銅鐸祭祀が終了し、それまで用いられていた銅鐸を破碎し銅素材として運搬中に海に没したとみられる。どこからどこへは不明であるが、児島南沖の航路の存在を示すものである。

古墳時代 前期・中期の古墳の築造は他地域にくらべて低調である。島の中央に位置する谷平野に所在する玉野市先祖山（滝堀の内）古墳は全長30mの前方後円墳で竪穴式石槨をもち、墳形や立地から前期の築造とみられる。南岸の倉敷市児島田の口に所在する丸山古墳は、海浜の小丘陵に築かれた径25mの円墳である。前方後円墳との見解もあるが、根拠が不明確で円墳と判断しておく。沿岸部に所在する古墳の場合、どこまでを海浜型、つまり航路からの眺望を重視した立地をとった古墳とすべきかむずかしいが、この古墳はそれにあたるとみられる。これら以外に、小規模な方墳で簡略な竪穴式石槨をもつ玉野市滝鐘鋳場1号墳がある。また、発掘調査資料はないが、箱式石棺が各所に分布することが知られている。前期・中期の古墳は内陸の谷平野と沿岸部に分布し、前者

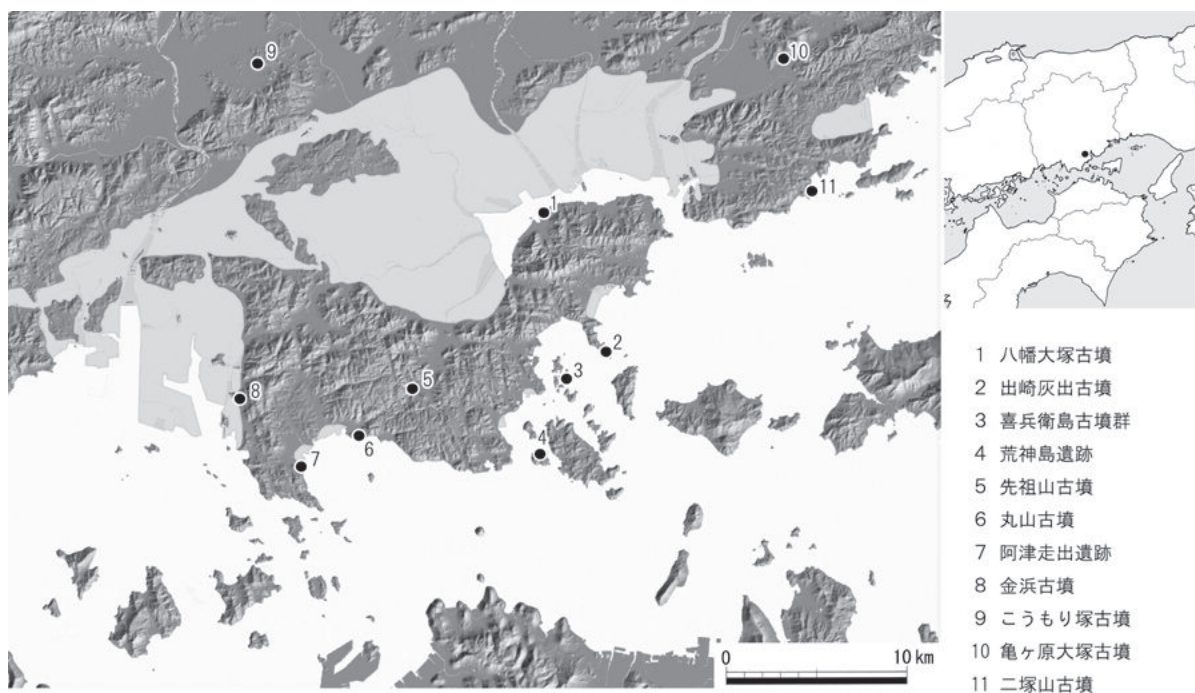


図1 古墳位置と関連古墳・遺跡



図2 八幡大塚古墳と周辺の後期古墳 1:40,000

象を中心に大形獣の化石骨が多数採集されている。

児島の北西岸から対岸にかけての地域は、西日本有数の縄文時代貝塚の集中地帯である。倉敷市磯の森貝塚、同福田貝塚、岡山市彦崎貝塚など、前期から晩期に至る各時期の土器型式の名祖となった遺跡が所在している。

弥生時代 弥生時代前期の遺跡は倉敷市広江浜遺跡など海浜の平地に所在するものが知られている。そして、児島の特性が顕著に現れるのは弥生時代中期からである。

その1つは高地性集落の形成である。中期末を中心とする高地性集落の形成は児島に限ったこと

調査は墓道で検出された排水溝に重点が置かれた。他に、石室の石組み全体の検出と実測、写真撮影などが行われた。墳丘盛土についての調査はなされていないが、調査期間の制約が大きかったのかもしれない。石棺は玄室奥壁をはずして石室から取り出され、岡山県立博物館に移設された。この後、8月22日に2号墳は完全に消滅した。

岡山県教育委員会：伊藤晃、岡本明郎、河本清、葛原克人、正岡睦夫、栗野克己、泉本知秀、松本和男、新東晃一

岡山市教育委員会：出宮徳尚、根木修、植田心壮、井上、山本

出土遺物の大部分は昭和49年2月に国保有となった。

詳細を欠く記載となったが、当時の記録やメモから把握できるのは以上であり、関係の方々のお名前を十分に記すことはむずかしい。

八幡大塚古墳の経緯は岡山県における文化財保存問題の典型、開発事業による遺跡破壊を示すものとして、当時の書籍（間壁・間壁1972）に記された。昭和40年代は、開発事業の急増を受けて埋蔵文化財保護・調査の体制が構築されていく時期である。体制を含めてさまざまな要件が十分とはいえないこの時期に、この問題に向き合った方々の苦勞はいかほどであったかは、想像に余りある。

第3次調査が緊急に生じたなどのため、後述のように第1次・第2次調査と第3次調査の接続は十分でなく一部に不明な箇所がある。また、現在の観点からすれば不十分な点もある。やむをえないこととはいえ、惜しまれる部分である。

2 地理的・歴史的環境

（1）児島の地形

八幡大塚古墳は岡山市南区北浦字大塚に所在した。現在、児島は干拓によって瀬戸内海北岸の沖積平野と接続し半島となっているが、古墳時代には瀬戸内の島であった。東西約27km、南北約15kmの東西に長い大きな島である。最高所は標高403mの金甲山で、200～300mの山も多く、山がちな地形と言える。大きな谷平野は島の中部と西部に所在し、沿岸に小規模な平地が点在する。北浦を含め、半島の大部分は花崗岩からなる。

児島の沿岸はリアス式であるが、塩田の形成や埋め立てによって平地が拡大し、出入りが少ない海岸線となっている箇所も多い。古墳が所在する北浦は児島の北東岸に位置するが、北浦から東側は、海岸にむかって北に伸びる細長い尾根が平行に並び、それらの間に小さな平地が形成された地形である。ここには北浦のほか、飽浦、宮浦といった地名が連なる。

児島北東岸から北の旭川河口付近の古墳時代海岸線まで4.9～7.5km、児島南岸から四国北岸までの距離は最も近い部分で6.8kmであり、児島は当時の瀬戸内海の中央に位置する。

（2）歴史的環境

児島は平地が少ない地形であるが、研究史上重要な遺跡が数多く所在する。

旧石器・縄文時代 倉敷市鷺羽山遺跡や玉野市宮田山遺跡は、旧石器研究の初期に調査や資料報告がなされた遺跡であり、児島南端の丘陵上に所在する。旧石器時代には海水面が低下して瀬戸内海はなく、児島南岸と四国の間に平原がひろがるが、遺跡はそれを見下ろす位置であり、平原に棲息する動物群を見張った場と考えられている。また、児島南岸の倉敷市下津井沖からは、ナウマン

八幡大塚古墳の研究

宇 垣 匡 雅

1 調査の体制と経過

昭和40年11月27日、岡山市（現在南区）北浦で丘陵の掘削工事中に古墳が発見された。工事は、老人ホーム建設用地造成のため丘陵の上部を削平する大規模なものである。石室前端の石がブルドーザーで動かされて石室（2号墳）が開いたことが発見の契機となった。

古墳の発見を受けて岡山県教育委員会・岡山市教育委員会・事業者の3者で協議がなされ、工事を一時停止し発掘調査を実施することになった。

第1次調査

昭和40年11月27日～12月20日

鎌木義昌氏（岡山県遺跡保護調査団団長・瀬戸内考古学研究所所長）に依頼して調査を実施。経費は県・市・事業者が負担。

第2次調査

昭和41年1月14日～2月6日

県が国の緊急調査補助金を受け、鎌木義昌氏（八幡大塚古墳発掘調査団団長）に委託して調査を実施した。

1次調査では2号墳（前方部石室）と3号墳（第3石室）の石室内遺物の検出を行い、平面図等の作成の後に取り上げを実施し、2次調査で両石室の実測図作成等を行ったようである。また、2次調査では2号墳（前方部石室）の石棺棺内の調査に主眼が置かれたようである。4号墳（後円部石室）の調査は1次・2次のいずれかわからない。墳丘については、1次で部分的な調査がなされ、2次では断ち割りトレンチが入れられた。

岡山県教育委員会：神野力、森忠彦、高橋護

岡山市教育委員会：宮原秀臣、角南基史

八幡大塚古墳発掘調査団：鎌木義昌、近藤義郎、三杉兼行

実測図の記名から、鎌木氏らの他に、高橋護、伊藤、山田友治、正岡睦夫の各氏が調査に携わり、春成秀爾氏の支援があったことがわかる。

重要な古墳であることが明らかになったため現状保存の方針がとられ、昭和41年3月には保存整備委員会が設けられて6月までに芝の植え付け等の工事も実施された。

しかし、昭和46年の末に至って工事計画が再燃した。県教育委員会・市教育委員会は事業者に対し保存を強く要望したが、昭和47年6月9日に工事が再開された。県教育委員会・市教育委員会は現地に急行して事業者と協議し、調査のための期間を得て県教委・市教委で2号墳石室および墳丘の調査を行うこととした。

第3次調査

昭和47年6月11日～7月15日

岡山県教育委員会と岡山市教育委員会が合同で調査を実施した。



写真 3 前方部石室と石棺



写真 4 閉塞施設石室側



写真 5 石棺内副葬品



写真1 垂飾付耳飾り



写真2 八幡大塚古墳残存墳丘

執筆者紹介

内 池 英 樹
岡山県立博物館 副館長（学芸課長事務取扱）

岡 崎 有 紀
岡山県立博物館 学芸員

宇 垣 匡 雅
岡山県立博物館 主 事

岡山県立博物館研究報告 第45号

発 行 日 令和7（2025）年3月7日

編集発行 岡山県立博物館
〒703-8257 岡山市北区後楽園1-5
☎086-272-1149

印 刷 株式会社中野コロタイプ
〒701-2142 岡山市北区玉柏390

ISSN 0387-3676